

東野遺跡
(第二分冊)

東野遺跡

(第2分冊)

二〇〇七

財団法人
岐阜県教育文化財団文化財保護センター

2007

財団法人 岐阜県教育文化財団文化財保護センター

ひ　が　し　の
東　野　遺　跡

(第2分冊)

2007

財団法人 岐阜県教育文化財団文化財保護センター

目 次 (第2分冊)

目次

第4章 自然科学分析

第1節 分析の概要	1
第2節 基盤層のテフラ分析	3
第3節 古墳時代前期竪穴住居跡出土炭化材の樹種同定	7
第4節 放射性炭素年代測定	30
第5節 土器胎土と粘土塊分析	33
第6節 竪穴住居跡出土の大型植物化石	40
第5章 まとめ	41
写真図版	

第1分冊 目次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過と方法	2
第2章 遺跡の環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	8
第3章 調査の結果	10
第1節 基本層序	10
第2節 遺構・遺物の概要	12
第3節 旧石器時代	23
第4節 繩文時代	25
第5節 弥生時代	82
第6節 古墳時代前期	82
第7節 古墳時代後期	221
第8節 古代	261
第9節 中世	266
第10節 時期不明	268

挿図目次

図254 堆積物の特徴と鉱物組成図及び縮折率分布図	5	図261 東野IV期（古墳時代前期）の堅立柱建物軸方位分布図	45
図255 嚻穴住居跡出土培土材及JSZ-2		図262 各遺跡の堅穴住居跡大きさ分布図	46
出土土器陶片類の層年較正結果	32	図263 2本柱堅穴住居上大型堅穴住居跡構図	46
図256 繩文時代主要遺構図	41	図264 当遺跡の大型堅立柱建物跡	47
図257 各遺跡における主要石器出土割合	42	図265 坚立柱建物跡の大きさ分布図	48
図258 各遺跡における石器石材割合	42	図266 前山古墳出土物断面図	49
図259 古墳時代前期主要遺構変遷図	43	図267 古墳時代後期主要遺構変遷図	50
図260 和野IV期（古墳時代前期）の堅穴住居軸方位分布図	45	図268 東野V期（古墳時代後期）の堅穴住居軸方位分布図	51

表目次

表194 堆積物の分析結果	6	表204 古墳時代前期の堅穴住居跡出土	
表195 古墳時代前期の堅穴住居跡出土		表205 繩文時代前期の堅穴住居跡出土	25
炭化木材樹種同定結果一覧①	16	表206 古墳時代前期の堅穴住居跡出土	
表196 古墳時代前期の堅穴住居跡出土		表207 古墳時代前期の堅穴住居跡出土	26
炭化木材樹種同定結果一覧②	17	表208 古墳時代前期の堅穴住居跡出土	
表197 古墳時代前期の堅穴住居跡出土		表209 古墳時代前期の堅穴住居跡出土	27
炭化木材樹種同定結果一覧③	18	表210 古墳時代前期の堅穴住居跡出土	
表198 古墳時代前期の堅穴住居跡出土		表211 分析した土器試料とその詳細	28
炭化木材樹種同定結果一覧④	19	表212 土器胎土と土塊土中の粘土及下砂粒の特徴	29
表199 古墳時代前期の堅穴住居跡出土		表213 胎土中の岩石の分類と組み合わせ	30
炭化木材樹種同定結果一覧⑤	20	表214 出土した大型植物化粧の状態	33
表200 古墳時代前期の堅穴住居跡出土		表215 坚立柱建物跡の規模	37
炭化木材樹種同定結果一覧⑥	21	表216 美濃の古代集落消長表	38
表201 古墳時代前期の堅穴住居跡出土			40
炭化木材樹種同定結果一覧⑦	22		48
表202 古墳時代前期の堅穴住居跡出土			51
炭化木材樹種同定結果一覧⑧	23		
表203 古墳時代前期の堅穴住居跡出土			
炭化木材樹種同定結果一覧⑨	24		

写真図目次

図版 1 調査区全景（1）	55	図版50 田石器時代及び繩文時代の遺物	104
図版 2 調査区全景（2）	56	図版51 繩文時代の遺物（1）	105
図版 3 繩文時代の遺構（1）	57	図版52 繩文時代の遺物（2）	106
図版 4 繩文時代の遺構（2）	58	図版53 繩文時代の遺物（3）	107
図版 5 繩文時代の遺構（3）	59	図版54 繩文時代の遺物（4）	108
図版 6 繩文時代の遺構（4）	60	図版55 繩文時代の遺物（5）	109
図版 7 古墳時代前期の遺構（1）	61	図版56 繩文時代の遺物（6）	110
図版 8 古墳時代前期の遺構（2）	62	図版57 繩文時代の遺物及び弥生時代の遺物	111
図版 9 古墳時代前期の遺構（3）	63	図版58 古墳時代前期の遺物（1）	112
図版10 古墳時代前期の遺構（4）	64	図版59 古墳時代前期の遺物（2）	113
図版11 古墳時代前期の遺構（5）	65	図版60 古墳時代前期の遺物（3）	114
図版12 古墳時代前期の遺構（6）	66	図版61 古墳時代前期の遺物（4）	115
図版13 古墳時代前期の遺構（7）	67	図版62 古墳時代前期の遺物（5）	116
図版14 古墳時代前期の遺構（8）	68	図版63 古墳時代前期の遺物（6）	117
図版15 古墳時代前期の遺構（9）	69	図版64 古墳時代前期の遺物（7）	118
図版16 古墳時代前期の遺構（10）	70	図版65 古墳時代前期の遺物（8）	119
図版17 古墳時代前期の遺構（11）	71	図版66 古墳時代前期の遺物（9）	120
図版18 古墳時代前期の遺構（12）	72	図版67 古墳時代前期の遺物（10）	121
図版19 古墳時代前期の遺構（13）	73	図版68 古墳時代前期の遺物（11）	122
図版20 古墳時代前期の遺構（14）	74	図版69 古墳時代前期の遺物（12）	123
図版21 古墳時代前期の遺構（15）	75	図版70 古墳時代前期の遺物（13）	124
図版22 古墳時代前期の遺構（16）	76	図版71 古墳時代前期の遺物（14）	125
図版23 古墳時代前期の遺構（17）	77	図版72 古墳時代前期の遺物（15）	126
図版24 古墳時代前期の遺構（18）	78	図版73 古墳時代前期の遺物（16）	127
図版25 古墳時代前期の遺構（19）	79	図版74 古墳時代前期の遺物（17）	128
図版26 古墳時代前期の遺構（20）	80	図版75 古墳時代前期の遺物（18）	129
図版27 古墳時代前期の遺構（21）	81	図版76 古墳時代前期の遺物（19）	130
図版28 古墳時代前期の遺構（22）	82	図版77 古墳時代前期の遺物（1）	131
図版29 古墳時代前期の遺構（23）	83	図版78 古墳時代前期の遺物（2）	132
図版30 古墳時代前期の遺構（24）	84	図版79 古墳時代前期の遺物（3）	133
図版31 古墳時代前期の遺構（25）	85	図版80 古墳時代中期の遺物	134
図版32 古墳時代中期の遺構（26）	86	81 丘古墳の遺物	135
図版33 古墳時代中期の遺構（27）	87	82 式部村付近大木と堆積物中の動物頭骨等写真	136
図版34 古墳時代中期の遺構（28）	88	83 式部村付近の走査電子顕微鏡写真（1）	137
図版35 古墳時代中期の遺構（29）	89	84 式部村付近の走査電子顕微鏡写真（2）	138
図版36 古墳時代中期の遺構（30）	90	85 式部村付近の走査電子顕微鏡写真（3）	139
図版37 古墳時代中期の遺構（31）	91	86 式部村付近の走査電子顕微鏡写真（4）	140
図版38 古墳時代後期の遺構（1）	92	87 式部村付近の走査電子顕微鏡写真（5）	141
図版39 古墳時代後期の遺構（2）	93	88 式部村付近の走査電子顕微鏡写真（6）	142
図版40 古墳時代後期の遺構（3）	94	89 式部村付近の走査電子顕微鏡写真（7）	143
図版41 古墳時代後期の遺構（4）	95	90 式部村付近の走査電子顕微鏡写真（8）	144
図版42 古墳時代後期の遺構（5）	96	91 式部村付近の走査電子顕微鏡写真（9）	145
図版43 古墳時代後期の遺構（6）	97	92 式部村付近の走査電子顕微鏡写真（10）	146
図版44 古墳時代後期の遺構（7）	98	93 式部村付近の走査電子顕微鏡写真（11）	147
図版45 古墳時代後期及び古代の遺構	99	94 前山古墳組織の走査電子顕微鏡写真（12）	148
図版46 古代の遺構	100	95 前山古墳組織の走査電子顕微鏡写真（13）	149
図版47 時期不明の遺構（1）	101	96 土器胎土と土塊土顕微鏡写真	150
図版48 時期不明の遺構（2）	102	97 嚻穴住居跡床面から検出された粘土塊	151
図版49 時期不明の遺構（3）	103	98 出土した大型植物化石	152

第4章 自然科学分析

第1節 分析の概要

本節では、次節以降に記載する自然科学分析を実施した経緯と、結果の概要及び考察を述べる。

1 基盤層のテフラ分析（第2節）

実施の経緯 堆積した土層について考える場合、供給源がどこか、何によって運搬されたのかをとらえることが重要となる。当遺跡は、地形学的には台地上にあり、河川堆積や崩落性堆積などによる碎屑物（砂や泥など）がもたらされにくい位置にある。当遺跡のVI層の堆積は木曾川の氾濫と考えられる（第3章第1節基本層序参照）が、その上のI層～V層の堆積の要因が明確になっていない。そのため、遺跡の生活面（遺構面）がはつきりと確認できていない。この基盤となっている木曾川泥流堆積物（堆積時期約50,000年前）の上位に堆積する土層が約2mの厚さを持っているため、碎屑物の供給があったことは確実である。低位段丘面が形成された後のことであるから水成とは考えにくく、風成による堆積を考えざるを得ない。そこで、テフラ分析を行い、火山灰の有無を確認することで、堆積要因がある程度明確になると考えた。

結果の概要と考察 基本層序のI層からIV層にかけて火山ガラス含有率の高まりが見られる。この火山ガラスは分析の結果、姶良Tn火山灰を起源とするものであることが判明した。さらに火山ガラス含有率が50%前後であること、円磨されている火山ガラスが多いことから、再堆積の可能性が極めて高いことが判明した。よって、VI層（木曾川泥流堆積物）より上位層は風成による堆積であり、遺跡の生活面は、時代によって大きな変化はないと考えられる。

2 古墳時代前期竪穴住居跡出土炭化材の樹種同定（第3節）

実施の経緯 東野IV期（古墳時代前期）の竪穴住居跡から出土した炭化材は、建築部材として使用されていたものと思われる。建築部材の樹種同定は、閑市の砂行遺跡（弥生時代末期）や美濃加茂市の尾崎遺跡（古墳時代前期・後期）でも行われているが、同定された樹種は、遺跡や時代により違いが認められ、当遺跡とほぼ同時期の尾崎遺跡92号住居跡では、クリが確認されているだけである。また、砂行遺跡では花粉分析結果と炭化材の樹種から周囲に生育していたものを建築部材として利用しているとされている。当遺跡においても、周辺植生を推定する手がかりを得るために、8軒の竪穴住居跡出土炭化材の樹種を同定する必要があると考えた。さらに、SP206の方形に組まれた部材は、建築部材とは異なる樹種である可能性が考えられるため、その確認を行う必要があると考えた。

結果の概要と考察 分析の結果、針葉樹8種、常緑広葉樹7種、落葉広葉樹19種、分類不能広葉樹8種という様々な樹種を確認した。また、屋根材に利用されていただろうススキ属・タケヅキ科を確認した。このことから、当遺跡周辺には豊富な森林が存在していたことが判明した。さらに、当地域の自然植生である照葉樹林が成立していたことから、東野IV期（古墳時代前期）では人為的な森林破壊はあまり進行していないことが判明した。IVc期に属する大型の竪穴住居跡SH11と2本柱のSH6は建築部材としてクリを多用している。周辺遺跡の祭祀的要素を持つ住居跡や大型の住居跡ではクリを多用した傾向にあることから、当遺跡のSH6やSH11は、こういった要素を持つ可能性が指摘できる。

また、SP206出土の方形に組まれた炭化材は、8軒の堅穴住居跡出土炭化材と樹種の違いは認められなかつた。

3 放射性炭素年代測定（第4節）

実施の経緯 当遺跡から出土した炭化材のうち、出土状況から住居の建築部材として用いられていたことが明確なものは、住居が廃絶された（焼失した）年代を示し、そこで用いられていた土器の実年代を知る有効な試料となる。また、最近のAMS法による年代測定によって、従来推定されていた年代とは異なる測定値が示されている。このため自然科学分析による年代測定値により、現在4世紀前半と推定されている土器編年による年代の確認を行う必要がある。5点の試料による年代差と出土土器の変化を確認し、集落変遷を検討する材料とする必要があると考えた。当遺跡で確認した土器埴輪は、長胴甕の形状から構築時期は8世紀初頭と考えられるが、この甕に付着した炭化物を年代測定することで、さらに実年代に即したものになる可能性が高いと考えた。また、中濃地域の甕の変遷を裏付ける貴重な資料となりうると考えた。

結果の概要と考察 SH8、SH11、SH14については、AD320～390年という結果となり、従来の年代値と一致した。また、東野IV期を造構の重複関係や出土遺物から3段階に分けたが、東野IV b期のSH11、SH14がAD320～360年の間に属するのに対し、東野IV c期のSH11がAD325～390年の間に属するという結果となり、放射性炭素年代測定の面からも、当遺跡の時期設定は妥当であることが判明した。残り2点（SH13、SP206）については、それぞれ2世紀前後、2世紀前半という結果となつた。これは、試料がどちらともヒノキ属であり、測定部位によってデータの矛盾を引き起こした可能性が考えられる。

SZ2出土土器付着炭化物から、AD650～720年という結果を得た。これは、想定していた8世紀初頭という時期を裏付けるが、さらにやや遡る可能性も示唆している。

4 土器胎土と粘土塊分析（第5節）

実施の経緯 SH7（1点）とSH14（3点）から粘土塊が出土した。住居跡から出土する粘土塊は、その住居で使用する土器を製作する材料として用いられる可能性が指摘されている。当遺跡においても、その可能性を検討するため、粘土塊の分析と土器の胎土分析を実施し、粘土塊が実際にどこで採取され、それが土器製作の材料として用いられていたかどうかを確認する必要があると考えた。分析する土器は、前述の堅穴住居跡2軒から、土師器の主要3器種（甕、壺、高坏）と当遺跡ではやや特殊な形態の壺（H221）を抽出した。

結果の概要と考察 土器づくりの粘土は一般的に微化石類を良好に含む。分析試料の粘土塊、粘土は微化石類を含まない材料であり、砂粒組成が近隣地の堆積物の組成を示すことから、段丘堆積物の粘土であると推定できる。土器の胎土分析では、2点を除き、当遺跡周辺の粘土を用いて土器の製作を行ったと考えられる。しかし、286、420はこの地域ではあまり知られていない堆積環境の堆積物であることが判明した。これらの分析結果から286や420は搬入品の可能性が高いと考えられる。

5 大型植物化石（第6節）

実施の経緯 4世紀前半のSH6からは、雑穀と思われる炭化した種子が多量に出土した。当時は水田耕作が一般化し、米が主食であったとされているが、縄文時代以来の堅果類や動物性食糧も食していたとされる。しかし、雑穀類に関してはあまり報告例が無く、その耕作地に関して問題にされることが多い。そこで、今回出土した雑穀と思われるものが何であるのかを明らかにする必要があると考えた。

結果の概要と考察 出土した大型植物化石はアサの種実であった。古代日本では纖維資源として重要な植物であったが、食用、製油用、薬用などの目的も考えられる。

第2節 基盤層のテフラ分析

1 はじめに

当遺跡が立地する段丘の東端崖に、遺跡の基盤層が露出していた。このため、基盤層の形成期あるいは地形面の検討を行うために、この基盤層堆積物の検討を行った。分析は、藤根久・今村美智子（バレオ・ラボ）が担当した。

2 試料と分析方法

分析試料は、1.4mの堆積物について5cm間隔で25試料を採取し、そのうちの12試料について鉱物分析を行った（図245、図版82）。なお、堆積物は、上位層からI層～VI層に区分した。堆積物の特徴は、次の通りである。

I層；現生根を含む縮まりのある黒色土壤。深度230～290mm。II層； ϕ 5～10mmの礫が点在する黒灰色土壤。深度460～510mm。III層；粘性の高い黄褐色粘土層。深度570～670mm。IV層；上位層より粘性の弱い淡黒黄色粘土層。 ϕ 1mm前後の白色粒子を含む。深度800～870mm。V層；粘性の強い明黄褐色粘土層。深度1040～1080mm。VI層；粘性の強い礫混じり赤褐色粘土層。深度1480mm。VI層より下位層は、やや固結した黄褐色風化軽石混じりシルト層、黄褐色風化礫混じり粘土層、固結した黄褐色砂礫層（泥流堆積物）が見られる。これら固結した堆積物は、木曾川泥流堆積物と考えられる。なお、調査地は、鹿野（1990）の地形面区分では中位段丘堆積物または木曾川泥流堆積物分布域に対応する。

（1）鉱物分析

鉱物分析は、以下に示す方法に従った。

- 各試料は10g程度秤量し、恒温乾燥機で良く乾燥した後、乾燥重量を秤量し含水比を求めた。
- 各試料は20g程度秤量し、1 ϕ (0.5mm)、2 ϕ (0.25mm)、3 ϕ (0.125mm)、4 ϕ (0.063mm)のフリイを重ね湿式フリイ分けした。各フリイ残渣について乾燥後秤量し粒度組成とした。また4 ϕ 以上の残渣を含砂率として求めた。
- 4 ϕ の残渣について 重液（テトラブロモエタン；比重2.90～2.96）を用いて軽鉱物と重鉱物の分離を行ない、分離した各試料の乾燥重量を秤量し重・軽鉱物比とした。
- 重液分離をした軽鉱物と重鉱物について封入剤（レーキサイトセメント）を用いてプレパラートを作成した。
- 軽鉱物は石英（Qt）、長石（Pl）、火山ガラス（Gl）、不明（Opq）に分類し、重鉱物はかんらん石（Ol）、イディングサイト（In）、单斜輝石（Cpx）、斜方輝石（Opx）、角閃石（Ho）、磁鐵

鉱 (Mag) に分類し、風化粒子などの不明鉱物以外の鉱物が200以上になるまで分類・計数を行った。なお、火山ガラスの形態は、吉川周作 (1976) の分類基準に基づき、扁平型無突起 (Ha)、扁平型有突起 (Hb)、中間型曲線状 (Ca)、中間型直線状 (Cb)、多孔質曲線状 (Ta)、多孔質直線状 (Tb)、その他の7形態に分類した。

(2) 屈折率測定

ガラスの屈折率については、横山ほか (1986) の方法に従って、温度変化型屈折率測定装置 (RIMS 86) を用いて屈折率 (n) を測定し、その結果を範囲 (range) で表した。

3 結果

(1) テフラの鉱物組成分析 (表194、図254)

砂粒分の粒度組成は下位に向かって1φ残渣が増加する傾向がある。VI層は、中位のNo.20, 22において、やや細粒な値を示すものの、含砂率も高く、粗粒寄りの組成である。重・軽鉱物比は、軽鉱物の割合がI～V層において74～85%の値となる。軽鉱物の鉱物組成は、I～IV層 (No.1～11) では火山ガラスが40%以上を占め、特にNo.5では62%を占める。V層以下では石英が約10%含まれる。ガラスの形態分類は扁平型有突起 (Hb) と中間型曲線状 (Ca) が多く、扁平型有突起 (Ha) は19～27%の値となり、中間型曲線状 (Ca) は15～32%の値となる。ついで扁平型無突起 (Ha) と中間型直線状 (Cb) が多いが、どちらの形態も5%以下である。なお、VI層 (No.18, 20, 22, 24) は、岩片及び風化粒子などの不明鉱物を非常に多く含む。重鉱物の組成は、I～IV層 (No.1～11) では斜方輝石を主体とする組成である。いざれの試料も67%以上を斜方輝石が占めている。V及びVI層 (No.14～24) は斜方輝石と磁鉄鉱を主体とする組成である。斜方輝石は37～62%、磁鉄鉱は28～54%を占める。全層位において角閃石類は約16%以下の値を示し、单斜輝石は9%以下の値を示す。

(2) 屈折率測定 (表194、図254)

屈折率測定は、最も火山ガラスの含有率の高いNo.5と、軽鉱物比が高く比較的火山ガラスの含有率も高いNo.8の扁平型火山ガラスを用いて行った。No.5の火山ガラスの屈折率は、範囲1.4974～1.4999、平均値1.4985を示し、No.8の火山ガラスの屈折率は、範囲1.4983～1.5007、平均値1.4994を示す。

以上の特徴から、堆積物中に含まれる火山ガラスは、始良Tnテフラ (ATテフラ) と同定される。なお、観察された火山ガラスの多くは、丸みを帯びたガラスが含まれることから、二次堆積の可能性が考えられる。また、I～IV層 (No.1～11) にかけて火山ガラスの含有率の高まりが見られるが、最も含有率の高いNo.5前後のII層下部に始良Tn火山灰のピークが存在すると考えられる。

【始良Tnテフラ: AT】

I～IV層 (No.1～11) に見られる扁平型有突起火山ガラス及び中間型曲線状火山ガラスを主体とした火山ガラスは、その形態的特徴及び火山ガラスの屈折率値から町田・新井 (1976) の始良Tnテフラと推定される。町田・新井 (1976) によると、始良Tnテフラは細粒であり、細砂鉱物のうち90%以上を火山ガラスが占め、無色透明な鋭い端を持つ平板状火山ガラスで構成されることが特徴として挙げられている。なお、火山ガラスの屈折率測定結果は範囲がおよそ1.4974～1.5007となり、始良Tnテフラの従来値の範囲1.498～1.501 (町田・新井2003) にほぼ同様である。始良Tnテフラの分布域は広く、日本列島を覆うことが確認されている (町田・新井2003)。始良Tnテフラの噴出年代は、26,000～29,000年前と推定されている (町田・新井2003)。

参考文献

- 町田洋・新井房夫 1976 「広域に分布する火山灰—姶良Tn火山灰の発見とその意義ー」『科学』
- 町田洋・新井房夫 2003 「新編火山灰アトラス—日本列島とその周辺」財団法人東京大学出版会
- 町田洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 1984 「テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログー」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』
- 鹿野勘次 1990 「美濃加茂周辺地域の第四系」『岐阜県地学教育』
- 横山卓雄・檀原徹・山下透 1986 「温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定」『第四紀研究25』

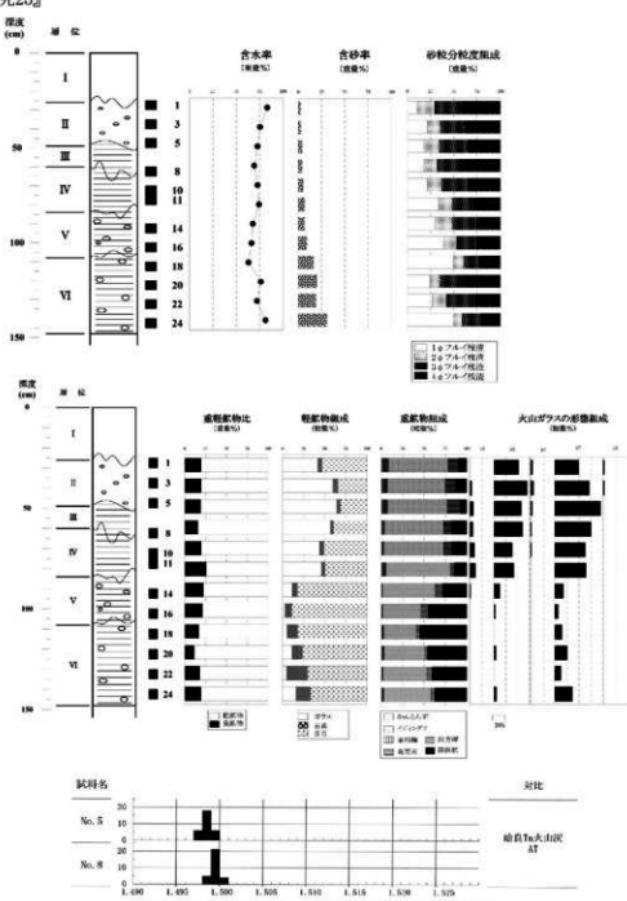


図254 堆積物の特徴と鉱物組成図及び屈折率分布図

表194 堆積物の分析結果

試料番号	含水率 (重量%)	含砂率 (重量%)	砂粒分の粒度組成 (重量%)				重・軽鉱物組成 (重量%)	
			1φ	2φ	3φ	4φ	重鉱物	軽鉱物
1	83.1	2.6	10.5	19.3	29.0	41.3	19.4	80.6
3	75.4	2.9	21.7	13.9	25.3	39.0	19.8	80.2
5	72.7	3.6	17.6	16.8	29.8	35.8	15.9	81.1
8	69.2	4.0	18.0	13.9	25.9	42.3	15.8	84.2
10	72.7	4.8	21.8	15.2	28.3	34.7	19.8	80.2
11	74.3	6.5	33.7	15.1	23.6	27.6	25.9	74.1
14	67.7	6.4	29.8	18.8	26.3	25.1	22.1	77.9
16	66.3	9.1	38.7	14.3	21.4	25.6	21.4	78.6
18	63.1	16.2	49.8	11.2	16.0	23.0	17.0	83.0
20	76.3	19.6	24.6	10.1	24.6	40.8	11.3	88.7
22	72.1	18.9	27.2	14.9	30.7	27.2	17.9	82.1
24	81.3	30.5	49.4	9.4	20.1	21.0	19.3	80.7

軽鉱物組成(粒数)

試料番号	火山ガラス	石英	長石	カンラン石	单斜輝石	斜方輝石	角閃石	霞母岩
	Vg	Qt	Pl	OI	Cpx	Opx	Ho	Mg
1	101	10	142	-	22	173	31	24
3	114	14	109	-	15	137	24	27
5	127	11	68	-	18	158	35	18
8	114	12	96	-	8	145	20	38
10	113	15	87	-	7	147	21	37
11	96	11	108	-	12	169	10	33
14	19	23	183	-	4	149	21	68
16	6	29	198	1	5	119	24	122
18	9	25	159	-	6	79	9	114
20	11	13	70	-	8	102	8	99
22	10	18	67	-	5	120	14	96
24	14	10	85	-	8	148	11	99

火山ガラス形態分類(粒数)

試料番号	平板型		中間型			多孔質型		その他
	無突起	有突起	曲面状	直線状	曲線状	直線状		
	Hn	Hb	Ca	Ch	Ta	Tb		
1	1	52	38	8	-	1	1	
3	5	63	38	4	1	-	3	
5	3	54	64	3	3	-	-	
8	1	46	60	1	4	-	2	
10	9	57	45	1	-	-	1	
11	5	42	43	3	1	-	2	
14	1	9	7	-	1	-	1	
16	-	-	5	-	1	-	-	
18	-	-	6	-	2	-	1	
20	-	2	5	-	4	-	-	
22	-	-	4	-	5	-	1	
24	3	1	6	1	3	-	-	

〔屈折率測定結果〕

試料名	測定対象	範囲(range)	平均(mean)
No. 5	扁平型(Ha, Hb)	1.4974 - 1.4999	1.4985
No. 8	扁平型(Ha, Hb)	1.4983 - 1.5007	1.4994

第3節 古墳時代前期堅穴住居跡出土炭化材の樹種同定

1 はじめに

ここでは、古墳時代前期の堅穴住居跡（SH4・SH6・SH6土坑内・SH7・SH8・SH9・SH11・SH13・SH14遺物包含層・SH14）から出土した炭化材914点と炭化核の樹種同定結果を報告する。

各住居跡から出土した炭化材の多くは、本来の形状が不明の破片である。しかし、焼失住居跡であることから、炭化材の多くは建築材や屋根材の一部破片と考えられる。これらの炭化材の樹種を明らかにすることにより、当遺跡の古墳時代前期の建築材に関する樹種選択性を知る資料が得られ、また建築材を伐採利用していた遺跡周辺の古植生を類推することができるものと期待され、分析を実施した。当遺跡東方の木曾川流域には、牧野小山遺跡・顔戸南遺跡・柿田遺跡など弥生時代末から古墳時代の焼失住居跡が確認され、建築材が出土している。当遺跡からは古墳時代前期の建築材樹種利用に関するまとまった情報が得られることから、地域一帯の樹種利用の様相がより詳しく判る資料が得られるものと期待される。分析は、炭化材を植田弥生・野村敏江（パレオ・ラボ）、炭化核を新山雅広（パレオ・ラボ）が担当した。

2 試料と方法

まず、実体顕微鏡下で形状や大きさの異なる炭化材を選び、異なる分類群が含まれていた場合は枝番号を付し、各破片を同定した。アカガシ亜属・クリ・コナラ節・クヌギ節は、横断面の管孔配列が特徴的なので、実体顕微鏡下の観察で同定した。それ以外の分類群は、材の3方向断面（横断面・接線断面・放射断面）を作成し、走査電子顕微鏡で材組織を拡大し同定した。針葉樹の一部については放射断面を、ハンノキ亜属の一部は接線断面を作成して、確認作業を行った。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製 JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った。

3 結果

同定結果の一覧を表195～207に示し、表208に各住居跡の検出分類群を集計した。

約8軒（SH4・SH6・SH6土坑内・SH7・SH8・SH9・SH11・SH13・SH14遺物包含層・SH14）の住居跡からは、スギ（59点）・スギと思われるもの（2点）・ヒノキ（24点）・ヒノキ属（17点）・ヒノキ属と思われるもの（1点）・コウヤマキ（9点）・マツ属複維管束亜属（5点）・マツ属かコウヤマキの根材（1点）・イヌガヤ（1点）・針葉樹（9点）の針葉樹約8分類群（128点）、アカガシ亜属（158点）・シイノキ属（28点）・ツブライジ（4点）・サカキ（18点）・ツバキ属（5点）・ヒサカキ（4点）・モチノキ属（2点）の常緑広葉樹7分類群（219点）、ハンノキ亜属（249点）・ハンノキ属（3点）・クリ（70点）・クリ？（5点）・モクレン属（43点）・サクラ属（31点）・トネリコ属（26点）・ミズキ属（18点）・クヌギ節（7点）・カエデ属（5点）・エゴノキ属（4点）・ニレ属（3点）・ケンボナシ属（3点）・マタタビ属（2点）・ヌルデ（2点）・コナラ節（1点）・キハダ（1点）・ケヤキ（1点）・ムクロジ（1点）・イヌシデ節（1点）の落葉広葉樹19分類群（476点）、ツツジ科（5点）・クリかシイノキ属（3点）・コナラ属（アカガシ亜属根材？）（1点）・環孔材A（1点）・広葉樹A（1点）・広葉樹（散孔材）（15点）・広葉樹（17点）・樹皮（1点）

の常緑性か落葉性か特定できない広葉樹8分類群(44点)の樹木材が検出された。このほかに、ススキ属(33点)・タケ亞科(6点)・タケ亞科根茎(2点)・単子葉類(1点)とモモの炭化核(5点)が出土した。落葉広葉樹・常緑広葉樹・針葉樹の多種多様な樹種が、どの住居跡においても確認できた。全体的には、ハンノキ亜属(249点)が最も多く、アカガシ亜属(158点)、クリ(70点)、スギ(59点)、モクレン属(43点)が上位5位を占める。そして、ハンノキ亜属・アカガシ亜属・クリ・スギ・モクレン属は、ほとんどの住居跡から出土した。ただし、クリは、SH6・SH11・SH14の3軒だけで出土し、クリの検出住居には偏りが見られた。クリは、SH14からは1点だけであったが、SH6からは38点でハンノキ亜属(60点)・アカガシ亜属(46点)について多く、SH11からは28点でスギ(40点)について多く出土した。

SH6内の方形に組んだ炭化材は、北側の材がコウヤマキ、東側の材がハンノキ亜属、南側の材がシイノキ属、西側の材がヒノキ属で、すべて異なる樹種の材であった。その内部から出土した炭化材(樹種No.613~628)はトネリコ属・スギ・カエデ属・クリ・ハンノキ亜属・アカガシ亜属・コウヤマキ・シイノキ属などであり、SH6から検出された樹種構成と特に変わりはなかった。

屋根材はタケ亞科(竹類または笹類)も少し検出されたが、主にはススキ属であった。

炭化核5点が、SH6(樹種No.407)・SH7(樹種No.135と樹種No.195)・SH8(樹種No.157)・SH14(樹種No.704)で出土し、すべてモモと同定された。樹種No.157にはげつ歯類の食害痕があった。

炭化材のほとんどは利用されていた当時の形状が不明の破片であるが、芯持ち丸木の形状が残っているもの(表195~206参照)、発掘時に板材と思われたもの、芯去り削り出しの棒円や円形の棒状であったと思われる破片も散見された。芯持ち丸木の形状が残っているものは、アカガシ亜属・シイノキ属・ハンノキ亜属・モクレン属などの広葉樹材が多く、推定直径は5cm前後かそれ以下が多いようであった。針葉樹では樹種No.272のコウヤマキが推定直径約4cmで、約30年輪あった。発掘時に板材と思われたものは、樹種No.882でスギであった。芯去り削り出しの棒状材と思われるものは径が2~3cm前後で、アカガシ亜属(樹種No.360・363・376・403・411・418・441)が多く、ツバキ属(樹種No.239)、モクレン属(樹種No.258-1)、サクラ属(樹種No.363)にも見られた。また、樹種No.229のクリには加工痕と思われる痕跡が、樹種No.411のトネリコ属には斜め削痕が、樹種No.691-1のハンノキ亜属は分割加工された形状が見られた。

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の3方向の組織写真を提示した。

(1) イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K.koch イヌガヤ科 図版83 1a-1c (樹種No.603)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。仮道管にらせん肥厚があり、分野壁孔は小型、トウヒ型またはヒノキ型、1分野に1~2個ある。本州の岩手県以南・四国・九州の暖帯から温帯下部の山林の下に生育する常緑小高木である。

(2) マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxyylon* マツ科 図版83 2a-2c (樹種No.685)

垂直と水平の樹脂道がある針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材の量が多い。分野壁孔は窓状、放射仮道管がありその内壁には鋸歯状肥厚がある。マツ属複維管束亜属のアカマツまたはクロマツである。内壁の肥厚の形状により、アカマツは鋭利な鋸歯状をなし、クロマツは比較的ゆるやかな鋸歯状をなすことで区別されるが、炭化材では内腔に張り出した肥厚部が不明瞭で識別できな

い。アカマツとクロマツは暖帯から温帯下部の乾燥した陽光地に生育し、二次林の主要樹である。

(3) マツ属またはコウヤマキ 根材 *Pinus or Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc. root 図版83
3a-3c (樹種No.335)

直径0.6cmの外観からしても細い根材の形状であった。横断面の中心部に髓は無く、原生木部は2原型、針葉樹材で晩材部仮道管の肥厚はほとんど見られず、仮道管の径は大きい。横断面において垂直树脂道と思われる穴が多数見られるが、発砲した穴との識別がはつきりしない。接線断面においても、水平树脂道が確認できなかった。分野壁孔は窓状である。マツ属根材の可能性が高いが、保存がやや悪く、断定できない。

(4) コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc. コウヤマキ科 図版84 4a-4c (樹種No.164)

仮道管・放射柔細胞からなる針葉樹材。分野壁孔は窓状である。放射組織は5細胞以下の背の低いものが多く、放射柔細胞の壁は薄い。コウヤマキは日本特産の1属1種の常緑高木である。本州の福島県以南・四国・九州の宮崎県の暖帯上部から温帯の山地に分布し、特に長野県の木曽、和歌山県の高野山に多い。

(5) スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科 図版84 5a・5c (樹種No.73) 6c (樹種No.453)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。未炭化材では晩材部が多くその仮道管壁は極めて厚いが、炭化材ではこのような傾向は見られなかつた。分野壁孔は、孔口が水平に梢円形に大きく開いたスギ型が1分野に主に2個ある。スギは本州以南の暖帯から温帯下部の湿気のある谷間に生育する常緑高木である。

(6) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 図版84 7a-7c (樹種No.311)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。分野壁孔は輪郭が円形、孔口は細く開いたヒノキ型で1分野に主に2個ある。

(7) ヒノキ属 *Chamaecyparis* ヒノキ科 図版85 8a-8c (樹種No.583) 9c (樹種No.597 PLD-2440)

前述のヒノキの分野壁孔に比べ、孔口が広く、壁孔もやや大きい。サワラの可能性があるが、試料によっては孔口が狭い部分も観察された。従てヒノキ属の同定に留めた。ヒノキ属は温帯に分布し、本州の福島県以南・四国・九州の山中のやや乾燥した尾根や岩上に生育するヒノキと、ヒノキより分布域は狭く東北南部から中部地方の沢沿いの岩上に生育するサワラがある。

(8) クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus sect. Eucarpinus* カバノキ科 図版85 10a-10c (樹種No.125-1)

小型の管孔が単独や放射方向に2~数個が複合して分布している散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にらせん肥厚がある。放射組織はほぼ同性、一部で2細胞幅のものが見られたが主に単列であった。道管との壁孔はやや大きく交互状である。クマシデ属は暖帯及び温帯の山地に生育する落葉高木または大形低木で、イヌシデ節には山野に普通のイヌシデとアカシデが属する。

(9) ハンノキ属ハンノキ亜属 *Alnus subgen. Alnus* カバノキ科 図版85 11a-11c (樹種No.168)

集合放射組織があり、小型の管孔が放射方向に2~数個複合し多数が分布する散孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は階段数が15本前後の階段穿孔である。放射組織は同性、単列のものと集合状

のものがあり、道管との壁孔は小さく交互状に密在する。ハンノキ亜属は暖帯から亜寒帯の陽光地に生育する落葉樹で、低地の湿地に普通のハンノキ、川岸に生育するカワラハンノキ、山中に生育するミヤマカワラハンノキ・ヤハズハンノキ・ケヤマハンノキなど約7種があり、材組織からこれらを識別することはできていない。ハンノキとケヤマハンノキは高木になり、材質は硬さ・重さは中庸、切削性に優れるが保存性は低い。

(10) ハンノキ属 *Alnus* カバノキ科

小破片で集合放射組織の存在が不明な試料である。集合放射組織の出現頻度の低いヤシャブシ節との識別ができず、ハンノキ属の同定に留めた。

(11) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図版86 12a (樹種No.764-1 PLD-2441) 13a・13c (樹種No.622)

集合放射組織を挟み小型～中型の単独管孔が放射方向に配列する放射孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は單穿孔である。放射組織は同性、単列のものと細胞幅の広い集合放射組織があり、道管との壁孔は大きくて柵状・交互状である。アカガシ亜属はおもに暖温帯に分布する常緑広葉樹のカシ類で、山野に多いアラカシ・アカガシ・シラカシ、関東以南に多いイチイガシ・ツクバネガシ、海岸や乾燥地に多いウバメガシ、寒さに強くブナ帶の下部まで分布するウラジロガシなどがある。

(12) コナラ属（アカガシ亜属根材？） *Quercus* (subgen. *Cyclobalanopsis* root?) ブナ科 図版86 14a-14c (樹種No.462)

小型～中型の単独管孔が多数密在し、細胞幅の広い集合放射組織がある。道管と放射組織との壁孔は柵状である。小径材のわりには道管径や放射柔細胞が大きい。環孔性も不明瞭なので、アカガシ亜属の根材の可能性がある。

(13) コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版86 15a-15c (樹種No.78)

年輪の始めに中型の管孔が配列し除々に径を減じ、晩材部では薄壁で孔口角形の小型管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は單穿孔である。放射組織は単列のものと複合状・集合状がある。コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木でカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。

(14) コナラ属コナラ亜属クヌギ節 *Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris* ブナ科 図版87 16a-16c (樹種No.210)

年輪の始めに大型の管孔が1～2層配列し、その後は厚壁での管孔が単独で放射方向に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は單穿孔である。放射組織は同性、単列のものと集合状があり、道管との壁孔は柵状である。クヌギ節は暖帯の山野に分布する落葉高木で、クヌギとアベマキが属する。

(15) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版87 17a-17c (樹種No.229)

年輪の始めに大型の管孔が密に配列し除々に径を減じて、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は單穿孔である。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状・柵状である。クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。

(16) シイノキ属 *Castanopsis* ブナ科 図版87 18a-18c (樹種No.810)

年輪の始めに小型～中型の管孔が間隔を開けて配列し、後に径を減じ、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。炭化材では、年輪線が灰色にひかり際立っていた。管孔が接線状に密接してクリと似る年輪部位もあった。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、放射組織は単列同性である。年輪始めの管孔が間隔を開けて配置していることからクリとは異なりシイノキ属であることが判る。シイノキ属は暖帯に生育する常緑高木で、関東以西に分布するツブライジと福島県と新潟県佐渡以南に分布するスダジイがある。

- (17) ツブライジ *Castanopsis cuspidata* Schottky ブナ科 図版88 19a・19c (樹種No.691-1)
20 (樹種No.725-2)

シイノキ属の管孔配列が確認され、かつ幅の狭い集合した放射組織がある。

- (18) ニレ属 *Ulmus* ニレ科 図版88 21a-21c (樹種No.840)

年輪の始めに大型の管孔が1～2層配列し、晩材部は小型の管孔が多数集合して配列している環孔材。道管の穿孔は単穿孔、小道管の内腔にらせん肥厚がある。放射組織は同性、約6細胞幅の紡錘形である。ニレ属は北地の温帯に多いハルニレ・オヒヨウ、暖帯の荒地や川岸に普通に見られるアキニレがある。

- (19) ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 図版88 22a-22c (樹種No.125-1)

年輪の始めに中型の管孔が1～2層配列し、晩材部は小型の管孔が多数集合して配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性、主に5細胞幅の紡錘形で上下端に大型結晶細胞がある。ケヤキは暖帯下部から温帯の山中や川岸に生育する落葉高木である。

- (20) モクレン属 *Magnolia* モクレン科 図版89 23a-23c (樹種No.18)

小型の管孔が単独または2～数個が複合して散在する散孔材。道管の壁孔は階段状、穿孔は主に単穿孔であるが階段穿孔も見らる。放射組織は異性、1～2細胞幅、上下端に方形細胞があり、道管との壁孔は大きく階段状または対列状に整然と配列している。モクレン属は暖帯または温帯に分布する落葉性の高木または小高木で、北海道以南の山地に生育するホオノキ・コブシ、本州と九州に生育するタムシバ、関東北部以西に生育するオオヤマレンゲ、中部地方西南部に生育するシデコブシがある。

- (21) サクラ属 *Prunus* バラ科 図版89 24a-24c (樹種No.192)

小型の管孔が年輪の始めにやや密に分布し、その後は放射状・接線状・斜状に複合して全体的にうねるように分布している散孔材。道管の壁孔は対列状または交互状、穿孔は単穿孔、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織は異性、約3細胞幅、道管との壁孔は小型で密在する。サクラ属は暖帯から温帯の山地に生育する落葉広葉樹で、ヤマザクラ・マメザクラなど多くの種がある。

- (22) マタタビ属 *Actinidia* マタタビ科 図版89 25a-25c (樹種No.606)

年輪の始めに中型の管孔が並び、晩材部は中～小型の管孔が単独や複合して分布している環孔材。道管の壁孔は小型で密在し、かすかならせん肥厚が見られ、穿孔は単穿孔である。放射組織は異性、直立細胞からなる單列のものと、3細胞幅の背の高い紡錘形のものがある。マタタビ属は暖帯上部～温帯に山中に生育する落葉性のツル性で、マタタビとサルナシがある。

- (23) キハダ *Phellodendron amurense* Rupr. ミカン科 図版90 26a-26c (樹種No.25)

年輪の始めに大型の管孔が1～3層配列し、年輪界では多数の非常に小型の管孔が複合し塊状・斜

状・接線状に配列する環孔材。道管の壁孔は小さく交互状、穿孔は單穿孔、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は同性、主に3~4細胞幅の整った紡錘形、細胞高も15細胞高前後でほぼ同じ高さである。キハダは北海道以南の温帯の山地に生育する落葉高木である。

(24) ヌルデ *Rhus javanica* L. ウルシ科 図版90 27a-27c (樹種No.185)

年輪の始めに中型の管孔が配列し晩材に向かい徐々に径を減じて行き、晩材部では非常に小型の管孔が複数集合して接線状・斜状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は單穿孔、小道管には明瞭ならせん肥厚がある。放射組織は異性、1~3細胞幅、道管との壁孔はやや大きく孔口もレンズ状に大きく開き交互状配列である。ヌルデは北海道以南の温帯から熱帯にまで広く分布し山野に普通の落葉小木である。

(25) モチノキ属 *Ilex* モチノキ科 図版90 28a-28c (樹種No.91)

非常に小型の管孔が年輪幅いっぱいに連続して放射方向またはやや斜状に複合して配列し、横断面での管孔密度は低い散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は横棒数が25~30本前後の階段穿孔、内腔には水平のらせん肥厚がある。放射組織は異性、おもに3細胞幅、上下端に方形細胞や直立細胞がある。

モチノキ属は、温帯~暖帯の山地に生育する常緑または落葉性の高木または低木で、山間の湿地に普通の落葉低木のウメモドキ、関東地方以西の山地に生育するソヨゴ、茨城県・福井県以西の山野に普通のクロガネモチ、海岸に近い山地に生育するモチノキなど、暖帯に分布する種類が多い。

(26) カエデ属 *Acer* カエデ科 図版91 29a-29c (樹種No.642)

小型の管孔が単独または2~3個が放射方向に複合して散在する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は單穿孔、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は同性、主に3細胞幅、道管との壁孔は交互状で整然と配置している。カエデ属は日本全土の暖帯から温帯の山地や谷間に普通に生育している。

(27) ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. ムクロジ科 図版91 30a-30c (樹種No.503)

年輪の始めに中型の管孔が配列し、晩材部は塊状に複合した非常に小型の管孔が放射方向または塊状に分布し、周囲状・帶状の木部柔組織が頗著な環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は單穿孔、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は同性、3細胞幅、道管との壁孔は小さくて交互状である。ムクロジは本州の中部以西の暖帯から亜热带に生育する落葉高木である。

(28) ケンボナシ属 *Hovenia* クロウメモドキ科 図版91 31a-31c (樹種No.781)

年輪の始めに大型の管孔が1~2層あり、晩材部は単独または放射方向に2~3個が複合した非常に小型で厚壁の管孔が分布する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は單穿孔である。放射組織は異性、1~2細胞幅、上下端に方形細胞・直立細胞が単列で伸びる。ケンボナシ属は暖帯の山中に生育する落葉高木である。

(29) ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 図版92 32a-32c (樹種No.177)

非常に小型の管孔が均一に散在している散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は横棒数が20本ほどの階段穿孔、内腔にはかすかならせん肥厚がある。放射組織は上下端に方形細胞・直立細胞がある異性、1~3細胞幅、膨らんだ油細胞がある。ツバキ属は暖帯の海岸から山中に生育する常緑の低木または高木である。

(30) サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 図版92 33a-33c (樹種No.121)

非常に小型で多角形の管孔が散在する散孔材。道管の壁孔は階段状、穿孔は横棒数が30本前後の階

段穿孔、内腔にほぼ水平のらせん肥厚がある。放射組織は単列異性、道管との壁孔は交互状・階段状である。サカキは本州の茨城県及び石川県以西より南の暖帯から亜熱帯に生育する常緑小高木である。

(31) ヒサカキ *Eurya japonica* Thunb. ツバキ科 図版92 34a-34c (樹種No.717)

非常に小型で多角形の管孔が散在する散孔材。道管の壁孔は交互状から階段状、穿孔は横棒数が非常に多い階段穿孔である。放射組織は異性、2細胞幅、道管との壁孔は交互状・階段状である。ヒサカキは暖帯の林下にきわめて普通の常緑の小高木である。

(32) ミズキ属 *Cornus* ミズキ科 図版93 35a-35c (樹種No.39)

小型の管孔が単独または放射方向に2~3個複合し分布する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は横棒数が30本前後の階段穿孔である。放射組織は異性、主に3細胞幅、多列部は平伏細胞からなりその上下端に方形細胞と直立細胞が單列で伸びる。ミズギ属は暖帯から温帯の山地に普通の落葉広葉樹で、ミズキ・ヤマボウシなどがある。

(33) ツツジ科 Ericaceae 図版93 36a-36c (樹種No.326) 37a-37c (樹種No.452)

極めて小型で角形の管孔が密在する散孔材。髓は小さく目立たない。道管の壁孔は交互状から階段状、穿孔は单穿孔と横棒の少ない階段状がある。放射組織は異性、1~3細胞幅、単列のものは直立細胞からなり、多列部は平伏細胞と方形細胞が入り混じり上下端に直立細胞が單列で1~3層ある。直立細胞の外形はふくらして大きく背も高い。樹種No.326の階段穿孔は20本前後あり、樹種No.452の階段穿孔は10本前後であった。異なる属と思われるが、分類群は特定できなかった。

(34) エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科 図版94 38a-38c (樹種No.4)

小型で厚壁の管孔が単独または2~4個が複合し放射方向に配列し、晩材部では径が減少する散孔材。道管の壁孔は小型で交互状に密在、穿孔は横棒数が少ない階段穿孔である。放射組織は異性、1~3細胞幅、多列部の上下端は方形細胞・直立細胞からなる單列となり、道管との壁孔は小型で交互状である。エゴノキ属は暖帯から温帯下部の山地に生育する落葉高木で、エゴノキ・ハクウンボク・コハクウンボクがある。

(35) トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 図版94 39a-39c (樹種No.175)

中型の管孔が2~3層配列し、単独または2個複合した小型で厚壁の管孔が散在する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は单穿孔である。放射組織は同性、1~2細胞幅である。トネリコ属はおもに温帯に生育する落葉高木でシオジ・ヤチダモ・トネリコ・アオダモなど約9種がある。

(36) 環孔材 A ring-porous wood A 図版94 40a-40c (樹種No.851)

極めて大型の管孔が1層あり、年輪界には小型の管孔が隣接して分布している。道管の壁孔は交互状、小道管にらせん肥厚がある。放射組織は異性、5細胞幅である。ケヤキの材に似るが、大型結晶細胞は不明である。年輪幅が非常に狭いみか目材であり、ツル性の可能性もあるが、分類群は特定できなかった。

(37) 広葉樹 A broad-leaved tree 図版95 41a-41c (樹種No.350)

1年輪ない当年生の枝材のようである。小型管孔が単独または2~3個が複合して分布している。道管の壁孔は交互状、穿孔は单穿孔である。放射組織は異性、1~3細胞幅、細胞高は非常に高い。

(38) 樹皮 bark 図版95 42a (樹皮No.51)

柔細胞や厚壁細胞が固まり状に配置している。

(39) ススキ属 *Miscanthus* イネ科 図版95 43a (樹種No.552)

直径5~8 mmの草本性の稈で、節部はくびれた後ややふくれ、節を取り巻く葉鞘が残っている試料もあった。稈は中空ではなくスponジ状の基本組織で埋まりその中に維管束が散在している。稈の外周には厚い厚壁細胞層にかこまれた維管束が1~2層並んでおり特に稈の中心部側でその層は厚くなる。それより内側に散在する維管束の周囲の厚壁細胞層は薄い。ススキ属は大型になる多年草で一般にはカヤ(茅)と呼ばれ、約7種ある。

(40) タケ亜科 *Gramineae* subfam. *Bambusoideae* イネ科 図版95 44a (樹種No.151-1) 根茎: 45a (樹種No.601-1)

厚みやや硬質の稈の破片で、維管束は不整中心柱、多数が同心円状に均質に配置している。維管束の周りは厚壁の繊維細胞からなる維管束鞘が帽子状にある。稈の外周に位置する維管束鞘は特に厚く発達し、厚壁の繊維細胞だけの塊も島状に密在し、稈を堅く支持している様子がわかる。このような形質からイネ科のタケとササ類を含むタケ亜科であると同定した。根茎は直径1 cm弱で節部周囲には根の痕跡がある。いわゆるタケ・ササの仲間で12属が含まれ、中国や東南アジアから移入され栽培により広まったものが多く。ササ類は多くの野生種があり、タケ類ではハチク・マダケは日本に野生していた可能性があるといわれる。稈の破片や組織のみからは属や種を識別することは難しい。

4 考察

当遺跡の古墳時代前期の住居跡約8軒 (SH4・SH6・SH6土坑内・SH7・SH8・SH9・SH11・SH13・SH14遺物包含層・SH14) からは、スギ・ヒノキ・ヒノキ属・コウヤマキ・マツ属複維管束亜属などの針葉樹約8分類群(128点)、アカガシ亜属・シイノキ属・ツブライ・サカキ・ツバキ属・ヒサカキ・モチノキ属の常緑広葉樹7分類群(219点)、ハンノキ亜属(249点)・クリ(70点)・モクレン属・サクラ属・トネリコ属・ミズキ属などの落葉広葉樹19分類群(476点)、そのほかにも常緑性か落葉性か特定できない広葉樹8分類群(44点)と、屋根材に利用されていたススキ属・タケ亜科が出土した。約8軒の914点から、針葉樹・常緑広葉樹・落葉広葉樹・単子葉類など約36分類群が出土した。各住居跡とともに、多種多様な分類群を利用していたことが判った。ただし、最も多く出土したハンノキ亜属(249点)、次に多いアカガシ亜属(158点)、そしてクリ(70点)・スギ(59点)・モクレン属(43点)の上位5位の合計数は579点で、調査数全体の約6割を占めている。また、ハンノキ亜属・アカガシ亜属・スギ・モクレン属の4分類群は、ほとんどの住居跡から出土している。このような出土状況から、これらの分類群は主要な建築材として選択利用されていたと考えられる。ただしクリの利用に関しては、SH6とSH11の2軒で多く出土した点が特異であり、クリ材の利用には偏りが見られた。この点について、出土遺物や住居跡の大きさとの関連性を他遺跡の事例をもとに考察する。

当遺跡から北西に位置する関市の深橋前遺跡の弥生時代後半から古墳時代前半の焼失住居跡6軒からは、クリ・ハンノキ亜属・コナラ節・サクラ属などの落葉広葉樹と、シイノキ属・アカガシ亜属などの常緑広葉樹が出土し、クリは銅鏡が出土した集落の中心に位置する住居跡から多く出土した(財団法人岐阜県文化財保護センター2003)。当遺跡より木曽川のやや上流に分布する美濃加茂市の尾崎遺跡の焼失住居跡は、弥生時代中期と後期はクヌギ節が多く、クリ・ニレ属・トチノキも出土してお

り、特に弥生時代後期の祭司的要素を持つ住居跡ではクリが多いことが注目される（財団法人岐阜県文化財保護センター1993）。また、可児市と御嵩町に位置する柿田遺跡でも、弥生時代後期または弥生時代末の大型で特殊な住居跡と考えられているSP17では、クリが多く出土している（財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2005）。このように、岐阜県内では、弥生時代後期（尾崎遺跡のSB24、柿田遺跡のSB17）や弥生時代後半～古墳時代前半（深橋前遺跡のSBA05）の祭祀的要素のある住居跡や、やや大型の住居跡は、クリ材を多用する傾向がある。当遺跡でもクリ材が多いSH11はやや大型であり、SH6は大型ではないが鉄鎌・鉄鎌や大量の大型植物化石が出土し、方形に組んだ炭化材の遺構があるなど特殊な住居跡であった。またSH6からは径2cm前後の柄部破片ではないかと類推される芯去り削り出し棒状破片がほかの住居跡より多く出土した。集落内の特別な住居跡には、耐久性の優れたクリを選択使用していたのかも知れない。

全体では、建築材としては耐久性や保存性が低いハンノキ亜属の材が多く出土した。遺跡周辺に湿地や河畔林があり、耐久性や保存性よりも身近な森林から木材量を多く確保することを優先させた結果かもしれない。

参考文献

- 財団法人岐阜県文化財保護センター 1993 『尾崎遺跡』
財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2005 『柿田遺跡』
財団法人岐阜県文化財保護センター 2003 『深橋前遺跡』

表195 古墳時代前期の堅穴住居跡出土炭化材樹種同定結果一覧①

樹種No.	取上No.	地区・構造	住居No.	層位	同定樹種	備考1	備考2
1	3473	S235	SH4	1	アカガシ亞属		
2	3554	S235	SH4	1	ハンノキ亞属		
3	3572	S235	SH4	1	ハンノキ亞属		
4	3573	S235	SH4	1	エゴノキ属		
5	3574	S235	SH4	1	スギ		
7	3590	S235	SH4	3	アカガシ亞属		
8	3591	S235	SH4	3	モクレン属		
9	3598	S235	SH4	1	ヒノキ		
10	3599	S235	SH4	1	ハンノキ亞属		
11	3604	S235	SH4	2	トネリコ属		
12	3606	S235	SH4	2	ヒノキ		
13	3612	S235	SH4	3	トネリコ属		
14	3613	S235	SH4	3	モクレン属		
15	3617	S235	SH4	3	トネリコ属		
16	3666	S235	SH4	3	ハンノキ亞属		
17	4427	S418	SH7	2	ヒノキ属		
18	4463	S418	SH7	1	モクレン属		
19	4617	S418	SH7	1	ハンノキ亞属		
20	4618	S418	SH7	1	広葉樹		
21	4663	S418	SH7	1	ヒノキ属		
22	4669	S418	SH7	1	モクレン属		
23	4695	S418	SH7	1	ツツジ科	大きな節部	
24	4898	S418	SH7	1	クスギ節		
25	4905	S418	SH7	1	キハダ		
26	4915	S418	SH7	1	ハンノキ亞属		
28	5220	S418	SH7	2	ススキ属		
29	5250	S418	SH7	2	モクレン属		
30	5251	S418	SH7	2	トネリコ属		
31	5283	S418	SH7	2	シイノキ属		
32	5284	S418	SH7	2	アカガシ亞属		
34	5289	S418	SH7	2	ヒノキ属		
35	5320	S418	SH7	2	ハンノキ亞属		
36	5326	S418	SH7	2	ハンノキ属		
37	5340	S418	SH7	2	アカガシ亞属		
38	5345	S418	SH7	2	ハンノキ亞属	芯合む破片	
39	5356	S418	SH7	2	ミズキ属		
40	5359	S418	SH7	2	ススキ属		
41	5360	S418	SH7	2	ススキ属		
42	5361	S418	SH7	2	ススキ属		
43	5362	S418	SH7	2	ススキ属		
44	5363	S418	SH7	2	タケサギ科		
45	5365	S418	SH7	2	アカガシ亞属	芯持ち半割れ	
46	5368	S418	SH7	2	モクレン属		
48	5377	S418	SH7	1	ミズキ属		
49	5382	S418	SH7	1	アカガシ亞属		
50	5383	S418	SH7	1	サクラ属		
51	5386	S418	SH7	1	ハンノキ亞属		
52	5503	S418	SH7	1	広葉樹		
53	5506	S418	SH7	1	シイノキ属		
55	5560	S418	SH7	1	サクラ属		
56	5567	S418	SH7	1	アカガシ亞属		
57	5648	S418	SH7	1	スギ		
59	5660	S418	SH7	1	アカガシ亞属		
61	5902	S418	SH7	1	ハンノキ亞属		
62	5903	S418	SH7	1	ハンノキ亞属		
63	5904	S418	SH7	1	ヒノキ属?		
64	5905	S418	SH7	1	アカガシ亞属		
65	5906	S418	SH7	1	トネリコ属		
66	5948	S418	SH7	2	ミズキ属		
67	5949	S418	SH7	2	ハンノキ亞属		
69	5952	S418	SH7	2	ハンノキ亞属		
70	5953	S418	SH7	2	アカガシ亞属		
71	5988	S418	SH7	2	ハンノキ亞属		
72	5989	S418	SH7	2	アカガシ亞属		
73	5990	S418	SH7	2	スギ		
75	6210	S418	SH7	2	ミズキ属		
76	6211	S418	SH7	2	アカガシ亞属		
77	6212	S418	SH7	2	ミズキ属		
78	6232	S418	SH7	2	コナラ節		
79	6238	S418	SH7	2	ハンノキ亞属		
80	6241	S418	SH7	2	ハンノキ亞属		

表196 古墳時代前期の堅穴住居跡出土炭化材樹種同定結果一覧②

樹種Na	取上Na	地区・造構	住居Na	層位	同定樹種	備考1	備考2
81	6242	S418	SH7	2	ミズキ属		
82	6243	S418	SH7	2	トネリコ属		
83	6249	S418	SH7	2	ミズキ属		
84	6250	S418	SH7	2	スギ?		
85	6255	S418	SH7	2	シイノキ属		
86	6256	S418	SH7	2	トネリコ属		
87	6257	S418	SH7	2	ハンノキ属		
88	6281	S418	SH7	2	モチノキ属		
89	6282	S418	SH7	2	ミズキ属		
90	6283	S418	SH7	2	広葉樹(散孔材)		
91	6284	S418	SH7	2	モチノキ属		
92	6289	S418	SH7	2	広葉樹(散孔材)		
93	6314	S418	SH7	2	ミズキ属		
94	6315	S418	SH7	2	サクラ属		
95	6803	S418	SH7	2	スギ?		
96	6811	S418	SH7	2	ツバキ属		
97	6814	S418	SH7	2	広葉樹(散孔材)		
98	6815	S418	SH7	2	ハンノキ属		
100	6826	S418	SH7	2	ミズキ属		
101	6844	S418	SH7	2	アカガシ属		
102	6861	S418	SH7	2	ミズキ属		
103	6875	S418	SH7	2	ハンノキ属		
104	6876	S418	SH7	2	トネリコ属		
105	6877	S418	SH7	2	針葉樹		
106	6879	S418	SH7	2	広葉樹(散孔材)		
107	6880	S418	SH7	2	ハンノキ属		
108	6884	S418	SH7	2	広葉樹		
109	6885	S418	SH7	2	ハンノキ属		
110	7021	S418	SH7	2	アカガシ属		
111	7026	S418	SH7	2	コウヤマキ		
112	7027	S418	SH7	2	コウヤマキ		
113	7028	S418	SH7	2	広葉樹(散孔材)		
114	7029	S418	SH7	2	コウヤマキ		
115	7053	S418	SH7	1	スギ		
116	7641	S418	SH7	1	ミズキ属		
117	7677	S418	SH7	1	シイノキ属		
118	7696	S418	SH7	2	ハンノキ属		
119	8060	S418	SH7	1	トネリコ属		
120	8061	S418	SH7	1	アカガシ属		
121	8119	S418	SH7	1	サカキ		
122	8120	S418	SH7	1	ハンノキ属		
123	8149	S418	SH7	2	ハンノキ属		
124	8152	S418	SH7	2	ヒノキ		
125-1	8161	S418	SH7	2	ケヤキ		
125-2	8161	S418	SH7	2	イヌシデ節		
126	8180	S418	SH7	2	アカガシ属		
127	8181	S418	SH7	2	ハンノキ属		
128	8182	S418	SH7	2	ハンノキ属		
129	8209	S418	SH7	1	モクレン属		
130	8219	S418	SH7	1	モクレン属		
132	8271	S418	SH7	2	ハンノキ属		
133	8899	S418	SH7	2	サクラ属		
134	8900	S418	SH7	2	クヌギ節		
135	8919	S418	SH7	2	モモ炭化核	破片2	
136	8921	S418	SH7	2	ススキ属		
137	8922	S418	SH7	2	ススキ属		
138	8923	S418	SH7	2	トネリコ属		
139	5517	S426	SH8	3	ススキ属		
140	5518	S426	SH8	3	ススキ属		わら状、出土状況図あり
141	5519	S426	SH8	3	ススキ属		わら状、出土状況図あり
142	5520	S426	SH8	3	アカガシ属	芯含む破片	わら状、出土状況図あり
143	5521	S426	SH8	3	ススキ属		わら状、出土状況図あり
144	5522	S426	SH8	3	広葉樹(散孔材)		わら状、出土状況図あり
145	5523	S426	SH8	3	シイノキ属		屋根材、出土状況図あり
146	5524	S426	SH8	3	ススキ属		わら状、出土状況図あり
147	5525	S426	SH8	3	ススキ属		わら状、出土状況図あり
148	5526	S426	SH8	3	ツバキ属	年代測定PLD-2438	屋根材、出土状況図あり
149	6217	S426	SH8	2	ススキ属		わら状、出土状況図あり
150-1	6218	S426	SH8	2	ススキ属		わら状、出土状況図あり
150-2	6218	S426	SH8	2	ススキ属		わら状、出土状況図あり
151-1	6219	S426	SH8	2	タケ属		わら状、出土状況図あり
151-2	6219	S426	SH8	2	ススキ属		わら状、出土状況図あり

表197 古墳時代前期の堅穴住居跡出土炭化材樹種同定結果一覧③

樹種No.	取上No.	地区・遺構	住居No.	層位	同定樹種	備考1	備考2
153	7153	S426	SH8	2	ススキ属		
154	7154	S426	SH8	2	ススキ属		
155	7155	S426	SH8	2	ススキ属		
156	7754	S426	SH8	1	スギ		
157	8981	S426	SH8	4	モモ炭化核	完形1、げつ葉類食害痕 1個あり	
158	5922	S435	SH7	2	コウヤマキ		S418と同一遺構
159	5923	S435	SH7	2	ハンノキ属		S418と同一遺構
160	5924	S435	SH7	2	ハンノキ属		S418と同一遺構
161	5940	S435	SH7	2	アカガシ属		S418と同一遺構
162	6223	S435	SH7	2	車子葉類		S418と同一遺構
163	6224	S435	SH7	2	ススキ属		S418と同一遺構
164	6225	S435	SH7	2	コウヤマキ		S418と同一遺構
165	6226	S435	SH7	2	サカキ		S418と同一遺構
166	6228	S435	SH7	2	サカキ		S418と同一遺構
167	6229	S435	SH7	2	サカキ		S418と同一遺構
168	6873	S435	SH7	2	ハンノキ属		S418と同一遺構
169-1	7013	S435	SH7	2	トネリコ属		S418と同一遺構
169-2	7013	S435	SH7	2	ハンノキ属		S418と同一遺構
170	7070	S435	SH7	1	アカガシ属		S418と同一遺構
No.なし	7071	S435	SH7	1	トネリコ属		S418と同一遺構
171	7072	S435	SH7	1	マタタビ属		S418と同一遺構
173	7095	S435	SH7	2	サクラ属	芯持ち半割れ	S418と同一遺構
174	7096	S435	SH7	1	アカガシ属		S418と同一遺構
175	7097	S435	SH7	1	トネリコ属	芯持ち半割れ	S418と同一遺構
176	7108	S435	SH7	1	ハンノキ属		S418と同一遺構
177	7109	S435	SH7	1	ツバキ属		S418と同一遺構
178	7110	S435	SH7	1	ミズキ属		S418と同一遺構
179	7138	S435	SH7	1	アカガシ属	芯持ち半割れ	S418と同一遺構
182	7408	S435	SH7	1	アカガシ属	芯持ち半割れ	S418と同一遺構
183	7649	S435	SH7	2	ミズキ属		S418と同一遺構
184	7650	S435	SH7	2	ム薺樹		S418と同一遺構
185	7651	S435	SH7	2	ヌルメ		S418と同一遺構
186	7680	S435	SH7	2	ヒサカキ		S418と同一遺構
187	7682	S435	SH7	2	ミズキ属		S418と同一遺構
188	7706	S435	SH7	2	アカガシ属		S418と同一遺構
189	7782	S435	SH7	2	アカガシ属		S418と同一遺構
190	8054	S435	SH7	2	ハンノキ属		S418と同一遺構
191	8086	S435	SH7	2	トネリコ属		S418と同一遺構
192	8087	S435	SH7	2	サクラ属		S418と同一遺構
193	8108	S435	SH7	2	ヒノキ		S418と同一遺構
194	8109	S435	SH7	2	サクラ属		S418と同一遺構
195	8223	S435	SH7	2	モモ炭化核	完形1 欠損あり	S418と同一遺構
No.なし	7708	S463	SH9	2	エゴノキ属		
196	7182	S463	SH9	2	スギ		
197	7183	S463	SH9	2	スギ		
199	7709	S463	SH9	2	エゴノキ属		
201	8045	S463	SH9	2	モクレン属		
202	8046	S463	SH9	2	モクレン属		
203	8047	S463	SH9	2	モクレン属		
204-1	8280	S463	SH9	2	モクレン属	芯持ち丸木破片	
204-2	8280	S463	SH9	2	モクレン属	節部	
205	8827	S463	SH9	2	エゴノキ属		
206	8963	S463	SH9	3	モクレン属		
207	7495	S468	SH11	1	ヒノキ属		
208	7496	S468	SH11	1	スギ		
209	7497	S468	SH11	1	ヒノキ		
210	7498	S468	SH11	1	クヌギ節		
211	7499	S468	SH11	1	スギ		
212	7500	S468	SH11	1	スギ		
213	7601	S468	SH11	1	ヒノキ		
214	7602	S468	SH11	1	スギ		
215	7603	S468	SH11	1	スギ		
216	7604	S468	SH11	1	ヒノキ		
217	7605	S468	SH11	1	スギ		
218	7606	S468	SH11	1	スギ		
219	7607	S468	SH11	1	スギ		
220	7608	S468	SH11	1	スギ		
221	7609	S468	SH11	1	スギ		
222	7610	S468	SH11	1	スギ		
223	7611	S468	SH11	1	スギ		
224	7639	S468	SH11	1	スギ		
225	7653	S468	SH11	1	ツブライシ		

表198 古墳時代前期の堅穴住居跡出土炭化材樹種同定結果一覧④

樹種No.	取上No.	地区・造構	住居No.	層位	同定樹種	備考1	備考2
226	7654	S468	SH11	1	スギ		
227	7657	S468	SH11	1	スギ		
228	7711	S468	SH11	1	アカガシ亜属		
229	7712	S468	SH11	1	クリ	加工痕?	
230	7715	S468	SH11	1	スギ		
231	7716	S468	SH11	1	スギ		
232	7718	S468	SH11	1	スギ		
233	7719	S468	SH11	1	スギ		
234	7720	S468	SH11	1	スギ		
235	7721	S468	SH11	1	スギ		
236-1	7722	S468	SH11	1	ヒノキ属		
236-2	7722	S468	SH11	1	ススキ属		
238	8011	S468	SH11	1	ヒノキ属		
239	8013	S468	SH11	1	ツバキ属	加工材? 削り出し丸木	
240	8014	S468	SH11	1	クリ		
241	8015	S468	SH11	1	クリ		
242-1	8050	S468	SH11	2	クリ		
242-2	8050	S468	SH11	2	スギ		
244	8860	S468	SH11	1	クリ	芯部破片	
No.なし	8990	S468	SH11	1	アカガシ亜属	芯部破片	
246	9109	S468	SH11	1	ヒノキ		
245	9052	S468	SH11	1	クリ	年代測定PLD-2439	屋根材、出土状況図あり
247	9111	S468	SH11	1	アカガシ亜属		
248-1	9170	S468	SH11	1	クリ		
248-2	9170	S468	SH11	1	ススキ属		
249	9171	S468	SH11	1	ヒノキ		屋根材、出土状況図あり
250	9172	S468	SH11	1	クリ		屋根材、出土状況図あり
251	9173	S468	SH11	1	ヒノキ属		屋根材、出土状況図あり
252	9174	S468	SH11	1	クリ	芯部破片	屋根材、出土状況図あり
253	9176	S468	SH11	1	スギ		屋根材、出土状況図あり
254	9177	S468	SH11	1	クリ		屋根材、出土状況図あり
255	9178	S468	SH11	1	スギ		屋根材、出土状況図あり
256	9179	S468	SH11	1	スギ		屋根材、出土状況図あり
257	9180	S468	SH11	1	クリ	芯部有り	屋根材、出土状況図あり
258-1	9181	S468	SH11	1	モクレン属	加工材? 削り出し棒円?	
258-2	9181	S468	SH11	1	ヒノキ属		
259	9182	S468	SH11	1	スギ		屋根材、出土状況図あり
260	9183	S468	SH11	1	ススキ属		わら状 出土状況図あり
261	9184	S468	SH11	1	ヒノキ属		屋根材、出土状況図あり
262	9185	S468	SH11	1	クリ		屋根材、出土状況図あり
263	9186	S468	SH11	1	モクレン属		屋根材、出土状況図あり
264	9187	S468	SH11	2	クリ		屋根材、出土状況図あり
265	9188	S468	SH11	2	スギ		屋根材、出土状況図あり
266	9189	S468	SH11	2	スギ		屋根材、出土状況図あり
267	9190	S468	SH11	2	スギ		屋根材、出土状況図あり
268	9191	S468	SH11	2	スギ		屋根材、出土状況図あり
269	9192	S468	SH11	2	トネリコ属		
270	9193	S468	SH11	2	クリ		
271	9194	S468	SH11	2	クリ		
272	9195	S468	SH11	2	コウヤマキ	丸木破片	
273	9197	S468	SH11	2	クリ		屋根材、出土状況図あり
274	9198	S468	SH11	2	クリ		屋根材、出土状況図あり
275	9199	S468	SH11	2	クリ		屋根材、出土状況図あり
276	9200	S468	SH11	2	クリ		屋根材、出土状況図あり
277	9428	S468	SH11	2	スギ		屋根材、出土状況図あり
No.なし	9451	S468	SH11	2	クリ		屋根材、出土状況図あり
278	9452	S468	SH11	2	モクレン属		屋根材、出土状況図あり
280	9491	S468	SH11	2	スギ		
281	9492	S468	SH11	2	クリ		屋根材、出土状況図あり
282	9493	S468	SH11	2	ヒノキ属		屋根材、出土状況図あり
283	9494	S468	SH11	2	スギ		屋根材、出土状況図あり
284-1	9495	S468	SH11	2	アカガシ亜属		
284-2	9495	S468	SH11	2	スギ		
286-1	9497	S468	SH11	2	クリ		
286-2	9497	S468	SH11	2	スギ		
No.なし	9901	S468	SH11	2	シノキ属		
287	9902	S468	SH11	2	クリ	断面	屋根材、出土状況図あり
288	9913	S468	SH11	2	クリ		屋根材、出土状況図あり
289	9914	S468	SH11	2	クリ		屋根材、出土状況図あり
290-1	9915	S468	SH11	2	クリ		
290-2	9915	S468	SH11	2	スギ		
291	9916	S468	SH11	2	クリ		屋根材、出土状況図あり

表199 古墳時代前期の堅穴住居跡出土炭化材樹種同定結果一覧(5)

樹種No.	取上No.	地区・遺構	住居No.	層位	同定樹種	備考1	備考2
292	9917	S468	SH11	2	アカガシ亜属	屋根材、出土状況図あり	
293	9918	S468	SH11	2	スギ	屋根材、出土状況図あり	
294	9919	S468	SH11	2	アカガシ亜属	屋根材、出土状況図あり	
295	9920	S468	SH11	2	クリ	屋根材、出土状況図あり	
296	9921	S468	SH11	2	アカガシ亜属	屋根材、出土状況図あり	
297	9922	S468	SH11	2	アカガシ亜属	屋根材、出土状況図あり	
298	9979	S468	SH11	2	アカガシ亜属	芯持ち丸木	屋根材、出土状況図あり
299	9980	S468	SH11	2	スギ	屋根材、出土状況図あり	
300	9981	S468	SH11	2	ヒノキ属	屋根材、出土状況図あり	
301	9982	S468	SH11	2	アカガシ亜属	屋根材、出土状況図あり	
302-1	9983	S468	SH11	2	ヒノキ属	屋根材、出土状況図あり	
302-2	9983	S468	SH11	2	トネリコ属	屋根材、出土状況図あり	
303	9984	S468	SH11	2	アカガシ亜属	屋根材、出土状況図あり	
305-1	9986	S468	SH11	2	アカガシ亜属	屋根材、出土状況図あり	
305-2	9986	S468	SH11	2	ヒノキ属	屋根材、出土状況図あり	
306	9987	S468	SH11	2	アカガシ亜属	屋根材、出土状況図あり	
307-1	9988	S468	SH11	2	アカガシ亜属	屋根材、出土状況図あり	
307-2	9988	S468	SH11	2	スギ	屋根材、出土状況図あり	
308	9989	S468	SH11	2	アカガシ亜属	屋根材、出土状況図あり	
309	9990	S468	SH11	2	アカガシ亜属	屋根材、出土状況図あり	
310	9991	S468	SH11	2	ハンノキ亜属	芯持ち丸木	屋根材、出土状況図あり
311	9992	S468	SH11	2	ヒノキ	屋根材、出土状況図あり	
312	9993	S468	SH11	2	ヒノキ	やや大径の材破片か	屋根材、出土状況図あり
313	9994	S468	SH11	2	ヒノキ属	屋根材、出土状況図あり	
314	9995	S468	SH11	2	ヒノキ	屋根材、出土状況図あり	
315	9996	S468	SH11	2	シノノキ属	屋根材、出土状況図あり	
316	9997	S468	SH11	2	ヒノキ	屋根材、出土状況図あり	
317	9998	S468	SH11	2	アカガシ亜属	屋根材、出土状況図あり	
318	9999	S468	SH11	2	ヒノキ	屋根材、出土状況図あり	
319	10000	S468	SH11	2	スギ	屋根材、出土状況図あり	
320	10008	S468	SH11	2	ヒノキ	屋根材、出土状況図あり	
321	10009	S468	SH11	2	ヒノキ	屋根材、出土状況図あり	
322	10010	S468	SH11	2	ヒノキ	屋根材、出土状況図あり	
323	10011	S468	SH11	2	アカガシ亜属	屋根材、出土状況図あり	
324	10012	S468	SH11	2	アカガシ亜属	屋根材、出土状況図あり	
325	10021	S468	SH11	2	アカガシ亜属	屋根材、出土状況図あり	
326	3974	S549	SH6	1	ツツジ科	直径0.5cm、樹皮つき	
328	4249	S549	SH6	1	広葉樹		
330	5010	S549	SH6	1	アカガシ亜属		
331	5029	S549	SH6	1	ハンノキ亜属		
332	5046	S549	SH6	1	タケ科		
333	5073	S549	SH6	1	タケ科		
334	5080	S549	SH6	1	タケ科		
335	5117	S549	SH6	1	マツ属orコウヤマキ	直径0.6cm、根材	
336	5163	S549	SH6	1	ハンノキ亜属		
337	5401	S549	SH6	1	アカガシ亜属		
338	5464	S549	SH6	1	トネリコ属		
340	5481	S549	SH6	1	アカガシ亜属		
341	5488	S549	SH6	1	スギ		
343	5491	S549	SH6	1	ツツジ科		
344	5725	S549	SH6	1	アカガシ亜属		
345	5747	S549	SH6	1	タケ科の根茎		
346	5749	S549	SH6	1	アカガシ亜属		
347	5795	S549	SH6	1	クリ		
348	5838	S549	SH6	1	アカガシ亜属		
349	5839	S549	SH6	1	アカガシ亜属		
350	5846	S549	SH6	1	不明広葉樹A		
351	5859	S549	SH6	1	アカガシ亜属		
352	5861	S549	SH6	1	アカガシ亜属		
353	5862	S549	SH6	1	散孔材		
354	5866	S549	SH6	1	アカガシ亜属		
355	5869	S549	SH6	1	カエデ属		
356	5873	S549	SH6	1	アカガシ亜属		
357	5891	S549	SH6	1	ハンノキ亜属		
358	5897	S549	SH6	1	アカガシ亜属		
No.なし	5480	S549	SH6	2	アカガシ亜属		
359	6017	S549	SH6	2	アカガシ亜属		
360	6021	S549	SH6	2	アカガシ亜属	加工木、芯去り削り出し棒状	
361	6025	S549	SH6	2	広葉樹		
362	6047	S549	SH6	2	ハンノキ亜属		
No.なし	6069	S549	SH6	3	コウヤマキ		
363	6090	S549	SH6	2	サクラ属	加工木、芯去り削り出し棒状	

表200 古墳時代前期の堅穴住居跡出土炭化材樹種同定結果一覧⑥

樹種No.	取上No.	地区・造構	住居No.	層位	同定樹種	備考1	備考2
364	6124	S549	S86	2	モクレン属	芯丸木破片	
365	6127	S549	S86	2	モクレン属		
366	6150	S549	S86	2	ハンノキ属		
367	6152	S549	S86	2	ハンノキ属		
368	6163	S549	S86	2	ハンノキ属		
369	6188	S549	S86	2	ハンノキ属		
370	6189	S549	S86	2	クヌギ属		
371	6192	S549	S86	2	ハンノキ属		
372	6335	S549	S86	2	クリ		
373	6336	S549	S86	2	モクレン属		
374	6348	S549	S86	2	ハンノキ属		
375	6361	S549	S86	2	ハンノキ属		
376	6378	S549	S86	2	アカガシ属	加工木、板目取り棒状	
378	6500	S549	S86	2	ハンノキ属		
379	6507	S549	S86	2	ハンノキ属		
380	6513	S549	S86	2	アカガシ属		
381	6514	S549	S86	2	ハンノキ属		
382	6515	S549	S86	2	アカガシ属		
383	6516	S549	S86	2	ツヅジ科		
384	6520	S549	S86	2	アカガシ属		
385	6533	S549	S86	2	アカガシ属		
386	6535	S549	S86	2	アカガシ属		
387	6559	S549	S86	2	ハンノキ属		
388	6561	S549	S86	2	ハンノキ属		
389	6591	S549	S86	2	トネリコ属		
391	6639	S549	S86	2	広葉樹		
392	6641	S549	S86	2	ハンノキ属		
393	6652	S549	S86	2	ハンノキ属		
394	6653	S549	S86	2	アカガシ属		
395	6656	S549	S86	2	ハンノキ属	芯丸木	
396	6664	S549	S86	2	サクラ属		
398	6698	S549	S86	2	アカガシ属		
399	6699	S549	S86	2	アカガシ属		
400	6703	S549	S86	2	ハンノキ属		
401	6748	S549	S86	2	ハンノキ属		
402	6752	S549	S86	2	ハンノキ属		
403	6759	S549	S86	2	アカガシ属	加工木、芯去り削り出し棒状	
404	6761	S549	S86	2	アカガシ属		
405	6764	S549	S86	2	アカガシ属		
406	6767	S549	S86	2	ハンノキ属		
407	6780	S549	S86	2	モモ炭化核	破片1	
408	6783	S549	S86	2	ハンノキ属		
409	6908	S549	S86	2	ハンノキ属		
410	6921	S549	S86	1	クリ?	箇部、分枝跡あり、小径 斜め削削痕あり	
411	6928	S549	S86	1	トネリコ属		
412	6943	S549	S86	2	ハンノキ属		
413	6948	S549	S86	2	アカガシ属		
414-1	6953	S549	S86	2	トネリコ属		
414-2	6953	S549	S86	2	アカガシ属		
415	6954	S549	S86	2	モクレン属		
416	6967	S549	S86	2	ハンノキ属		
417	6971	S549	S86	2	ハンノキ属		
418	6997	S549	S86	2	アカガシ属	加工木、芯去り削り出し棒状	
419	6999	S549	S86	2	ハンノキ属		
420	7226	S549	S86	2	ハンノキ属		
421	7240	S549	S86	2	アカガシ属		
422	7250	S549	S86	2	アカガシ属		
423	7251	S549	S86	2	ハンノキ属		
424	7253	S549	S86	2	ハンノキ属		
426	7264	S549	S86	2	アカガシ属		
427	7265	S549	S86	2	ヒノキ		
428	7266	S549	S86	2	アカガシ属		
430	7302	S549	S86	2	ハンノキ属		
431	7314	S549	S86	2	クリ		
432	7338	S549	S86	2	クリ	小破片	
433	7352	S549	S86	2	ハンノキ属		
434	7361	S549	S86	2	ハンノキ属		
435	7365	S549	S86	2	ハンノキ属		
436	7374	S549	S86	2	ハンノキ属		
437	7378	S549	S86	2	クリ?		
438	7379	S549	S86	2	散孔材	一年輪のみ	
439	7380	S549	S86	2	クリ		

表201 古墳時代前期の堅穴住居跡出土炭化材樹種同定結果一覧⑦

樹種No.	取上No.	地区・遺構	住居No.	層位	同定樹種	備考1	備考2
441	7393	S549	S46	2	アカガシ亜属	加工木、芯去り削り出し棒状	
442	7395	S549	S46	2	ハンノキ亜属		
444	7398	S549	S46	2	ハンノキ亜属		
445	7529	S549	S46	2	ハンノキ亜属		
446	7532	S549	S46	2	トネリコ属		
447	7553	S549	S46	2	ハンノキ亜属		
448	7561	S549	S46	2	アカガシ亜属		
449	7562	S549	S46	2	アカガシ亜属		
450	7563	S549	S46	2	アカガシ亜属		
451	7574	S549	S46	2	クリ		
452	7821	S549	S46	1	ツツジ科		
453	7838	S549	S46	1	スギ		
455	8301	S549	S46	1	クリ		
456	8302	S549	S46	1	ハンノキ亜属		
457	8307	S549	S46	1	トネリコ属		
458	8335	S549	S46	2	クリ		
459	8336	S549	S46	2	広葉樹(散孔材)		
460	8366	S549	S46	2	クリ		
461	8414	S549	S46	1	ハンノキ亜属		
462	8462	S549	S46	2	コナラ属	アカガシ亜属根材?	
463	8468	S549	S46	2	モクレン属		
465	8481	S549	S46	2	モクレン属		
466	8482	S549	S46	2	ハンノキ亜属		
468	8493	S549	S46	2	クリ		
469	8495	S549	S46	2	ハンノキ亜属		
470	8628	S549	S46	2	クリ		
471	8632	S549	S46	2	ハンノキ亜属		
472	8791	S549	S46	2	クリ?		
473	8792	S549	S46	2	クリ		
474	8793	S549	S46	2	クリ		
475	8794	S549	S46	2	クリorシノキ属		
476	8795	S549	S46	2	クリ		
477	8835	S549	S46	2	広葉樹		
478	8836	S549	S46	2	クリ		
479	8837	S549	S46	2	モクレン属		
480	8841	S549	S46	2	アカガシ亜属		
481	8842	S549	S46	2	クリ		
482	8850	S549	S46	2	クリ		
483	8851	S549	S46	2	スギ		
484	8852	S549	S46	2	クリ		
485	8854	S549	S46	2	クリ		
486	8927	S549	S46	2	クヌギ節		
487	8928	S549	S46	2	クリ		
488	8932	S549	S46	2	クリ		
489	8933	S549	S46	2	クリ		
490	8934	S549	S46	2	ハンノキ亜属		
491	8936	S549	S46	2	ハンノキ亜属		
492	8937	S549	S46	2	モクレン属		
493	8939	S549	S46	2	クリ		
494-1	8940	S549	S46	2	クヌギ節		
494-2	8940	S549	S46	2	クリ		
495	9075	S549	S46	2	モクレン属		
496	9081	S549	S46	2	クリ		
497	9084	S549	S46	2	広葉樹		
498	9085	S549	S46	2	広葉樹(散孔材)		
499	9089	S549	S46	2	サカキ		
500	9090	S549	S46	2	クリ?		
501	9091	S549	S46	2	クリorシノキ属		
502	9092	S549	S46	2	クリ		
503	9098	S549	S46	2	ムクロジ		
504	9212	S549	S46	2	モクレン属		
505	9221	S549	S46	2	クリ?		
506	9227	S549	S46	1	アカガシ亜属		
507	9228	S549	S46	1	アカガシ亜属		
508-1	9256	S549	S46	2	クリ		
508-2	9256	S549	S46	2	モクレン属		
509	9260	S549	S46	2	クリ		
510	9269	S549	S46	2	クリ		
511	9277	S549	S46	2	ハンノキ亜属		
512	9292	S549	S46	2	シノキ属		
513	9300	S549	S46	1	ヒノキ		
514	9317	S549	S46	2	モクレン属		

表202 古墳時代前期の堅穴住居跡出土炭化材樹種同定結果一覧⑧

樹種No.	取上No.	地区・造構	住居No.	層位	同定樹種	備考1	備考2
515	9321	S549	SH6	2	ヒノキ		
516	9323	S549	SH6	2	クリ		
517	9324	S549	SH6	2	モクレン属		
518	9325	S549	SH6	2	クリ		
519	9326	S549	SH6	2	アカガシ属	芯含む破片	
520	9327	S549	SH6	2	クリ		
522	9331	S549	SH6	2	ハンノキ属		
523	9332	S549	SH6	2	広葉樹(散孔材)		
525	9334	S549	SH6	2	スキ属		
526	9335	S549	SH6	2	広葉樹		
527	9342	S549	SH6	2	ハンノキ属		
528	9343	S549	SH6	2	モクレン属		
No.なし	9560	S549	SH6	2	ハンノキ属		
529	9561	S549	SH6	2	広葉樹(散孔材)		
531	9513	S549	SH6	2	ハンノキ属		
532	9514	S549	SH6	2	クリ		
533	9515	S549	SH6	2	ハンノキ属		
535	9532	S549	SH6	2	ヒノキ		
536	9533	S549	SH6	2	シイノキ属		
537	9534	S549	SH6	2	クリorシイノキ属		
538	9545	S549	SH6	2	モクレン属		
539	9546	S549	SH6	2	アカガシ属		
541	9552	S549	SH6	2	アカガシ属		
542	9553	S549	SH6	2	アカガシ属		
543	9554	S549	SH6	2	スギ		
544	9555	S549	SH6	2	クヌギ節		
545	9557	S549	SH6	2	クリ		
546	9558	S549	SH6	2	針葉樹		
547	9562	S549	SH6	2	モクレン属		
549	9576	S549	SH6	2	クリ		
550	9577	S549	SH6	2	広葉樹(散孔材)		
551	9578	S549	SH6	1	スギ		
552	9579	S549	SH6	1	スキ属		
553	9581	S549	SH6	2	クリ		
555	9599	S549	SH6	1	モクレン属		
556	9600	S549	SH6	1	モクレン属		
557	9614	S549	SH6	1	ハンノキ属		
559	9633	S549	SH6	1	モクレン属		
560	9634	S549	SH6	1	針葉樹		
561	9635	S549	SH6	1	ハンノキ属		
563	9647	S549	SH6	2	アカガシ属		
564	9648	S549	SH6	1	ハンノキ属		
565	9672	S549	SH6	2	ハンノキ属		
566	9673	S549	SH6	2	スギ		
567	9679	S549	SH6	2	ハンノキ属		
568	9699	S549	SH6	2	ハンノキ属		
569	9701	S549	SH6	2	ハンノキ属		
570	9711	S549	SH6	2	広葉樹		
571	9712	S549	SH6	2	ハンノキ属		
572	9782	S549	SH6	2	広葉樹		
575	9808	S549	SH6	2	モクレン属		
576	9809	S549	SH6	2	針葉樹		
578	10413	S549	SH6	2	クリ		
579	10414	S549	SH6	2	クリ		
580	9379	S662	SH13	1	トネリコ属		
581	10400	S662	SH13	1	ハンノキ属		
583	11444	S662	SH13	1	ヒノキ属		
584	11465	S662	SH13	1	アカガシ属		
585	11466	S662	SH13	1	ハンノキ属		
586	11485	S662	SH13	1	ハンノキ属		
587	11486	S662	SH13	1	アカガシ属		
588	11502	S662	SH13	1	ハンノキ属		
589	11566	S662	SH13	2	ヒノキ		
590	11702	S662	SH13	1	ミズキ属		屋根材、出土状況図あり
591	11707	S662	SH13	2	ハンノキ属		屋根材、出土状況図あり
592	11804	S662	SH13	2	ミズキ属		屋根材、出土状況図あり
593-1	11805	S662	SH13	2	ススキ属		屋根材、出土状況図あり
593-2	11805	S662	SH13	2	スキ属		屋根材、出土状況図あり
593-3	11805	S662	SH13	2	広葉樹(散孔材)		屋根材、出土状況図あり
594	11806	S662	SH13	2	ハンノキ属		屋根材、出土状況図あり
595	11807	S662	SH13	2	ハンノキ属		屋根材、出土状況図あり
596	11808	S662	SH13	2	ハンノキ属		屋根材、出土状況図あり

表203 古墳時代前期の堅穴住居跡出土炭化材樹種同定結果一覧⑨

樹種No.	取上No.	地区・構造	住居No.	層位	同定樹種	備考1	備考2
597	11809	S662	SH13	2	ヒノキ属	年代測定PLD-2440	屋根材、出土状況図あり
598	11810	S662	SH13	2	アカガシ亜属		わら状、出土状況図あり
599	11811	S662	SH13	2	アカガシ亜属		わら状、出土状況図あり
600-1	11812	S662	SH13	2	タケモ科		わら状、出土状況図あり
600-2	11812	S662	SH13	2	ススキ属		わら状、出土状況図あり
601-1	11813	S662	SH13	2	タケモ科根茎		
601-2	11813	S662	SH13	2	ススキ属		
602	11814	S662	SH13	2	ススキ属		
603	11848	S662	SH13	2	イヌガヤ		
604	11855	S662	SH13	2	アカガシ亜属		
605	11856	S662	SH13	2	ヌルデ		
606	11866	S662	SH13	2	マタタビ属		
607	11868	S662	SH13	2	ハンノキ亜属		
608	11869	S662	SH13	2	アカガシ亜属		
609	11872	S662	SH13	2	ミズキ属		
610	11883	S662	SH13	2	アカガシ亜属		
611	11884	S662	SH13	2	ヒノキ属		
612	11908	S662	SH13	2	ヒノキ属		
613	9812	S763	SH6内	1	トネリコ属		方形に組まれた炭化材
614	9813	S763	SH6内	1	広葉樹		方形に組まれた炭化材
615	9814	S763	SH6内	2	スピ		方形に組まれた炭化材
616	9815	S763	SH6内	2	トネリコ属		方形に組まれた炭化材
617	9816	S763	SH6内	2	トネリコ属		方形に組まれた炭化材
618	9817	S763	SH6内	2	針葉樹		方形に組まれた炭化材
619	9821	S763	SH6内	2	カエデ属		方形に組まれた炭化材
620	9825	S763	SH6内	2	クリ		方形に組まれた炭化材
621	9837	S763	SH6内	2	ハンノキ亜属		方形に組まれた炭化材
622	9838	S763	SH6内	2	アカガシ亜属		方形に組まれた炭化材
623	9839	S763	SH6内	2	針葉樹		方形に組まれた炭化材
624	9845	S763	SH6内	2	コウヤマキ		方形に組まれた炭化材
625	9880	S763	SH6内	1	シノノキ属		方形に組まれた炭化材
626	9885	S763	SH6内	1	ススキ属		方形に組まれた炭化材
627	9887	S763	SH6内	1	針葉樹		方形に組まれた炭化材
628	9890	S763	SH6内	1	広葉樹		方形に組まれた炭化材
630	10105	S763	SH6内	1	ハンノキ亜属		方形に組まれた炭化材
631	10106	S763	SH6内	2	広葉樹		
633	10111	S763	SH6内	1	シノノキ属		
634	10114	S763	SH6内	1	広葉樹		
635	10116	S763	SH6内	1	針葉樹		
636	10127	S763	SH6内	1	ハンノキ亜属		
637	10128	S763	SH6内	1	ツバキ属		
638	10130	S763	SH6内	1	クリ		
639	10131	S763	SH6内	1	広葉樹		
641	10136	S763	SH6内	2	カエデ属		
642	10144	S763	SH6内	2	カエデ属		
643	10146	S763	SH6内	2	針葉樹		
644	10147	S763	SH6内	2	クリ		
646	10149	S763	SH6内	2	広葉樹(散孔材)		
647	10150	S763	SH6内	2	カエデ属		
648	10165	S763	SH6内	1	コウヤマキ		北側の材
649	10166	S763	SH6内	1	ハンノキ亜属		東側の材
650	10167	S763	SH6内	1	シノノキ属		南側の材
651	10168	S763	SH6内	1	ヒノキ属	年代測定PLD-2442	西側の材
652	8721	M24	SH14?	1b	ハンノキ亜属		S1150に開凍?
653	8722	M24	SH14?	1b	サクラ属		S1150に開凍?
654	11338	M25	SH14?	1b	ハンノキ亜属		S1150に開凍?
655	11357	M24	SH14?	1b	サクラ属		S1150に開凍?
656	11358	M24	SH14?	1b	アカガシ亜属		S1150に開凍?
657	11360	M24	SH14?	1b	サクラ属		S1150に開凍?
658	11364	N24	SH14?	1b	ハンノキ亜属		S1150に開凍?
659	11366	N24	SH14?	1b	ハンノキ亜属		S1150に開凍?
660	11368	M25	SH14?	1b	ハンノキ亜属		S1150に開凍?
661	11373	M24	SH14?	1b	サクラ属		S1150に開凍?
662	11374	M24	SH14?	1b	ハンノキ亜属		S1150に開凍?
663	11377	M25	SH14?	1b	ハンノキ亜属		S1150に開凍?
664	11385	M25	SH14?	1b	アカガシ亜属		S1150に開凍?
665	11388	M25	SH14?	1b	サクラ属		S1150に開凍?
666	11392	M25	SH14?	1b	サカキ		S1150に開凍?
667	11393	M25	SH14?	1b	ハンノキ亜属		S1150に開凍?
668	11394	M25	SH14?	1b	サクラ属		S1150に開凍?
669	11395	M25	SH14?	1b	サクラ属		S1150に開凍?
670	11396	M25	SH14?	1b	モクレン属		S1150に開凍?

表204 古墳時代前期の堅穴住居跡出土炭化材樹種同定結果一覧⑩

樹種No.	取上No.	地区・遺構	住居No.	層位	同定樹種	備考1	備考2
671	11399	M25	SH14?	1b	ハンノキ亜属	S1150に開連?	
672	12003	M24	SH14?	1b	アカガシ亜属	S1150に開連?	
673	12004	M24	SH14?	1b	ハンノキ亜属	S1150に開連?	
674	12005	M24	SH14?	1b	ハンノキ亜属	丸木破片	S1150に開連?
675	12229	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
676	12230	S1150	SH14	1	マツ属複雜管束亜属		
677	12231	S1150	SH14	1	マツ属複雜管束亜属		
678	12242	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
679	12244	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
680	12249	S1150	SH14	1	サカキ		
681	12250	S1150	SH14	1	サカキ		
682	12251	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
683-1	12252	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属	芯持ち丸木	
683-2	12252	S1150	SH14	1	サカキ	筋か分枝部	
683-3	12252	S1150	SH14	1	シイノキ属	芯含む破片	
684	12253	S1150	SH14	1	アカガシ亜属		
685	12256	S1150	SH14	1	マツ属複雜管束亜属	芯持ち丸木	
686	12264	S1150	SH14	1	アカガシ亜属	小枝?	
687	12270	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
688	12274	S1150	SH14	1	サカキ		
689	12316	S1150	SH14	1	サカキ		
690-1	12317	S1150	SH14	1	アカガシ亜属	芯持ち丸木	
690-2	12317	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属	芯持ち丸木	
691-1	12318	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属	分割加工	
691-2	12318	S1150	SH14	1	ツブライジ		
691-3	12318	S1150	SH14	1	アカガシ亜属		
692-1	12319	S1150	SH14	1	アカガシ亜属		
692-2	12319	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属	芯持ち平割れ	
693	12320	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
694-1	12321	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
694-2	12321	S1150	SH14	1	シイノキ属		
695	12322	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
696-1	12324	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
696-2	12324	S1150	SH14	1	アカガシ亜属		
697	12331	S1150	SH14	1	サカキ		
698	12338	S1150	SH14	1	サクラ属		
699	12341	S1150	SH14	1	サクラ属		
700-1	12343	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
700-2	12343	S1150	SH14	1	マツ属複雜管束亜属		
701-1	12345	S1150	SH14	1	サカキ		
701-2	12345	S1150	SH14	1	アカガシ亜属		
702	12348	S1150	SH14	1	シイノキ属		
703	12349	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
704	12351	S1150	SH14	1	モモ炭化核	破片2	
705-1	12372	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
705-2	12372	S1150	SH14	1	アカガシ亜属		
706-1	12373	S1150	SH14	1	アカガシ亜属		
706-2	12373	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
707	12374	S1150	SH14	1	サカキ		
708-1	12377	S1150	SH14	1	シイノキ属		
708-2	12377	S1150	SH14	1	アカガシ亜属		
709	12382	S1150	SH14	1	サカキ		
710	12384	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
711-1	12391	S1150	SH14	1	アカガシ亜属	芯持ち丸木	
711-2	12391	S1150	SH14	1	モクレン属	芯持ち丸木	
711-3	12391	S1150	SH14	1	モクレン属		
712	12394	S1150	SH14	1	アカガシ亜属		
713-1	12401	S1150	SH14	1	アカガシ亜属		
713-2	12401	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
714	12405	S1150	SH14	1	マツ属複雜管束亜属		
715	12417	S1150	SH14	1	サカキ		
716-1	12418	S1150	SH14	1	アカガシ亜属	芯部か小怪材	
716-2	12418	S1150	SH14	1	モクレン属		
717	12419	S1150	SH14	1	ヒサカキ		
718	12420	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
719	12423	S1150	SH14	1	サカキ		
720	12424	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
721	12431	S1150	SH14	1	サクラ属		
722	12445	S1150	SH14	1	シイノキ属		
723	12446	S1150	SH14	1	シイノキ属		
724	12447	S1150	SH14	1	シイノキ属		
725-1	12452	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		

表205 古墳時代前期の堅穴住居跡出土炭化材樹種同定結果一覧⑪

樹種No.	取上No.	地区・構造	住居No.	層位	同定樹種	備考1	備考2
725-2	12452	S1150	SH14	1	ツブライジ		
725-3	12452	S1150	SH14	1	アカガシ亞属		
726	12453	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		
727-1	12454	S1150	SH14	1	アカガシ亞属	芯部含む破片	
727-2	12454	S1150	SH14	1	シノキ属		
728	12465	S1150	SH14	2	アカガシ亞属	芯部含む破片	
729-1	12467	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		
729-2	12467	S1150	SH14	1	アカガシ亞属	芯部含む破片	
730	12470	S1150	SH14	2	アカガシ亞属		
731	12471	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		
732	12472	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		
733-1	12473	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		
733-2	12473	S1150	SH14	2	ススキ属		
734	12474	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		
735-1	12475	S1150	SH14	2	シノキ属		
735-2	12475	S1150	SH14	2	アカガシ亞属		
735-3	12475	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		
736	12479	S1150	SH14	2	アカガシ亞属	丸木破片	
737	12480	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		
738	12481	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属	芯持ち半割れ	
739	12482	S1150	SH14	2	アカガシ亞属	丸木破片	
740-1	12483	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		
740-2	12483	S1150	SH14	2	アカガシ亞属		
741-1	12484	S1150	SH14	2	アカガシ亞属		
741-2	12484	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		
742	12493	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属	芯持ち丸木	
743	12494	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		
745	12497	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		
746-1	12498	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		
746-2	12498	S1150	SH14	2	アカガシ亞属		
747-1	12499	S1150	SH14	2	アカガシ亞属		
747-2	12499	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		
747-3	12499	S1150	SH14	2	シノキ属		
748-1	12500	S1150	SH14	2	シノキ属		
748-2	12500	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属	加工材? 芯去り削り出し	
749	12503	S1150	SH14	2	シノキ属		
750-1	12504	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属	芯部含む破片	
750-2	12504	S1150	SH14	2	シノキ属		
751	12514	S1150	SH14	2	サクラ属		
752	12522	S1150	SH14	2	アカガシ亞属	薄い板状破片	
753	12524	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		
754	12526	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属	芯丸木破片	
755	12527	S1150	SH14	2	サクラ属		
756	12528	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属	芯丸木破片	
757-1	12532	S1150	SH14	2	サクラ属	丸木破片	
757-2	12532	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		
758	12533	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		
759	12536	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		
760	12539	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属	丸木破片	
761	12540	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		
762	12554	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属	丸木破片	
763	12555	S1150	SH14	2	アカガシ亞属	芯部含む破片	
764-1	12556	S1150	SH14	2	アカガシ亞属	年代測定PILD-2441	屋根材、出土状況図あり
764-2	12556	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
765	12565	S1150	SH14	2	サクラ属		屋根材、出土状況図あり
766	12584	S1150	SH14	2	アカガシ亞属		屋根材、出土状況図あり
767	12586	S1150	SH14	2	アカガシ亞属		屋根材、出土状況図あり
768	12587	S1150	SH14	2	アカガシ亞属		屋根材、出土状況図あり
769	12588	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
770	12589	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
771	12590	S1150	SH14	2	シノキ属		屋根材、出土状況図あり
772	12591	S1150	SH14	2	アカガシ亞属		屋根材、出土状況図あり
773	12592	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
774	12593	S1150	SH14	2	アカガシ亞属		屋根材、出土状況図あり
775	12594	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
776	12595	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
777	12599	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
778	12600	S1150	SH14	2	アカガシ亞属		屋根材、出土状況図あり
779	12801	S1150	SH14	2	ヒサカキ		屋根材、出土状況図あり
780	12802	S1150	SH14	2	ヒサカキ		屋根材、出土状況図あり
781	12803	S1150	SH14	2	ケンボナシ属		屋根材、出土状況図あり
782	12804	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり

表206 古墳時代前期の堅穴住居跡出土炭化材樹種同定結果一覧⑫

樹種No.	取上No.	地区・構造	住居No.	層位	同定樹種	備考1	備考2
783	12805	S1150	SH14	2	アカガシ亞属	屋根材、出土状況図あり	
784	12806	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属	屋根材、出土状況図あり	
785	12807	S1150	SH14	2	サクラ属	屋根材、出土状況図あり	
786	12808	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属	屋根材、出土状況図あり	
787	12809	S1150	SH14	2	アカガシ亞属	屋根材、出土状況図あり	
788	12810	S1150	SH14	2	アカガシ亞属	屋根材、出土状況図あり	
789	12811	S1150	SH14	2	アカガシ亞属	屋根材、出土状況図あり	
790	12812	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属	屋根材、出土状況図あり	
791	12813	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属	芯持丸木	屋根材、出土状況図あり
792	12814	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
793	12815	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
794	12816	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
795	12817	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
796	12818	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
797	12819	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
798	12820	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
799	12821	S1150	SH14	1	サカキ		屋根材、出土状況図あり
800	12824	S1150	SH14	1	アカガシ亞属		屋根材、出土状況図あり
801-1	12825	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
801-2	12825	S1150	SH14	1	アカガシ亞属		屋根材、出土状況図あり
802-1	12826	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
802-2	12826	S1150	SH14	1	アカガシ亞属		屋根材、出土状況図あり
803	12827	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属	芯持破片	屋根材、出土状況図あり
804	12828	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
805	12829	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
806	12830	S1150	SH14	1	アカガシ亞属		屋根材、出土状況図あり
807	12831	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
808	12832	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
809	12833	S1150	SH14	1	アカガシ亞属		屋根材、出土状況図あり
810	12834	S1150	SH14	1	シノノキ属		屋根材、出土状況図あり
811-1	12835	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
811-2	12835	S1150	SH14	1	クリ		屋根材、出土状況図あり
811-3	12835	S1150	SH14	1	シノノキ属		屋根材、出土状況図あり
812	12836	S1150	SH14	1	ツブライシ		屋根材、出土状況図あり
813	12837	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
814	12838	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
815	12839	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
816	12841	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
817	12842	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
818	12857	S1150	SH14	2	アカガシ亞属		屋根材、出土状況図あり
819	12860	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
820	12862	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
821	12863	S1150	SH14	2	サクラ属		屋根材、出土状況図あり
822	12864	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
823	12865	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
824	12871	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
825	12872	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
826	12874	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
827	12875	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
828	12876	S1150	SH14	2	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
829	12824	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
830	18569	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
831	18576	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
832	18582	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
833	18583	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
834	18613	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
835	18634	S1150	SH14	1	アカガシ亞属		屋根材、出土状況図あり
836	18636	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
837	18640	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
838	18671	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
839-2	18695	S1150	SH14	1	アカガシ亞属		屋根材、出土状況図あり
839-3	18695	S1150	SH14	1	スギ		屋根材、出土状況図あり
840	18707	S1150	SH14	1	ニレ属		屋根材、出土状況図あり
841	18737	S1150	SH14	1	アカガシ亞属		屋根材、出土状況図あり
842	18739	S1150	SH14	1	サクラ属		屋根材、出土状況図あり
843	18740	S1150	SH14	1	スギ		屋根材、出土状況図あり
844	18741	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
845	18742	S1150	SH14	1	サクラ属		屋根材、出土状況図あり
846	18804	S1150	SH14	1	アカガシ亞属		屋根材、出土状況図あり
847	18805	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
848	18828	S1150	SH14	1	ハンノキ亞属		屋根材、出土状況図あり
849	18829	S1150	SH14	1	スギ		屋根材、出土状況図あり

表207 古墳時代前期の堅穴住居跡出土炭化材樹種同定結果一覧⑬

樹種No.	取上No.	地区・構造	住居No.	層位	同定樹種	備考1	備考2
850	18839	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
851	18866	S1150	SH14	1	アカガシ亜属		
852	18867	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
853	18904	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
854	18915	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
855	18920	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
856	18921	S1150	SH14	1	不明環乳孔A		
857-1	18924	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
857-2	18924	S1150	SH14	1	アカガシ亜属		
858	19109	S1150	SH14	1	モクレン属		
859	19110	S1150	SH14	1	アカガシ亜属		
860	19111	S1150	SH14	1	モクレン属		
861	19112	S1150	SH14	1	ケンボナシ属		
862	19113	S1150	SH14	1	ケンボナシ属		
863	19114	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
864	19115	S1150	SH14	1	アカガシ亜属		
865	19116	S1150	SH14	1	ニレ属		
866	19118	S1150	SH14	1	アカガシ亜属		
867	19119	S1150	SH14	1	アカガシ亜属		
868	19120	S1150	SH14	1	ニレ属		
869-1	19122	S1150	SH14	1	アカガシ亜属		
869-2	19122	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
870	19123	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
871	19124	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
872	19125	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
873	19126	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
874	19127	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
875	19128	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
876	19129	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
877	19130	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
878	19131	S1150	SH14	1	勘皮		
879	19132	S1150	SH14	1	サクラ属		
880	19133	S1150	SH14	1	サクラ属		
881	19134	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
882	19135	S1150	SH14	1	スギ	板材?	
883	19136	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
884	19137	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
885	19138	S1150	SH14	1	スギ		
886	19139	S1150	SH14	1	アカガシ亜属		
887	19140	S1150	SH14	1	サクラ属		
888	19141	S1150	SH14	1	サクラ属		
889	19142	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
890	19143	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
891	19144	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
892	19145	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
893	19146	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
894	19147	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
895	19148	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
896	19149	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
897	19161	S1150	SH14	1	ハンノキ亜属		
898	19209	S1150	SH14	3	ハンノキ亜属		

表208 遺構ごとの検出樹種集計

検出樹種	遺構									合計	
	SH4 S235	SH6 S549	SH6 土坑内 S763	SH7 S418 S435	SH8 S426	SH9 S463	SH11 S468	SH13 S662	SH14? M24・M25 N24		
落葉広葉樹	ハンノキ亜属	4	60	4	29		1	9	11	131	249
	ハンノキ属		2		1						3
	クリ		38	3			28			1	70
	クリ?			5							5
	モクレン属	2	20		6		6	3		1	43
	サクラ属		2		7				7	15	31
	トネリコ属	3	6	3	11		2	1			26
	ミズキ属				15			3			18
	クヌギ節		4		2		1				7
	カエデ属		1	4							5
	エゴノキ属	1					3				4
	ニレ属									3	3
	ケンボナシ属									3	3
	マタタビ属				1			1			2
	コナラ節				1						1
	キハダ				1						1
	ケヤキ				1						1
	ムクロジ		1								1
	ヌルデ				1			1			2
	イヌシデ節				1						1
	小計(落葉広葉樹)										476
常緑広葉樹	アカガシ亜属	2	46	1	21	1		20	7	3	57
	シノノキ属		2	3	4	1		2			16
	ツブライ							1			3
	サカキ	1			4				1	12	18
	ツバキ属			1	2	1		1			5
	ヒサカキ				1					3	4
	モチノキ属				2						2
	小計(常緑広葉樹)										219
広葉樹	ツツジ科		4		1						5
	クリカシノキ属		3								3
	コナラ属(アカガシ亜属根材?)		1								1
	櫛孔材A									1	1
	広葉樹		1								1
	広葉樹(散孔材)	7	1	5	1				1		15
	広葉樹	8	5	4							17
	樹皮									1	1
	小計(広葉樹)										44
針葉樹	スギ	1	6	1	3	1	2	40		5	59
	スギ?				2						2
	ヒノキ	2	4		2			14	2		24
	ヒノキ属			1	3			10	3		17
	ヒノキ属?				1						1
	コウヤマキ	1	2	5				1			9
	マツ属複数管束亞属									5	5
	マツ属かコウヤマキ(根材)		1								1
	イヌガヤ								1		1
	針葉樹	3	5	1							9
	小計(針葉樹)										128
單子葉類	ススキ属		2	1	8	13		3	5		1
	タケ亜科	3			1	1			1		6
	タケ亜科根茎	1							1		2
	单子葉類				1						1
果実	モモ炭化核		1		2	1				1	5
	総合計	15	234	35	150	20	11	127	36	23	914

第4節 放射性炭素年代測定

1 はじめに

当遺跡で検出した竪穴住居跡出土炭化材及び土器付着物煤類について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。分析は、パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ（小林絆一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・瀬谷薫・藤根久）が担当した。

2 試料と方法

測定試料の情報、調整データは表209のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS : NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C 年代、曆年代を算出した。

表209 測定試料及び処理

測定番号	遺跡コード	試料データ	前処理	測定
PLD-2438	東野遺跡 遺構：9号住居跡 遺物No：5526	試料の種類：炭化材（ツバキ属） 測定年輪：不明 状態：dry	酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 木酸化ナトリウム1.0N, 塩酸1.2N)	HVEE製Model 4130-AMS
PLD-2439	東野遺跡 遺構：11号住居跡 遺物No:60052	試料の種類：炭化材（クリ） 測定年輪：不明 状態：dry	酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 木酸化ナトリウム1.0N, 塩酸1.2N)	HVEE製Model 4130-AMS
PLD-2440	東野遺跡 遺構：13号住居跡 遺物No：11809	試料の種類：炭化材（ヒノキ属） 測定年輪：不明 状態：dry	酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 木酸化ナトリウム1.0N, 塩酸1.2N)	HVEE製Model 4130-AMS
PLD-2441	東野遺跡 遺構：14号住居跡 遺物No：S12556	試料の種類：炭化材（アカガシ属） 測定年輪：不明 状態：dry	酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 木酸化ナトリウム1.0N, 塩酸1.2N)	HVEE製Model 4130-AMS
PLD-2442	東野遺跡 遺構：6号住居跡内土器 遺物No：10168	試料の種類：炭化材（ヒノキ属） 測定年輪：不明 状態：dry	酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 木酸化ナトリウム1.0N, 塩酸1.2N)	HVEE製Model 4130-AMS
PLD-4719	東野遺跡 遺構：SZ2 遺物No：294	試料の種類：土器付着物・洞部外面（煤類） 測定年輪：不明 状態：dry・カビ：無 保存処理：バイオダーダー処理済	超音波煮沸洗浄、アセトン処理 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 木酸化ナトリウム0.5N, 塩酸1.2N)	NEC製コンパクトAMS-1.5SDH

3 結果

表210に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ¹³C）、同位体分別効果の補正を行った¹⁴C 年代、¹⁴C 年代を曆年代に較正した年代範囲、曆年較正に用いた年代値を、図255に曆年較正結果をそれぞれ示した。曆年較正に用いた年代値は、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

¹⁴C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C 年代 (yrBP) の算出には、¹⁴C の半減期として Libby の半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C 年代誤差 (± 1σ) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C 年代がその¹⁴C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示すものである。なお、曆年較正の詳細は以下の通りである。

曆年較正

曆年較正とは、大気中の¹⁴C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C 濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴C の半減期5730±40年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。¹⁴C 年代の曆年較正には OxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1σ 曆年代範囲は、OxCal の確

率法を使用して算出された¹⁴C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

表210 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	¹⁴ C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C 年代を暦年代に較正した年代範囲		暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)
			1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲	
PLD-2438	-25.0	1705 \pm 30	260AD (15.2%) 290AD 320AD (53.0%) 390AD	250AD (95.4%) 410AD	1705 \pm 28
PLD-2439	-26.4	1720 \pm 30	250AD (33.8%) 300AD 310AD (34.4%) 380AD	240AD (95.4%) 400AD	1722 \pm 28
PLD-2440	-23.3	1905 \pm 30	70AD (68.2%) 130AD	20AD (93.0%) 180AD 190AD (2.4%) 220AD	1905 \pm 28
PLD-2441	-28.2	1715 \pm 30	250AD (29.2%) 300AD 320AD (39.0%) 390AD	240AD (95.4%) 400AD	1717 \pm 28
PLD-2442	-24.3	1820 \pm 30	135AD (47.8%) 200AD 205AD (20.4%) 235AD	120AD (94.1%) 260AD 300AD (1.3%) 320AD	1822 \pm 28
PLD-4719	-26.3 \pm 0.1	1325 \pm 20	655AD (68.2%) 690AD	650AD (82.1%) 720AD 740AD (13.3%) 770AD	1326 \pm 21

($\delta^{13}\text{C}$ は、PLD-2438～2442が質量分析計で測定、PLD-4719が加速器質量分析計で測定)

4 考察

住居跡及び住居跡内土坑は、いずれも古墳時代前期（松河戸 I 式）の遺構であるが、PLD-2440の13号住居跡の炭化材とPLD-2442の6号住居跡内土坑の炭化材は古い年代値が測定された。これらの炭化材はヒノキ属であることから、太さのわりに年輪数が多い樹木である。従って、比較的中心に近い部分を測定した可能性があり、すなわち古木効果により古い年代値が測定されたことが考えられる。その他の住居跡から出土した炭化材は、 2σ 暦年代範囲において250年前後～400年前後のまとまった年代値を示す。

煤類が付着した土器は、8世紀初頭と想定されているが、 1σ 暦年代範囲においてCal AD 655～690年 (68.2%)、 2σ 暦年代範囲においてCal AD 650～720年 (82.1%) であり、 2σ 暦年代範囲において7世紀中頃～8世紀初めの年代範囲を示している。

参考文献

- Bronk Ramsey C. (1995) 「Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program」『Radiocarbon37 (2)』
- Bronk Ramsey C. (2001) 「Development of the Radiocarbon Program OxCal」『Radiocarbon43 (2A)』
- 中村俊夫 (2000) 「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の¹⁴C 年代』
- Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmehle, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. (2004) 「Radiocarbon 46」

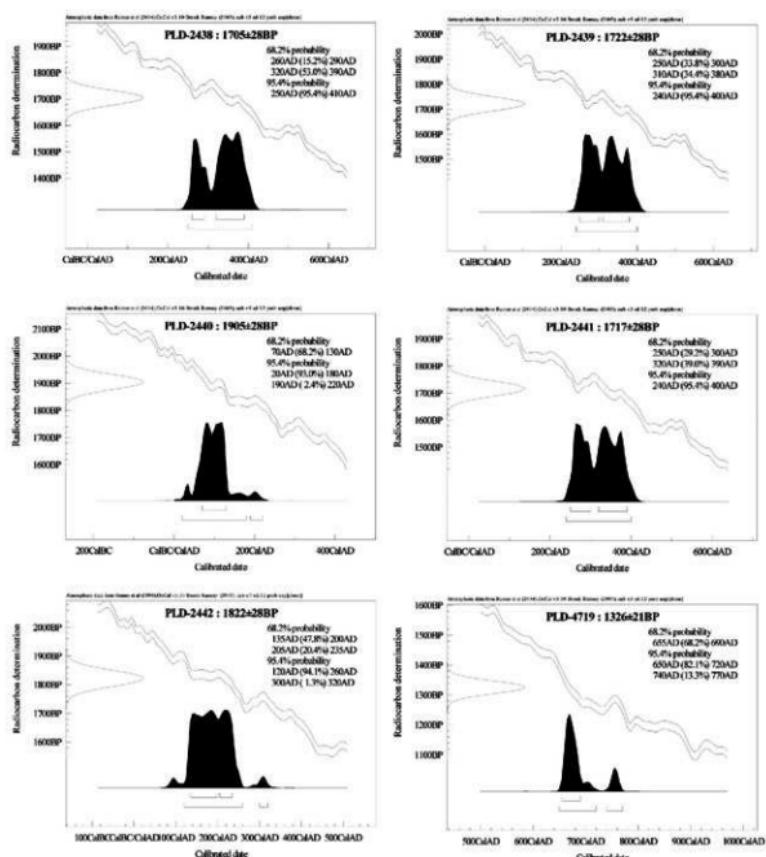


図255 積穴住居跡出土炭化材及びSZ2出土土器付着煤類の暦年較正結果

第5節 土器胎土と粘土塊分析

1 はじめに

当遺跡の7号住居跡と14号住居跡の床面で粘土塊が出土した。また、これらの住居跡では、甕、壺、高杯がセットで出土している。ここでは、住居跡から出土した土器及び床面粘土について、その胎土及び粘土塊の材料を検討した。分析は、藤根久・長友純子（パレオ・ラボ）が担当した。

2 試料と方法

試料は、7号住居跡及び14号住居跡から出土した土器8試料と床面粘土4試料である（表211）。これら試料は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の薄片を作成した。なお、床面粘土は、予め電気炉内で750度、6時間の焼成を行った。

- (1) 試料は、始めに岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥した。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。これをスライドグラスに接着し平面を作成した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。
- (2) さらに、研磨機及びガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドグラスに接着した。
- (3) その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作成した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

試料は、薄片全面について微化石類（珪藻化石、骨針化石、胞子化石）や大型粒子などの特徴について観察・記載を行った。なお、ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは次の通りである。

表211 分析した土器試料とその詳細

No.	器種	遺構	遺物No.	取上No.	時期	分析位置	土の色（色相 明度/彩度）	肉眼的特徴
1	S字状口縁台付甕	SH14	417	-	松河戸I式	口縁部	浅黄色 2.5Y 7/3	中黒層顯著
2	壺		423	-		胴部	浅黄色 2.5Y 8/4	中黒層無し
3	鉢		432	-		口縁部	にぶい黄色 2.5Y 6/3	中黒層無し
4	S字状口縁台付甕		419	-		頭部	にぶい黄褐色 10YR 7/4	中黒層有り
5	広口壺		420	-		口縁部	浅黄色 2.5Y 7/4	中黒層顯著
6	高杯		299	-		口縁部	にぶい黄褐色 10YR 7/2	中黒層顯著
7	壺		295	-		胴部	褐灰色 10YR 5/2	中黒層有り
8	S字状口縁台付甕		286	-		台部	浅黄褐色 10YR 8/3	中黒層無し
9	床面粘土	SH7	-	9143	-	-	黄褐色 2.5Y 5/4	砂混じり粘土、流紋岩多く混じる
10	床面粘土		-	12848		-	灰白色 5Y 7/2	礫混じり粘土、流紋岩混じる
11	床面粘土	SH14	-	12849		-	灰白色 5Y 7/2	礫混じり粘土、流紋岩混じる
12	床面粘土		-	12850		-	明黄褐色 2.5Y 6/6	礫混じり粘土、流紋岩混じる

【珪藻化石】

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、その大きさは10～数百μm程度である。珪藻は海水域から淡水域に広く分布し、個々の種類によって特定の生息環境をもつ。最近では、小杉（1988）や安藤（1990）によって環境指標種群が設定され、具体的な環境復原が行われている。ここでは、種あるいは属が同定できるものについて珪藻化石（淡水種）と分類し、同定できないものは珪藻化石（？）とした。なお、各胎土中の珪藻化石は、その詳細を記載した。

〔骨針化石〕

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状などを呈する。海綿動物は、多くは海産であるが、淡水産としても日本において23種ほどが知られ、湖や池あるいは川の水底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。

〔植物珪酸体化石〕

植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、大きさは種類によつても異なり、主に約10~50 μm 前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在することが知られている。ファン型や亜鉛型あるいは棒状などがあるが、ここでは大型のファン型と棒状を対象とした。

〔胞子化石〕

胞子状粒子は、珪酸質と思われる直径10~30 μm 程度の小型無色透明の球状粒子である。これらは、水成堆積中で多く見られるが、土壤中にも含まれる。

〔石英・長石類〕

石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち後述する双晶などのように光学的に特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く一括して扱う。なお、石英・長石類（雲母）は、黄色などの細粒雲母類が含まれる石英または長石類である。

〔長石類〕

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（バーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）の斜長石にみられることが多い。バーサイト構造を示すカリ長石はカコウ岩などのSiO₂%の多い深成岩や低温でできた泥質・砂質の変成岩などに産する。ミルメカイトあるいは文象岩は火成岩が固結する過程の晚期に生じると考えられている。これら以外の斜長石は、火成岩、堆積岩、変成岩に普通に産する。

〔雲母類〕

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状には剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。カコウ岩などのSiO₂%の多い火成岩に普遍的に産し、泥質・砂質の変成岩及び堆積岩にも含まれる。なお、雲母類のみが複合した粒子を複合雲母類とした。

〔輝石類〕

主として斜方輝石と単斜輝石がある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的にビールびんのような淡褐色及び淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。SiO₂%が少ない深成岩、SiO₂%が中間あるいは少ない火山岩、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてSiO₂%が中間から少ない火山岩によく見られ、SiO₂%の最も少ない火成岩や変成岩中にも含まれる。

〔角閃石類〕

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のような $\text{SiO}_2\%$ が中間的な深成岩をはじめ火成岩や変成岩などに産する。

[ガラス質]

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄くて湾曲したガラス（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山の噴火により噴出された噴出物と考える。なお、濁ガラスは、非晶質でやや濁りのあるガラスで、火山岩類などにも見られる。

[斑晶質・完晶質]

斑晶質は斑晶（鉱物の結晶）状の部分と石基状のガラス質の部分が明瞭に確認できるもの、完晶質は、ほとんどが結晶からなり石基の部分が見られないか、ごくわずかのものをいう。これらの斑晶質、完晶質の粒子は主として玄武岩、安山岩、デイサイト、流紋岩などの火山岩類を起源とする可能性が高い。

[流紋岩質]

流紋岩質は、顕著な斑晶質を示し基質は著しく細粒である。複合石英類（微細）に類似した構造を示すが、基質部ではガラス質を伴うことから区別される。これらの構造を示す岩石は、流紋岩のほか石英斑岩などであるが、火山岩類の一部と考えられる。

[凝灰岩質]

凝灰岩質は、ガラスや鉱物、火山岩片などの火山碎屑物などから構成され、非晶質でモザイックな文様構造を示す。起源となる火山により鉱物組成は変わる。

[複合鉱物類]

構成する鉱物が石英あるいは長石以外に重鉱物を伴う粒子で、雲母類を伴う粒子は複合鉱物類（含雲母類）、輝石類を伴う粒子を複合鉱物類（含輝石類）、角閃石類を伴う粒子を複合鉱物類（角閃石類）とした。

[複合石英類]

複合石英類は石英の集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒なものから細粒なものまで様々である。ここでは、便宜的に個々の石英粒子の粒径が約0.01mm未満のものを微細、0.01～0.05mmのものを小型、0.05～0.1mmのものを中型、0.1mm以上のものを大型と分類した。また、等粒で小型の長石あるいは石英が複合した粒子は、複合石英類（等粒）として分類した。この複合石英類（等粒）は、ホルンフェルスなどで見られる粒子と考える。

[砂岩質・泥岩質]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、それらの間に基質の部分をもつもので、含まれる粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質とし、約0.06mm未満のものを泥岩質とする。

[不透明・不明]

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明なものや、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明とする。

3 結果

微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度分布や0.1mm前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成あるいは計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、不等号は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。なお、表212の岩石の出現頻度は、◎が特徴的に多い、○が多い、△が少ない、空欄は検出されないことを示す。鉱物は、++が特徴的に多い、++が多い、+が少ないが含まれている、である。

No.1 : 90-600μm、最大粒径1.0mm。石英・長石類)複合石英類(微細)》複合石英類、斜長石(双晶)、斑晶質、ジルコン、雲母類、珪藻化石(淡水種 *Eunotia biareofera*、*Eunotia* 属)、骨針化石、植物珪酸体含む

No.2 : 70μm-1.0mm、最大粒径1.3mm。石英・長石類)複合石英類(微細)》複合石英類、砂岩質、[斑晶質、凝灰岩質]、斜長石(双晶)、雲母類、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

No.3 : 80-600μm、最大粒径1.0mm。石英・長石類)複合石英類(微細)》斑晶質、凝灰岩質、砂岩質、カリ長石(バーサイト)、ジルコン、[複合石英類、ガラス質]、斜長石(双晶)、斜方輝石、雲母類、珪藻化石(淡水種 *Eunotia* 属)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No.4 : 70-400μm、最大粒径1.2mm。石英・長石類)複合石英類(微細)》複合石英類、斑晶質、砂岩質、ジルコン、[凝灰岩質、ガラス質]、斜長石(双晶)、角閃石類、斜方輝石、雲母類、珪藻化石(淡水種 *Eunotia* 属)、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No.5 : 50-250μm、最大粒径400μm。石英・長石類)ガラス質)複合石英類(微細)》角閃石類、斜方輝石、ジルコン、斜長石(双晶)、骨針化石、胞子化石や多い、植物珪酸体化石多い

No.6 : 50-300μm、最大粒径700μm。石英・長石類)複合石英類(微細)》複合石英類、雲母類、ジルコン、斜方輝石、單斜輝石、凝灰岩質、[火山岩類]、植物珪酸体化石含む

No.7 : 70-800μm、最大粒径1.8mm。石英・長石類)複合石英類(微細)》複合石英類、斑晶質、角閃石類、單斜輝石、凝灰岩質、斑晶質、雲母類、骨針化石、植物珪酸体化石含む

No.8 : 70-750μm、最大粒径1.3mm。石英・長石類)ガラス質)複合石英類(微細)》複合石英類、ジルコン、單斜輝石、珪藻化石(湖沼沼沢湿地指標種群 *Melosira ambigua*、淡水種 *Rhopalodaria gibberula*、*Melosira* 属、*Cyclotella* 属、*Cymbella* 属、*Pinnularia* 属、*Diplooneis* 属、不明種多産)、骨針化石、胞子化石多産、植物珪酸体化石少ない

No.9 : 120-700μm、最大粒径800μm。石英・長石類)複合石英類(微細)》複合石英類、凝灰岩質、流紋岩質、ガラス質、斜方輝石、斑晶質、ジルコン、植物珪酸体化石

No.10 : 50-500μm、最大粒径800μm。石英・長石類)複合石英類(微細)》複合石英類、斜長石(双晶)、雲母類、複合石英類、角閃石類、ジルコン、ガラス質、植物珪酸体化石

No.11 : 80-700μm、最大粒径3.5mm。石英・長石類)複合石英類(微細)》複合石英類、斜長石(双晶)、角閃石類、ジルコン、雲母類、ガラス質、單斜輝石、凝灰岩質、胞子化石、植物珪酸体化石
No.12 : 60-400μm、最大粒径700μm。石英・長石類)複合石英類(微細)》複合石英類、雲母類、角閃石類、ガラス質、斜方輝石、胞子化石、流紋岩質、植物珪酸体化石多い

(1) 微化石類による材料粘土の分類

検討した胎土中には、その薄片全面の観察から、珪藻化石や骨針化石などが検出された。これら微

化石類の大きさは、珪藻化石が10~数100 μm （実際観察される珪藻化石は大きいもので150 μm 程度）、骨針化石が10~100 μm 前後である（植物珪酸体化石が10~50 μm 前後）。一方、碎屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9 μm 以下、シルトが約3.9~62.5 μm 、砂が62.5 μm ~2mmである（地学団体研究会・地学事典編集委員会編、1981）。このことから、植物珪酸体化石を除いた微化石類は胎土の材料となる粘土中に含まれるものと考えられ、その粘土の起源を知るのに有効な指標になると見える。なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれているものの、製作場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。検討した胎土は、微化石類により、a) 淡水成粘土を用いた胎土、b) 水成粘土を用いた胎土、c) その他の粘土、に分類された。

次に、分類された粘土の特徴について述べる。

a) 淡水成粘土を用いた胎土（4胎土）

この胎土中には、淡水種珪藻化石の *Pinnularia* 属や *Cymbella* 属などが含まれていた。特に、試料 No.8 の胎土中には、湖沼沼澤湿地指標種群の *Melosira ambigua* や沼澤地など見られる *Cymbella* 属、*Pinnularia* 属が多量の破片とともに含まれていた。

b) 水成粘土を用いた胎土（3胎土）

これらの胎土中には、骨針化石が含まれていた。

c) その他粘土を用いた胎土または粘土（1胎土、4粘土）

これら胎土あるいは粘土塊中には、水成起源を指標する珪藻化石や骨針化石は含まれていなかった。

（2）試料中の砂粒組成による分類

ここで使用した複合鉱物類は、構成する鉱物種や構造的特徴から設定した分類群でだが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。このため、各胎土中の鉱物、岩石粒子の岩石学的特徴は地質学的状況に一義的に対応しない。ここでは比較的大型の砂粒について起源岩石の推定を行った（表212）。

表212 土器胎土・粘土塊中の粘土及び砂粒の特徴

遺物No. 取上No.	粘土の特徴				砂粒の特徴						鉱物の特徴				植物 珪酸 化 石		
	分類	種類	淡水 種 珪藻 化石	不明 種 珪藻 化石	骨針化石	分類	单核苔類	双核苔類	火山苔類	テフラ	輪孔苔類	壳狀苔類	ジルコン	尖晶石類	輝石類	雲母類	
417	-	○	淡水成	△		△	C	◎	△	△	△		*			+	○
423	-	□	水成			△	C	◎	△	△		△	+			+	△
432	-	○	(淡水成)	△		△	Ce	◎	△	△	△	○	+		+	+	△
419	-	○	(淡水成)	△		Cb	○	○	△	△	△		++	+	+	+	△
420	-	□	水成			○	Gc	○		◎			+	+	+		◎
299	-		その他			C	◎	△	△		△		+		+	+	○
295	-	□	水成			△	C	◎	△	△		△	+	+	+	+	△
286	-	○	淡水成	○	◎	Ge	○	△		◎			+		+		◎
-	9143		その他			Cf	○	△	△	△	△	○	+		+		○
-	12848		その他			C	○	△		△		△	+	+		+	○
-	12849		その他			C	○	△		△	△	△	+	+	+	+	○
-	12850		その他			Cg	○	△		○	△	△	+	+	+	+	◎

岩石の推定は、砂岩質あるいは複合石英類（微細）が堆積岩類、複合石英類が深成岩類、ガラス質がテフラ（火山噴出物）、斑晶質が火山岩類、凝灰岩質が凝灰岩類である。推定した起源岩石は、表213の組み合わせに従って分類した。

土器胎土中の砂粒組成は、堆積岩類を主体として火山岩類や凝灰岩類を伴う C 群（4 胎土）、テフラを主体として堆積岩類などを伴う Gc 群（2 胎土）、堆積岩類を主体として凝灰岩類などを伴う Ce 群（1 胎土）、堆積岩類を主体として深成岩類などを伴う Cb 群（1 胎土）であった。

粘土の砂粒組成は、堆積岩類を主体として火山岩類や凝灰岩類を伴う C 群（2 粘土）、堆積岩類を主体としてテフラなどを伴う Cg 群（1 粘土）、堆積岩類を主体として流紋岩類などを伴う Cf 群（1 粘土）であった。

（3）胎土材料

粘土材料は、その種類が淡水成、水成、その他の3種類に分類された。また、砂粒は、C 群、Gc 群、Ce 群、Cb 群、Cf 群、Cg 群の6群に分類された。

遺跡周辺は、木曽川泥流堆積物が厚く堆積する段丘面であり、堆積物は火山岩・凝灰岩・溶結凝灰岩・砂岩・泥岩・チャートからなる大・細礫を含んでいる（吉田・脇田1999）。なお、下流の各務ヶ原市内の砂利採取場を観察すると、流紋岩礫が多く見られた。こうした基盤を構成する堆積物の特徴と比較すると、C 群や Ce 群あるいは Cb 群とした砂粒組成は火山岩類や凝灰岩類を普遍的に含むことから、この地域周辺に分布する堆積物を土器材料として利用した可能性が高い。

一方、試料No.5やNo.8の土器胎土は、火山ガラスからなるテフラを特徴的に多く含む。特に、同様の砂粒組成を示すNo.8の胎土中では、湖沼沼沢湿地指標種群の珪藻化石を多量に含むなど、この地域ではあまり知られていない堆積環境で堆積した堆積物である。

東海地域には、弥生時代後期の赤彩を施したパレススタイル土器が知られているが、これら3分の1程度の土器では、砂粒物として火山ガラスが多量に含まれるが、珪藻化石の特徴から干潟堆積物を利用していることが知られている（藤根1996、車崎ほか1996）。なお、胎土中に含まれる火山ガラスは、粘土採取の際に上下層に分布すると思われるテフラ層を採取したと予想されるが、これら火山ガラスの化学組成を検討するなど、テフラの起源や堆積時代を知るなど、手がかりを得たい。

一方、床面粘土は、砂粒物を含む粘土であるが、粘土は珪藻化石などの微化石類を含まない粘土であった。砂粒組成は、堆積岩類を主体とした組成であるが、テフラを伴う Cg 群や流紋岩類を伴う Cf

表213 胎土中の岩石片の分類と組み合わせ

岩石の分類群		第1出現群						
		A	B	C	D	E	F	G
第2 出現 群	片岩類		Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga
	深成岩類	Ab		Cb	Db	Eb	Fb	Gb
	堆積岩類	Ac	Bc		Dc	Ec	Fc	Gc
	火山岩類	Ad	Bd	Cd		Ed	Fd	Gd
	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De		Fe	Ge
	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef		Gf
	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Ef	Fg	

群も見られた。なお、いずれの粘土も白色砂粒物が見られるが、これらは流紋岩類が風化したものであり、共通した特徴である。木曽川上流域では、濃飛流紋岩が広く分布するため、段丘堆積物中に流紋岩起源の礫が多く含まれている。こうした特長から、これら粘土は木曽川流域に堆積する粘土であることは間違いない。基盤層の検討では、AT テフラを含む粘土層が確認されているが、こうした材料であることも考えられる。

4 考察

ここでは、7号住居跡及び14号住居跡から出土した土器について、その胎土の材料を検討した。その結果、一部の土器を除いて、砂粒組成において堆積岩類のほか、火山岩類や凝灰岩類を普遍的に含むことから、地質学的状況と比較して遺跡周辺域の堆積物の特徴とほぼ一致していることから、在地材料を利用して製作した土器の可能性が高い。

参考文献

- 安藤一男 1990 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理42, 2』
地学団体研究会・地学事典編集委員会編 1981 『増補改訂 地学事典』平凡社
地質調査所 1992 「20万分の1地質図幅「岐阜」」地質調査所
藤根久 1998 「東海地域(伊勢一三河湾周辺)の弥生及び古墳土器の材料」『第6回東海考古学フォーラム岐阜大会、土器・墓が語る』
小杉正人 1988 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究27』
車崎正彦・松本完・藤根久・菱田量・古橋美智子 1996 「(39) 土器胎土の材料—粘土の起源を中心にして」『日本考古学協会第62回大会研究発表要旨』
吉田史郎・脇田浩二 1999 「岐阜地域の地質」『地域地質研究報告(5万分の1図幅)』地質調査所

第6節 堅穴住居跡出土の大型植物化石

1 はじめに

古墳時代前期に属する6号住居跡埋土中から出土した大型植物化石を検討した。分析は新山雅広(バレオ・ラボ)が担当した。

2 試料と方法

大型植物化石の検討は、取上No.7551(SH6/S549①グリッド/2層)の1試料について行った。試料は、タッパーに保存された堆積物試料である。堆積物は、黒褐色シルトであり、堆積物の表面には、小種実が密集しているのが肉眼で確認できた。この堆積物試料を0.25mm目の篩で水洗洗浄し、残渣から実体顕微鏡下で小種実の採集・同定・計数を行った。

3 出土した大型植物化石

検討した結果、小種実は、いずれもアサ種子であった。一見したところ、未炭化のように思われたが、炭化した果皮が張り付いたものがしばしばあった。このことから、元は果皮を被ったままの状態であり、炭化の程度が弱かったためか、中身の種子までは炭化しなかったのであろう。大型植物化石の状態・個数については、表213に示した。完形の状態を保ったものが多いが、中には、1/2程度の破片やそれ以下の小片も多数見られた。また、完形が数個集合して塊状になったものも一部見られた。なお、小片については、採集・計数はしていないが、合計個数(380個前後)の大勢には影響しないと思われる。

表214 出土した大型植物化石の状態 (数字は個数を示す)

分類群	部位	完形	1/2	2~3個塊	5個塊	小片	合計
アサ	種子	341	35	7	1	多数	約380

4 形態記載

アサ *Cannabis sativa* Linn. 種子

種子は未炭化であるが、炭化した果皮がへばり付くものがしばしば見られる。種子は鈍い光沢のある楕円状レンズ形で下端には楕円形の臍がある。

5 考察

アサは、中央アジアからシベリア南部原産と言われる栽培植物であり、日本では古代以降において繊維資源として重要な植物であった。遺跡からの出土例では、古い時期のもので鳥浜貝塚や北海道江別太の縄文時代前期の出土例がある。本遺跡では、古墳時代前期(4世紀前半)に属する6号住居跡の埋土中より出土した。住居跡より種子(果実)が出土したことから、繊維以外の利用が考えられ、食用、採油用、薬用などの目的で住居内に持ち込まれた可能性が考えられる。

参考文献

笠原安夫 1986 「栽培植物の伝播」『季刊考古学15』雄山閣出版

第5章　まとめ

ここではまとめとして、主要遺構を確認した東野II期、IV期、V期の遺構の変遷と配置について考察する。

1 東野II期（縄文時代中期後葉）

（1）遺構と遺物について

東野II期では、竪穴住居跡1軒、柱穴列1条、溝状遺構1条（竪穴住居跡周溝を除く）、集石遺構1基、柱穴26基、土坑283基を確認した。図256中のA、Bは縄文土器が多く出土した場所である。A、Bにおける遺構を見ると、Aは、竪穴住居跡、柱穴列、溝状遺構、墓と考えられる土坑など、縄文時代の遺構を複数確認している。Bは、SI2以外に縄文時代の遺構と断定できる遺構は存在しない。この図から、AはSH1を核にした活動範囲であると考えられる。Bは確実な遺構は存在しないが、縄文土器が多く出土したことから、当該期に人が活動していた場所であると考えられる。AとBの出土土器は、ほぼ同時期のものである。のことから、Aが居住域、Bが石器製作作業場やごみ捨て場の可能性が考えられるが、Bの範囲に石核や剥片が特に多く出土しているわけではないため、石器製作作業場ではなく、ごみ捨て場であった可能性が考えられる。

（2）土器について

出土した土器は、中期後葉のものが主体で、増子康真氏による東海地方の編年の取組式から島崎III

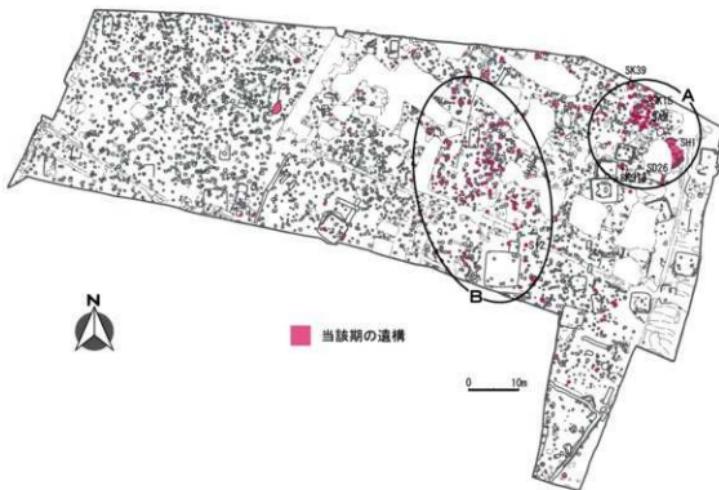


図256 縄文時代主要遺構図 (S= 1/1,000)

式のものが多い（増子1999）。全体で見ると、文様では、口縁部に隆帯で文様を描くA類、口縁部に沈線で文様を描くB類、口縁部文様を持たないD類が多く出土する。器形では、口縁部は直立、外反、やや内彎するものが多く、加曾利E III式に見られるような強く内反するものは見当たらない。このことはSH1出土土器でも同様に言え、形状が復元できるような土器はほぼ床面で出土しており、住居の廃棄時、あるいはその直後に埋まったものであると考えられる。これらのことから、当遺跡SH1出土の繩文土器は、SH1機能時から廃絶時前後に使用された、一括性の高い資料と考えられる。

（3）石器について

当遺跡出土石器の様相について、可児市宮之脇遺跡B地点、各務原市炉畠遺跡と比較する中で考察する。宮之脇遺跡B地点は、当遺跡とは木曽川をはさんで対岸にあり、木曽川と飛騨川の合流地点の南、低位段丘面に立地する。炉畠遺跡は各務原山地の南、各務原台地南の縁辺部に立地する。当遺跡とこれらの遺跡で出土した、石鏸、打製石斧、石錘、磨石・敲石類を抽出して組成を比較する。

図257から、当遺跡の石錘の割合が極めて少ないことが分かる。このことから、漁撈に適した水場が少なかったと考えられる。宮之脇遺跡は、すぐ北東に川があることから、漁撈との関連が深く、石錘が積極的に使用されていたと思われる。炉畠遺跡も多量の石錘が出土しているが、このことについて、近辺の湖沼やそれを源流とする小河川での使用を想定している（各務原市教育委員会1973）。石錘と石鏸の出土割合から、当遺跡は、漁撈よりも狩猟を中心として動物質食料を獲得していたと考えられる。近隣にありながら使用される石器が大きく異なることが判明した。

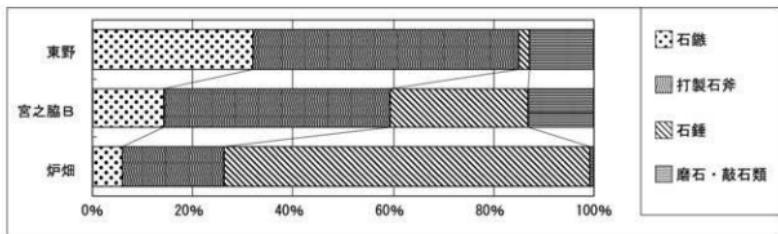


図257 各遺跡における主要石器出土割合

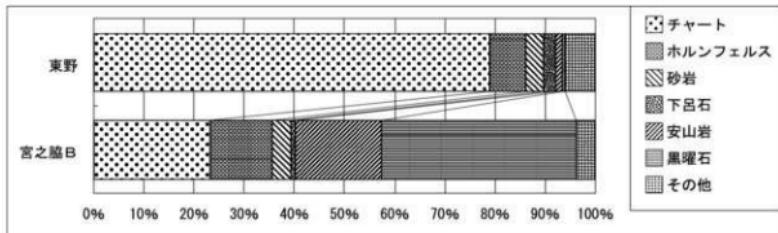


図258 各遺跡における石器石材割合

次に打製石斧と磨石・敲石類の関係について宮之脇遺跡B地点と比較する。中期においては、一般的に打製石斧は根茎類を採集するための土掘り具、磨石・敲石類は堅果類を調理するための食料加工工具として考えられている。図257から、当遺跡や宮之脇遺跡の打製石斧は全体の約半数を占めるのに対し、磨石・敲石類は全体の約1/8程度である。当遺跡と宮之脇遺跡の間に大きな差がないということは、周辺の自然植生や、採集の対象となる食材の量はあまり変わらなかつた可能性が考えられる。長屋幸二氏は「東濃から各務原台地にかけての木曽川流域でも遺跡数が増加し、打製石斧も伴うが、打製石斧が主体となる遺跡と主体とならない遺跡が混在する。」(長屋2003)としているが、前述から、当遺跡は打製石斧が組成の主体となる遺跡といえ、これは、食料の調達には地理的、環境的な面が大きく作用していたといえるであろう。

次に、石材について当遺跡と宮之脇遺跡B地点の、製品、非製品をあわせた石材の量で比較する。図258から、当遺跡がチャートが約80% (709/897点) を占めるのに対し、宮之脇でのチャートは約23% (736/3159点) ということがわかる。また、宮之脇では黒曜石の出土割合が約39% (1221/3159点) を占めるが、当遺跡ではわずか0.6% (5/897点) である。つまり宮之脇遺跡は、何らかの流通ルートにのって、黒曜石や黒曜石製品を多く手に入れていたのに対し、当遺跡は周辺にある石材を利用することが多い傾向にあると考えられる。

土器の様式により中濃地域は大きくくくられる傾向にある。しかし、石器組成や石材割合から見ると、近隣遺跡でありながら大きく異なる。これは、生活様式に違いがあると考えられる。矢野健一氏は、動物質食料、植物質食料ともに遺跡間で補完的に利用する状況の存在を指摘しているが(矢野2004)、当遺跡が地域内でどのようなグループに属し、役割を担っていたかは定かではなく、今後の検討課題である。

注 出土した土器のほとんどが中期後葉であることから、当遺跡出土石器もこの時期のものと考え、出土した石器全てを出土点数、割合に反映している。

2 東野IV期（古墳時代前期）

（1）東野IV期の集落の変遷について

東野IV期の遺物の大半が、廻間III式の終末から松河戸1式前半期に属する。赤塚次郎氏によれば、わずか20~30年間である(赤塚2004)。第3章第6節でも述べたが、東野IV期は造構の重複関係や出土遺物から3時期に分けた。IV a期に属する造構はSH10である。これは、柳ヶ坪型壺やX脚の器台、瓶(有孔鉢)など、廻間III式に比定できる遺物が出土していることを根拠とする。また、炉に川原石が添えられていたという特徴を持つ。IV b期に属する造構はSH2・SH4・SH7・SH9・SH13・SH14・SH21である。例えば、SH7とSB4の新旧関係についてみて考えてみる。SH7の床面で確認した廃棄儀礼として使用された可能性を持つ土坑(SP137)の上面に直口壺295が破片の状態で並べられており、SB4の南東角柱穴SP62から出土した破片と接合した。SP62からの出土位置が、柱を埋める際の埋土中であることから、SH7が廃棄された後、SB4が建てられたと考えられる。他にも、SH7で出土した山陰系口縁甕と同様の甕が出土したSH2や、SB2より遅り小型丸底甕が出土するSH14などがこの時期に属する。IV c期に属する造構は、SH6・SH8・SH11・SH18・SB2・SB4・SB6である。IV b期の造構と重複するか、あるいは時期の遅る土器が出土していないことが根拠となる。

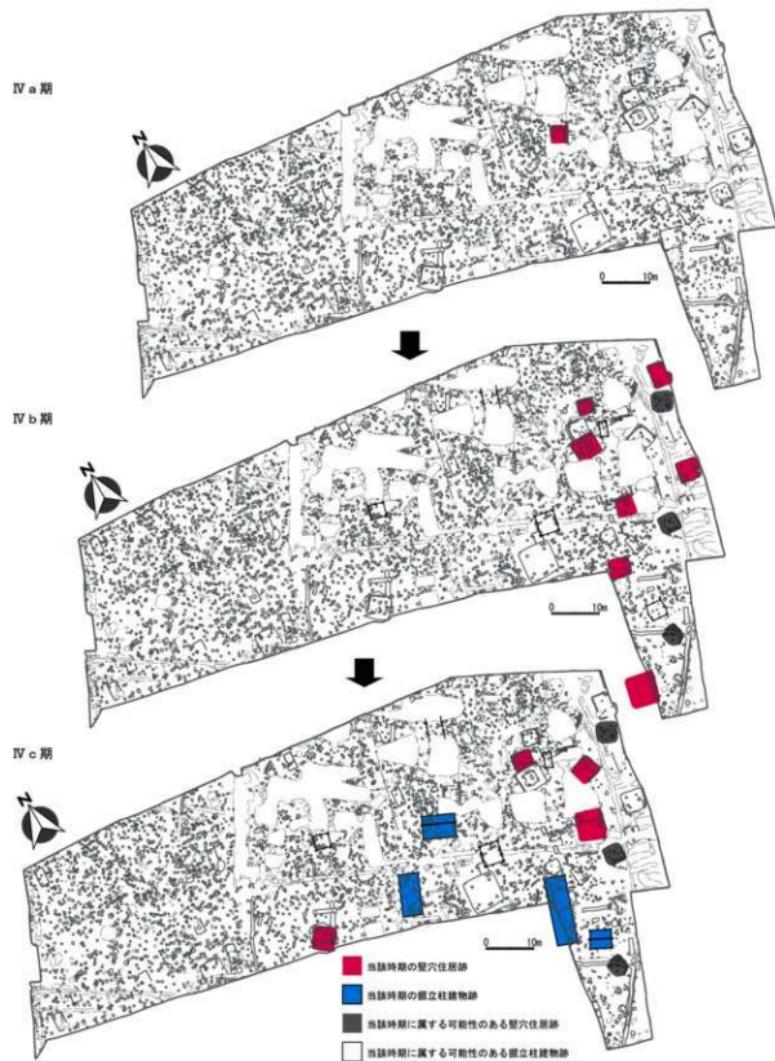


図259 古墳時代前期主要遺構変遷図 (S= 1/1,000)

ただし、IV b 期と IV c 期の遺構間の重複関係のないものについては、より可能性の高い時期に分けている。当遺跡の土器の様相から IV b 期と IV c 期は連続性があると考えられるため、実際は異なる時期に属する、あるいは中間時期に存在した可能性もある。また、時期を細分できなかつた竪穴住居跡や掘立柱建物跡は、明らかに IV a 期の遺物とは異なるため、IV b 期、IV c 期のいずれかに位置付けられると考える。

時期分類した結果を図259にあらわした。IV a 期は竪穴住居 1 軒で、段丘縁辺部からやや西に入るのこと、IV b 期は竪穴住居 7 軒で、段丘の縁辺部の南北に広がること、IV c 期は竪穴住居 4 軒と大型掘立柱建物 3 棟からなり、段丘の縁辺部からやや西に入った場所に大型掘立柱建物群があり、その周間に竪穴住居群があることがわかる。つまり東野 IV 期の当遺跡の集落は、「集落の開始期（IV a 期）→ 集落の拡張期（IV b 期）→ 集落の拠点化期（IV c 期）」と変遷してきたと考えられる。

次に、各時期における集落の形態について考察する。IV b 期の竪穴住居の主軸は、ほぼ一致するものが集まるが、IV c 期の竪穴住居の主軸は多様である（図260）。IV c 期の大型掘立柱建物の主軸は、ほぼ一致する（図261）。これらのことから、IV b 期は竪穴住居の主軸方位をそろえる傾向を持ちながら段丘の縁辺部に南北に展開している。IV c 期は大型掘立柱建物の主軸方位をそろえる傾向を持ちながら、その周間に竪穴住居を展開している。先に述べたが、時期分類不能な竪穴住居跡や掘立柱建物跡が存在するが、総合的に見て、IV b 期の集落が段丘縁辺部を中心として展開し、IV c 期の集落が大型掘立柱建物を中心としてその周間に竪穴住居が展開すると考えられる。

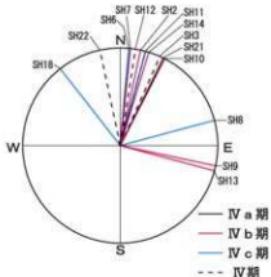


図260 東野IV期（古墳時代前期）の竪穴住居主軸方位分布図

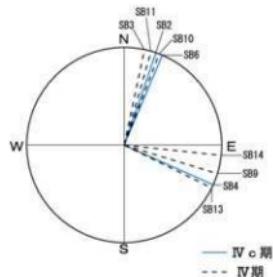


図261 東野IV期（古墳時代前期）の掘立柱建物主軸方位分布図

（2）竪穴住居の形態について

当遺跡で確認した東野 IV 期に属する竪穴住居跡 16 軒のうち、SH6 (IV c 期)・SH13 (IV b 期)・SH14 (IV b 期)・SH18b (IV c 期) の 4 軒は主柱穴が 2 本柱である。2 本柱の竪穴住居は、県内でもほとんど類例がない。近隣の遺跡でも 4 本柱竪穴住居、あるいはそれと想定できるものがほとんどで、2 本柱竪穴住居は確認されていない。

当遺跡の 2 本柱竪穴住居に共通する特徴は、中型から小型の規模であること（図262）、炉が確認できなかつたことが挙げられる。また、SH18b 以外の 2 本柱竪穴住居は焼失住居であったことも挙げられる。出土した遺物も SH6 の鉄鎌や鉄鎌、SH14 の横位にして使用したと思われる土器 3 個体、SH18

の勾玉など、やや特異性がみられる。ただし4本柱竪穴住居ではあるが、2本柱竪穴住居と同規模、あるいはより小規模のものも確認しているため、中・小型が2本柱であるとは限らない。つまり2本柱竪穴住居をつくる理由は大きさではないといえる。

当遺跡の一辺が5m以上の竪穴住居跡は、SH7（IV b期）・SH11（IV c期）・SH21（IV b期）の3軒である。SH21は大部分が調査範囲外のため全容は不明であ

るが、共通する特徴は、北東角部に貯蔵穴を持つこと、床下に建築儀礼に関連すると思われる土坑が2基並ぶこと（SH7、SH11）が挙げられる。IV c期に属するSH6（2本柱竪穴住居）とSH11（大型竪穴住居）には焼失住居という共通点がある。多量の炭化材が出土し、分析の結果、双方ともに建築部材としてクリ材が多用されていたことが判明した。県内の遺跡では、やや大型の住居跡や祭祀的要素のある住居跡などの特徴的な遺構で、クリ材を使う傾向があるといわれている（第4章第3節参照）。建築部材としてのクリ材が出土した遺構には、関市の深橋前遺跡SBA05、SBFO5や、美濃加茂市の尾崎遺跡第24号住居跡、可児市から御嵩町に位置する柿田遺跡のSB17などがある。例えば、深橋前遺跡のSBA05竪穴住居跡（弥生末～古墳初頭）は、同時期の他の5軒が急斜面に立地するのに対し、尾根頂部の平坦面に位置し、水銀朱付着の銅鏡が出土している。また、同遺跡のSBFO5（弥生末～古墳初頭）は筒状銅製品が出土している。尾崎遺跡の第24号住居跡（弥生後期）は床面で完形の土器が複数出土した「祭祀的要素を持つ遺構」とされている。柿田遺跡のSB17（弥生後期～末）は

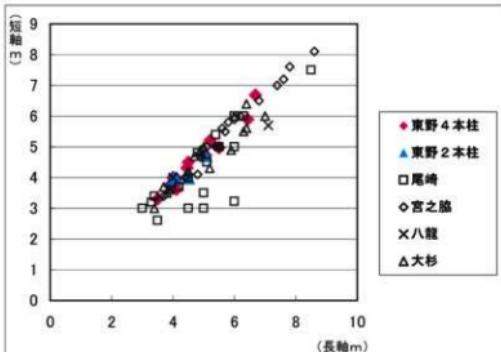


図262 各遺跡の竪穴住居跡大きさ分布図

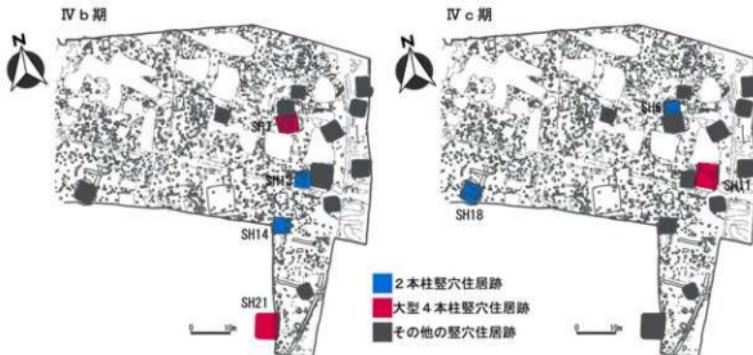


図263 2本柱竪穴住居と大型竪穴住居遺構図 (S = 1/1,250)

一辺が約6.7mのやや大型の住居跡である。時期は異なるが、鉄鎌などが出土したSH6や、当遺跡では大型の住居跡であるSH11など、他遺跡のクリを建築部材にした構造と特徴が似ている。当遺跡の他の住居跡から出土した建築材の多くがクリ材ではないことから、SH6とSH11は何らかの意図をもって、ほぼ同時期につくられたと考えられる。このことから、当遺跡の中では大型堅穴住居と2本柱堅穴住居が共存していた可能性が考えられる。推測ではあるが、図263中のIVc期のSH6とSH11の位置関係から、IVb期においても、大型SH7、21と2本柱SH13、14が共存していた可能性が考えられる。

(3) 大型掘立柱建物について

当遺跡では、東野IV期に属する一辺5mを超える掘立柱建物跡を3棟確認している(図264)。この時期のものとしては、県内では最大級である。古墳時代前期の大型掘立柱建物の事例は少なく、可児郡御嵩町顔戸南遺跡で2棟確認されている。

当遺跡で確認された掘立柱建物跡と顔戸南遺跡で確認された古墳時代に属する掘立柱建物の大きさを比較する(図265)。当遺跡のものがいかに長大であるかがわかる。東海地方で古墳時代前期の大型掘立柱建物跡が確認されている遺跡に静岡県浜松市大平遺跡がある。三方原台地の最南端に位置する点で、当遺跡と立地条件が似ている。この大平遺跡では、一辺が6mを超える大型掘立柱建物を14棟確認しており、さらに堅穴住居と掘立柱建物を囲む柵列や溝も確認している。鈴木敏則氏はこの集落

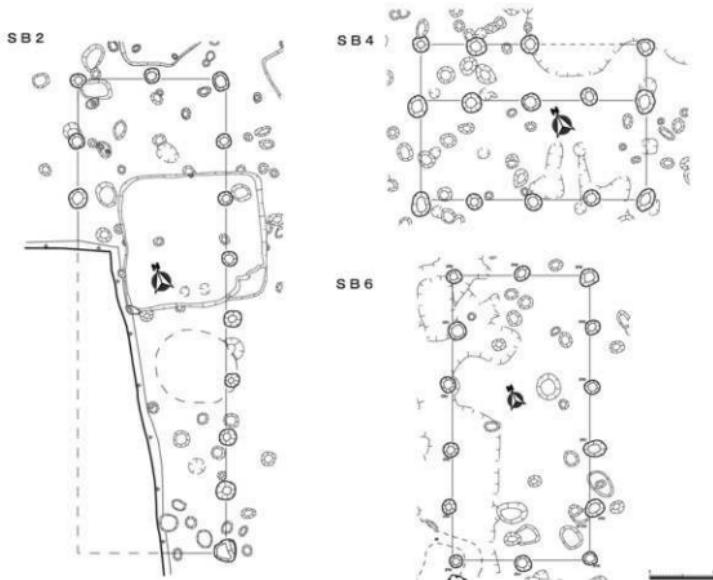


図264 当遺跡の大型掘立柱建物跡 ($S = 1/150$)

の全体を、①開いを持つ建物群で構成される空間②大型竪穴住居と掘立柱建物で構成される空間③掘立柱建物で構成される空間④小型の竪穴住居と掘立柱建物で構成される空間の4つに分けている。その中で、①もしくは②に最有力者が居宅を構えていたとしている（鈴木1990）。当遺跡も、居館集落とはいえないまでも、これだけ長大な掘立柱建物が存在することから一般集落とは考えにくく、周辺地域の中心的な集落であった可能性が高いと思われる。

表215 掘立柱建物跡の規模

	1×1	1×2	1×3	1×4+1	2×2	2×3+1	2×4	2×5	2×6	2×7	2×8
東野遺跡	1	2	2	1				1			1
額戸南遺跡II期						5					
額戸南遺跡IIIa期			1				2				

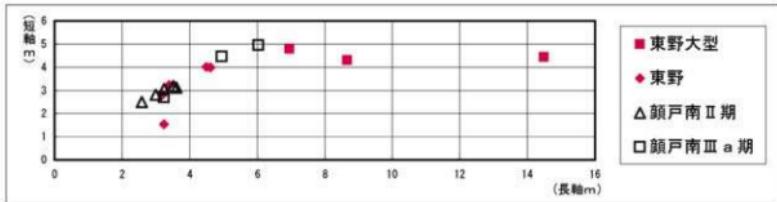


図265 掘立柱建物跡の大きさ分布図

注 図265中の額戸南遺跡の時期は、II期が廻間II式～松戸I式1期並行、IIIa期が松戸I式2期～II式並行で設定している。

(4) 前山古墳との関連性

前項までに、東野IV期は周辺地域の中心的な集落であった可能性を指摘してきた。しかし、IVc期に中心的な集落へと変化しながら、その後集落が廃絶する。次に当遺跡に人が入るのは6世紀後半の古墳時代後期である。このことについて、当遺跡の南約800mにあったといわれる前山古墳との関連性から考えてみたい。

前山古墳は古墳時代前期の古墳である。標高118mの丘陵上に位置するが、墳丘は現状ではほとんど確認できない。しかし、徳田誠志氏によると、古墳が位置するであろう尾根幅が20mないことから、最大でも20m前後の円墳であると推定されている。さらに、主体部は、石室に利用された石材が確認できず、水田面下に良質な粘土が産出することから粘土構造であると推定されている（徳田1993）。古墳は丘陵の北向きの斜面に立地し、北と北東には当遺跡の立地する広大な平坦地が広がる。つまり、当遺跡は前山古墳の北北東に位置することになる。

次に、この古墳から明治年間に4面の鏡が出土しているが、このうちの捩文鏡、変形四獣鏡、珠文鏡各1面について述べる。

(a) 摼文鏡（図266-a）

径11.7cmの鏡である。外区は、素文縁で、その内側に二重の櫛齒文帯が巡る。内区は、外から櫛齒文帯、珠文帯、捩文帯+四乳、二重圓線、珠文帯の順になる。捩文帯は中心に向かい、二重の弧を20組配置し、その間を櫛齒文で充填する。



図266 前山古墳出土鏡略図 (S=約1/2)

(b) 変形四獸鏡 (図266-b)

径9.3cmの鏡である。外区は素文縁で、その内側に鋸歯文帯が巡る。内区は、外から櫛歯文帯、四獸文帯十四乳、圓線の順になる。四獸文帯は、四獸と獸毛文を充填する。

(c) 珠文鏡 (図266-c)

径7.7cmの鏡である。径7.2cmのものも出土しているが、ほぼ同じ文様のためここでは割愛する。外区は、素文縁である。内区は、外から櫛歯文帯、素文帯、珠文帯、二重圓線、珠文帯、二重圓線の順になる。外側の珠文帯は珠文間が狭い。

これら4面の鏡は、森下章司氏の編年(森下2002)から、古墳時代前期後半の振文鏡系、珠文鏡系、四獸鏡系に位置付けることができる。前山古墳の築造時期も、概ね古墳時代前期後半と考えられ、東野IV期と重なる。

以上の立地条件や出土鏡の時期及び築造時期は、前山古墳が当遺跡と関わりの深い可能性を伺わせる。当遺跡が堅穴住居と大型掘立柱建物が共存する比較的規模の大きな集落を営んでいたにもかかわらず、古墳時代前期後半の四半世紀程度の期間しか機能しなかった背景には、当遺跡に拠点を置いた首長の死があったのではないかだろうか。当遺跡周辺の古墳時代前期・中期首長墓系譜は前山古墳を単独としており、当遺跡IV期集落の消長との一致は偶然とは考えがたい。

注 図266は、写真からトレースした略図であり、細部の表現は省略している。

古墳出土鏡の時期は、赤塚氏のご教示による。

3 東野V期（古墳時代後期）

(1) 古墳時代後期の集落の変遷について

東野V期（古墳時代後期）の土器は6世紀末から7世紀中頃まで確認できる。遺構の重複や出土遺物から、V a期は6世紀末から7世紀初頭、V b期は7世紀初頭から前半、V c期は7世紀前半と時期設定した。古墳時代後期の主要遺構の変遷は、図267のとおりである。東野V期になると、IV期が段丘の縁辺部を中心に展開するのに対し、段丘の縁辺部から少し西方へ離れる傾向にある。須恵器や

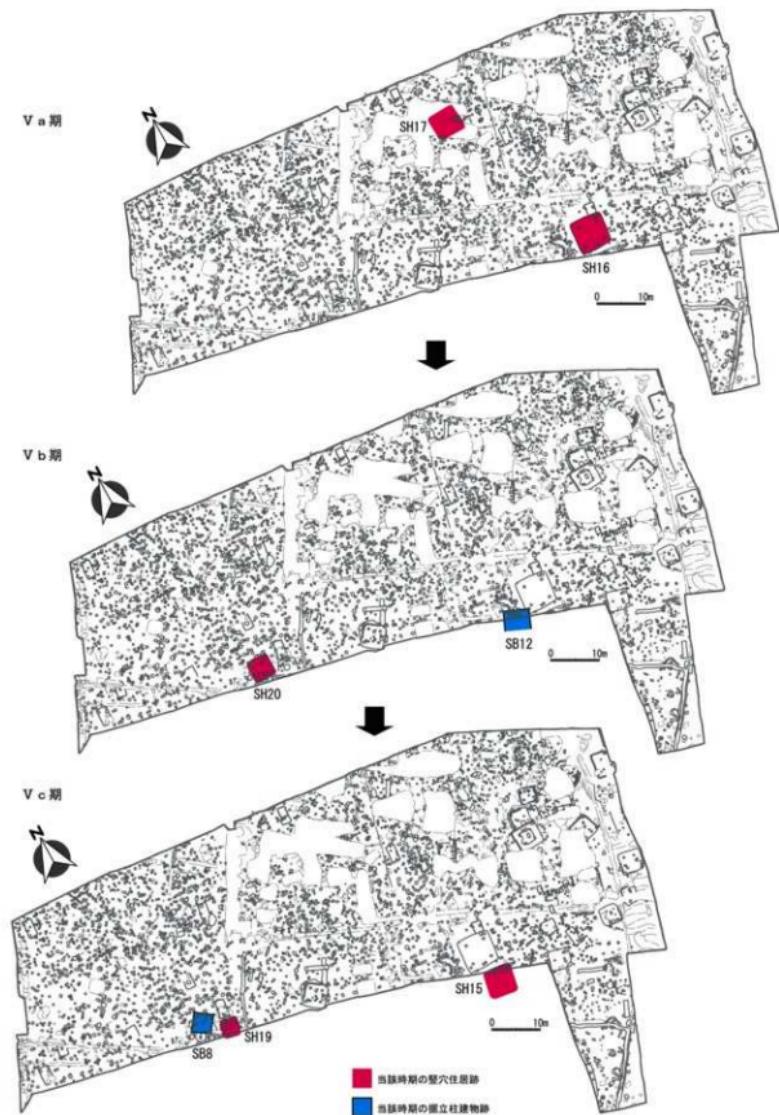


図267 古墳時代後期主要遺構変遷図 (S= 1/1,000)

土師器は、確認した遺構周辺での出土が多く、生活範囲は当遺跡調査地の中央部であったと考える。さらに、当遺跡調査地南側の山林や畠地で須恵器が表探できることから、集落は南に広がる可能性がある。確認した竪穴住居跡の主軸方位は図268のとおり、ほぼ一致する。またSH17を除いて、どの住居跡においても北壁で竪窓を確認した。掘立柱建物跡は2棟確認したが、SB12は北辺を確認したのみであるため、ここでは言及しない。SB8は当遺跡で唯一の総柱建物である。2間×2間の総柱建物は、県内では現在までのところ4遺跡で9棟確認されている。閑門末洞遺跡では総柱建物を4棟確認しており、時期は明確ではないが、遺跡の様相から7世紀後葉に属する豪族居宅の倉庫の可能性を指摘している（伊藤2005）。また、山中聰氏・石毛彩子氏は、2間×2間の総柱建物は豪族居宅の倉庫に最も多く認められる平面形式で、豪族居宅の倉庫全体の約60%を占めること、10~15m²の面積のものが約60%を占めることを指摘している（山中・石毛1998）。SB8も同様の形態・規模であることから、倉庫として機能していた可能性が考えられる。ただし、SB8がどの主屋に属するかは分からぬ。すぐ東にSH19があるが、この住居との関連性は不明である。

（2）古墳時代後期の集落の出現と廃絶について

集落の時期について考える。当遺跡のこの時期の集落は、出土土器から6世紀後半に出現若しくは表216 美濃の古代集落消長表（渡邊2003から引用し、最下段に当遺跡を付け加えた。）

遺跡名	所在地	3世紀		4世紀		5世紀		6世紀		7世紀		8世紀		9世紀		10世紀		
		前	中	前	中	前	中	前	中	前	中	前	中	前	中	前	中	
1 阿曾田遺跡	中津川市	■																
2 久須田遺跡	中津川市		■															
3 大野谷遺跡	恵那市			■														
4 道場遺跡	恵那市				■													
5 理見遺跡	恵那市					■												
6 額戸南遺跡	御嵩町						■											
7 宮之脇遺跡	可児市							■										
8 川合遺跡	可児市								■									
9 野東段遺跡	可児市			■														
10 為同遺跡	美濃加茂市									■								
11 今遺跡	美濃加茂市										■							
12 牧野小山遺跡	美濃加茂市										■							
13 針田遺跡	美濃加茂市											■						
14 野笠遺跡	美濃加茂市											■						
15 佐口遺跡	美濃加茂市											■						
16 尾崎遺跡	美濃加茂市												■					
17 東山浦遺跡	吉田町												■					
18 砂行遺跡	關市												■					
19 椿ノ木洞遺跡	關市													■				
20 重丘遺跡	關市													■				
21 南山遺跡	美濃市														■			
22 前瀬遺跡	各務原市														■			
23 三井遺跡	各務原市														■			
24 長山遺跡	岐阜市														■			
25 城之内遺跡	岐阜市														■			
26 堀田遺跡	岐阜市														■			
27 下西跡一本松遺跡	岐阜市														■			
時定期別集落遺跡数		5	8	9	6	6	8	7	7	10	8	6	13	11	4	16	12	10
車野遺跡															2	4	2	2

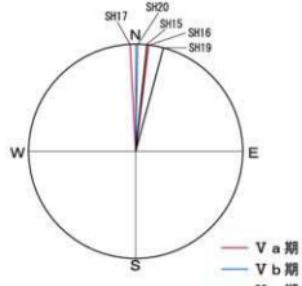


図268 東野V期（古墳時代後期）の
竪穴住主軸方位分布図

■ 住居跡が存在 ■ 土器が存在

再開し、7世紀前半からおそらくとも中頃には移動若しくは廃絶した可能性が考えられる。表215から、周辺の遺跡で6世紀後半から7世紀前半の集落を確認している遺跡は、可児市宮之脇遺跡、美濃加茂市今遺跡、牧野小山遺跡、針田遺跡、野坂遺跡、佐口遺跡、尾崎遺跡、富加町東山浦遺跡などがある。その中で、当遺跡と同様に6世紀後半に出現若しくは再開し、7世紀前半からおそらくとも中頃には移動若しくは廃絶した可能性をもつ遺跡は、今遺跡、針田遺跡、野坂遺跡となる。これら以外の遺跡は、少なくとも2世紀以上に渡って集落としての機能を存続させており、短期間の集落は、この時期に出現・再開し、移動・廃絶している。渡邊博人氏は県内の27遺跡を取り上げ、「6世紀後葉に出現・再開を主とするのに対し、7世紀前葉は移動・廃絶を主としている」遺跡が多く、「出現・再開(61.5%)と移動・廃絶(63.6%)の割合がほぼ同じとなっている」ことに着目している(渡邊2003)。さらに、「このような傾向は、それぞれの地域が置かれた地理的条件に関わるとも考えられるが、その背景には地域の政治的・社会の変化の重要な要素として関わっていると考えられる」としている。当遺跡もこれに当てはまる集落で、地理的要因だけでなく、何らかの政治的・社会的要因によって出現・再開し、移動・廃絶した可能性が考えられる。

おわりに

当遺跡では3840基の遺構を検出したが、時期や性格が判明したものは少なく、多数の土坑が時期、性格が不明のままである。これらの土坑を形状や埋土状況などで分類し、分布状況を確認したが、特筆すべき事項は認められなかった。今後はこれら土坑の位置づけが課題である。

最後に、調査の結果として得られた考古学的成果と、当遺跡の評価を箇条書きにし、本書のまとめとする。

- ・最も大きな成果は、古墳時代前期の堅穴住居跡と大型掘立柱建物とがある、規模の大きな集落であったことが明らかになった点である。現状では、当該期の周辺遺跡では、大型掘立柱建物跡は認められず、この地域の中心的な集落であった可能性が高いと考えられる。
- ・縄文時代中期後葉の堅穴住居跡から出土した土器は、出土状況から時期的にまとまりのある資料であることが判明した。
- ・古墳時代後期は、6世紀後半から7世紀前半の集落を確認したことで、周辺地域と比較的同じ時期に集落が展開していたと考えられる。

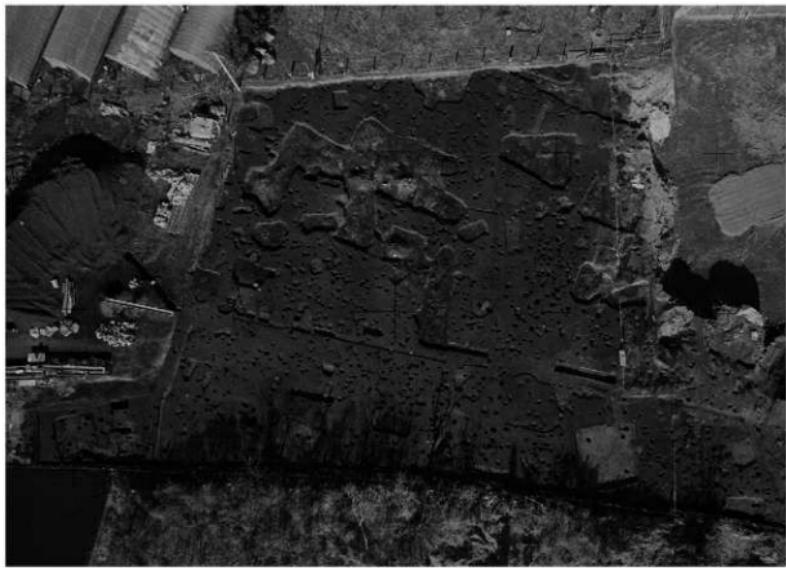
参考・引用文献

- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1990 『廻間遺跡』
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1994 『松河戸遺跡』
- 赤塚次郎 1986 「『S字甕』について」『欠山式土器とその前後』愛知考古学講話会
- 赤塚次郎 1996 「濃尾平野低地部における古墳時代の甕」『鍋と甕 そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム
- 赤塚次郎 2002 「土器様式の偏差と古墳文化」『考古資料大観2』小学校
- 赤塚次郎 2004 「中部・近畿の弥生・古墳時代の編年の現状と課題」考古学シンポジウム
- 石川県埋蔵文化財センター 1986 『漆町遺跡I』
- 石川県埋蔵文化財センター 1988 『漆町遺跡II』
- 石黒立人 1996 「尾張・三河・美濃」『第4回東海考古学フォーラム 鍋と甕 そのデザイン』
- 石黒立人 2002 「中部地方の土器」『考古資料大観1』小学校
- 泉拓良 1988 「咲焼・醍醐式土器様式」『縄文土器大観3 中期II』小学校
- 伊藤聰 2004 「集落遺跡における掘立柱建物についての覚書(2)」『美濃の考古学 7号』美濃の考古学刊行会
- 伊藤聰 2005 「集落遺跡における掘立柱建物についての覚書(3)」『美濃の考古学 8号』美濃の考古学刊行会
- 内堀信雄・井川洋子 1996 「美濃における古代土器師煮炊具の様相」『鍋と甕 そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム
- 内堀信雄 1998 「S字甕～宇田甕の変化傾向」『土器・墓が語る』第6回東海考古学フォーラム
- 宇野隆夫 1992 「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集 国立歴史民俗博物館
- 各務原市教育委員会 1973 『炉煙遺跡発掘報告書』
- 各務原市教育委員会 1984 『美濃須古窯跡群資料調査報告書』
- 各務原市教育委員会 1991 『八龍遺跡A 地点』
- 各務原市教育委員会 1993 『八龍遺跡B 地点』
- 春日井恒・長谷川幸志 2003 「岐阜県美濃地方における繩文時代建物遺構の変遷」『関西繩文時代の集落・墓地と生業』関西繩文論集1』関西繩文文化研究会編 六一書房
- 加納介介 1998 「S字甕の波及と定着」『静岡の考古学』静岡の考古学編集委員会
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2003 『尾元遺跡』
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2005 『柿田遺跡』
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2005 『重竹・上西田遺跡』
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2006 『大杉西遺跡』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター 1993 『尾崎遺跡』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター 1997 『堀田城之内遺跡』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター 1998 『今宿遺跡』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター 1998 『牧野小山遺跡C 地点』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター 2000 『顔戸南遺跡』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター 2000 『野並遺跡I』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター 2003 『深橋前遺跡』
- 岐阜市教育委員会 1962 『岐阜市長良龍門寺古墳』
- 桐生直彦 1996 「遺物出土状態からみた堅穴住居の廃絶」『住まいの考古学－住居の廃絶を巡って』山梨県考古学協会

- 宮内庁書陵部陵墓課 2005 『古鏡集成』学生社
- 齊藤孝正 1995 「I 東海西部」『須恵器集成図録 第3巻東日本編I』雄山閣出版
- 坂祝町教育委員会 1988 『芦戸遺跡——級河川曾川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』
- 坂祝町史編纂委員会 2002 『坂祝町史 自然編』
- 坂祝町史編纂委員会 2004 『坂祝町史 資料編』
- 坂祝町史編纂委員会 2005 『坂祝町史 通史編』
- 柴田稔 1991 「東海の豪族居館」『季刊考古学 第36号』雄山閣出版
- 島田崇正 2004 「中濃東部における6・7世紀の土器類差拂具の様相と地域社会の変化」『美濃の考古学 7号』
美濃の考古学刊行会
- 鈴木敏則 1990 「静岡県大平遺跡」『季刊考古学 第32号』雄山閣出版
- 鈴木敏則 2003 「東海・関東における大型建物・方形区画の出現と展開」『日本考古学会2003年滋賀大会資料集』
- 関市教育委員会 2004 「大杉遺跡第13次調査現地説明会資料」
- 高木洋 1998 「濃尾出土のS字彫形態モデルの作成（1）」「土器・墓が語る」第6回東海考古学フォーラム
- 高木洋 1999 「濃尾出土のS字彫形態モデルの作成（2）」『美濃の考古学』美濃の考古学刊行会
- 徳田誠志 1992 「古墳時代前期末の二古墳—岐阜県行基寺・前山古墳をめぐって—」『評議 関西大学博物館課程創設三十周年特集』
- 中井正幸 2001 「前期古墳から中期古墳へ」『美濃・飛騨の古墳とその社会』同成社
- 長屋幸二 2003 「東海・関西地域における打製石斧の選択」『第5回関西縄文文化研究会 縄文時代の石器II』
関西縄文文化研究会
- 西村勝弘 2005 「編年案」『東海石器研究 第3号』
- 野澤則幸 1986 「名古屋市見晴台遺跡にみる馬蹄形遺構に関する観察」『考古学の広場 第3号』考古学フォーラム
- 早野浩二 2002 「東海・中部地方の土器」『考古資料大観3』小学館
- 原田幹 1998 「東海出土の北陸系土器」『考古学フォーラム10』
- 原田幹 2002 「中部地方の土器」『考古資料大観2』小学館
- 美濃加茂市教育委員会 1973 「牧野小山遺跡—県道七宗可児線道路工事埋蔵文化財調査報告書』
- 美濃加茂市教育委員会 1976 「岐阜県美濃加茂市南野遺跡発掘調査報告』
- 美濃加茂市教育委員会 2002 「尾崎遺跡発掘調査報告書』
- 竹岡俊樹 1989 『石器研究法』言叢社
- 増子康真 1978 「縄文中期後半土器の福井—東海地方西部地域—」『古代人 第34号』名古屋考古学会
- 増子康真 1999 「東海地方 中期後半」『縄文時代 第10号』縄文時代文化研究会
- 宮本長二郎 1991 「弥生・古墳時代の掘立柱建物跡」「弥生時代の掘立柱建物跡」埋蔵文化財研究所
- 宮本長二郎 1996 『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版
- 森下章司 2002 「古墳時代倭鏡」『考古資料大観5』小学館
- 矢野健一 2004 「磨石類の数量的検討」『第6回関西縄文文化研究会 縄文時代の石器III』関西縄文文化研究会
- 山中敏史・石毛彩子 1998 「地方豪族の居宅と穀倉」「古代の穀倉と村落・郷里の支配」奈良国立文化財研究所
- 渡邊博人 2003 「美濃の集落」『美濃戸籍の総合的研究』東京堂出版



A区東全景（上が北）



A区西全景（上が北）

図版2 調査区全景（2）



B区全景（上が北）



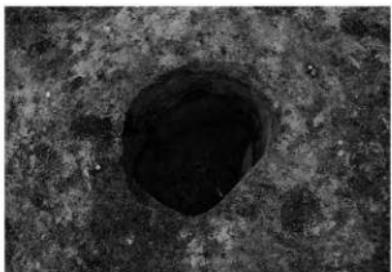
C区全景（右が北）



SH 1 (南から)



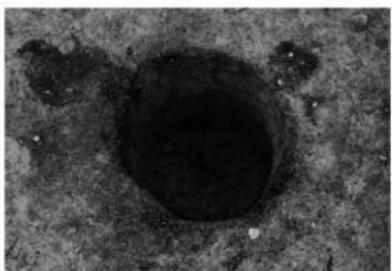
SP25土層断面 (南西から)



SP23 (南から)



SP22土層断面 (南から)



SP21 (南から)

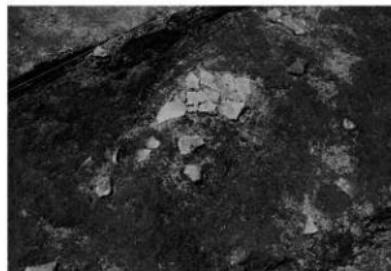
図版4 縄文時代の遺構（2）



SH 1 北東区遺物出土状況（北から）



SH 1 南西区遺物出土状況（南西から）



SH 1 南東区遺物出土状況（東から）



用途不明土製品出土状況（南から）



SZ 1 埋甕出土状況①（西から）



SZ 1 埋甕出土状況②（東から）



SZ 1 埋甕出土状況③（東から）



SZ 1 （東から）



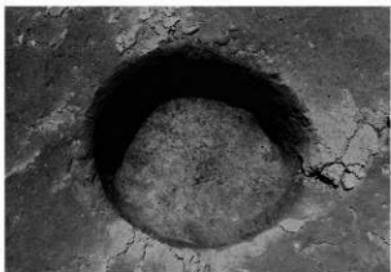
SK12（東から）



SK15遺物出土状況（南から）



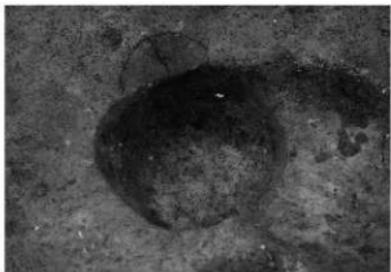
SK34遺物出土状況（南から）



SK34（南から）



SK65遺物出土状況（南西から）



SK65（南から）



SK313遺物出土状況（南東から）



SK313（北から）

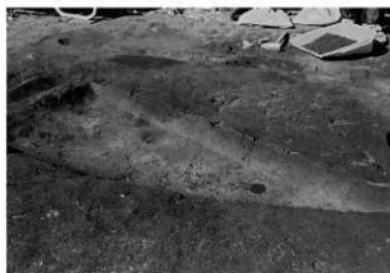
図版6 縄文時代の遺構（4）



SK933遺物出土状況（北から）



SK933（北から）



SK935土層断面（北東から）



SK935（東から）



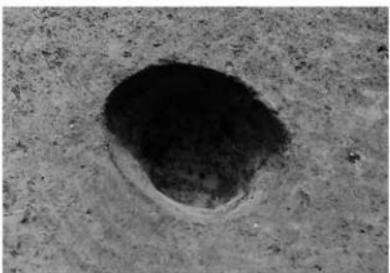
SK952棟出面遺物出土状況（北から）



SK952遺物出土状況（北から）



SK978遺物出土状況（南から）



SK978（北から）



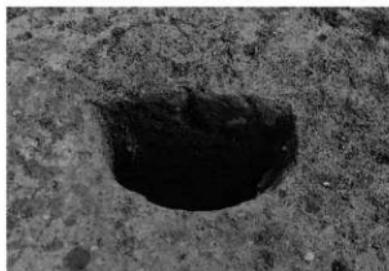
SH2（西から）



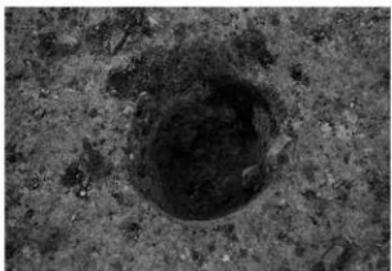
SH2検出状況（南西から）



SH2東西土層断面（北から）



SP37土層断面（南から）



SP36（東から）

図版8 古墳時代前期の遺構（2）



SH 2 遺物出土状況（南から）



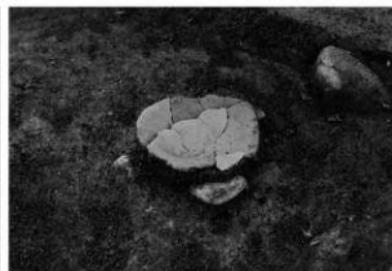
SH 2 東西壁付近遺物出土状況（北から）



重なって出土した高壺の上側（南東から）



SH 2 南西角付近遺物出土状況（西から）



重なって出土した高壺の下側（南東から）



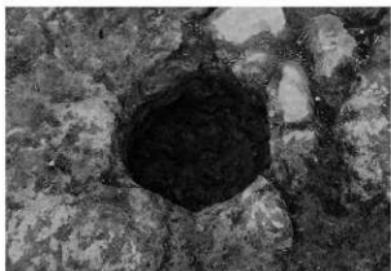
SH 3 〈南から〉



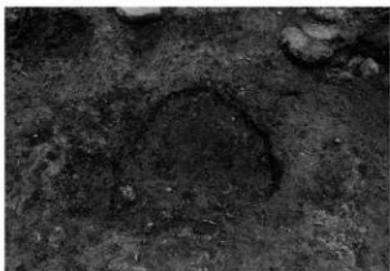
SP32土層断面 〈南から〉



SF 1 土層断面 〈南から〉



SP32 〈南から〉



SF 1 〈西から〉

図版10 古墳時代前期の遺構（4）



SH 4（南から）



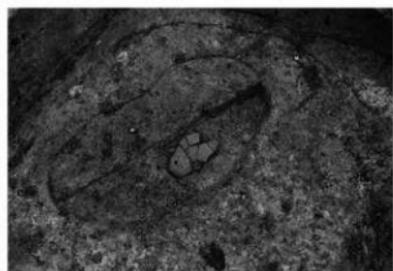
SH 4床面検出状況（南東から）



SF 2（東から）



ミニチュア壺出土状況（西から）



SP118遺物出土状況（南から）



SH5 (東から)



SH5 土層断面 (南東から)

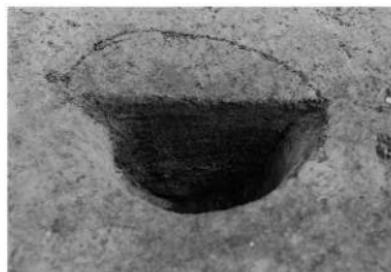


SP35 土層断面 (東から)

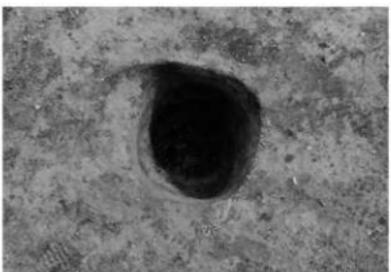


SH6 (東から)

図版12 古墳時代前期の遺構（6）



SP204土層断面（南から）



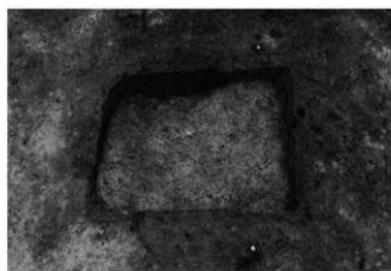
SP205（北から）



SP206遺物出土状況（西から）



鉄鎌出土状況（西から）



SP206炭化材内部完掘状況（北から）



植物化石出土状況（東から）



SP206掘形完掘状況（北から）



SH6 南東区焼土出土状況（西から）



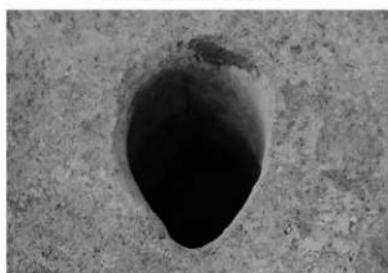
SH 7 (東から)



SP133土層断面 (西から)



SF 4 土層断面 (西から)



SP131 (南から)



SF 4 (南から)

図版14 古墳時代前期の遺構（8）



SD 7・8（西から）



SP139（南から）



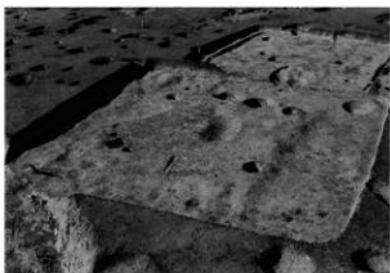
SP137遺物出土状況（北から）



SP141・142（南から）



SH 7 床下遺構土層断面（南から）



SH 7 床下遺構（南東から）



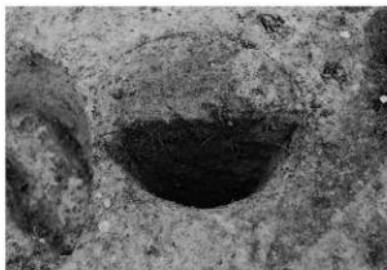
SH 7 遺物出土状況（南から）



管玉出土状況（北から）



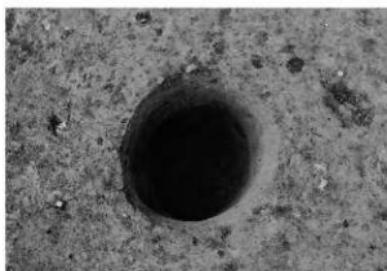
SH 8 (西から)



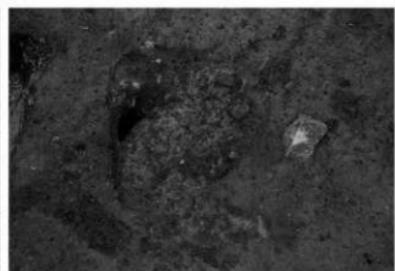
SP125土層断面 (南から)



SF 3 接出状況 (南から)



SP124 (北から)



SF 3 (南から)

図版16 古墳時代前期の遺構（10）



SH 8 北東区遺物出土状況①（北から）



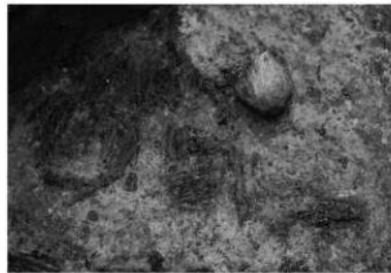
SH 8 北東区遺物出土状況②（南西から）



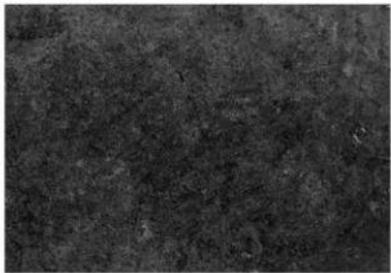
SH 8 南東区遺物出土状況①（南から）



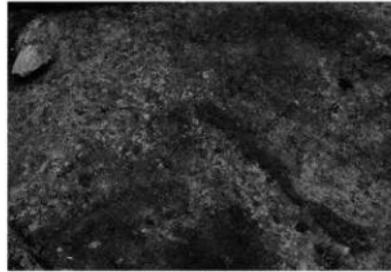
SH 8 南東区遺物出土状況②（北から）



塊状炭化材出土状況①（南から）



塊状炭化材出土状況②（南から）



炭化材出土状況（南から）



床面出土焼土及び炭化材出土状況（南から）



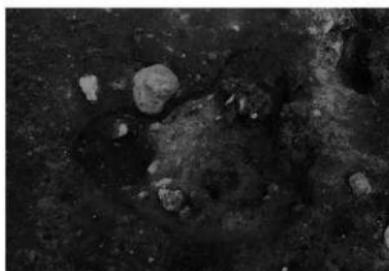
SH9（西から）



SP143土層断面（南から）



SP145（南から）



SF5（南から）



SH9遺物出土状況（南西から）

図版18 古墳時代前期の遺構（12）



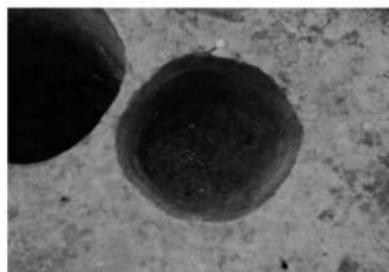
SH10（南から）



SP212土層断面（南から）



SF 7（北から）



SP212（北から）



SH10遺物出土状況（北西から）



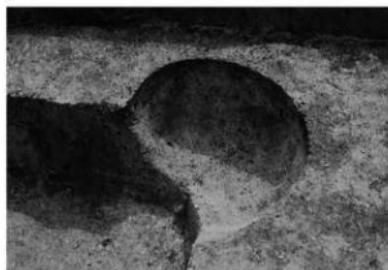
SH11 (南から)



SP162 (北西から)



SP157 (北から)

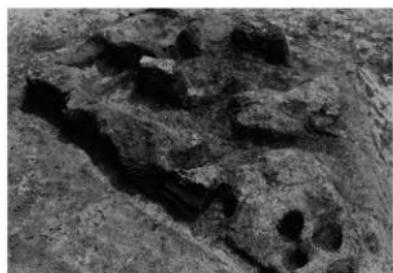


SP158 (西から)



SP159遺物出土状況 (南から)

図版20 古墳時代前期の遺構（14）



SH11北西区遺物出土状況①（西から）



SH11北西区遺物出土状況②（西から）



SH11北東区遺物出土状況①（西から）



SH11北東区遺物出土状況②（南東から）



SH11中央区遺物出土状況①（南東から）



SH11中央区遺物出土状況②（東から）



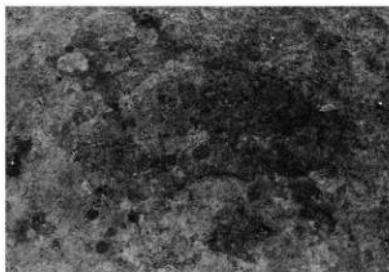
SH11南中央区遺物出土状況（南東から）



SH11南西区遺物出土状況（南から）



SH12（西から）



SF 6 検出状況（西から）



SP178検出状況（南東から）



SP175土層断面（南から）



SP178（南から）

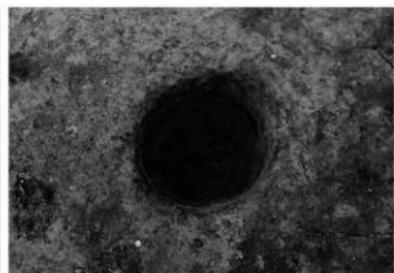
図版22 古墳時代前期の遺構（16）



SH13（西から）



SP192土層断面（南から）



SP193（南から）



SH13高环出土状況（南から）



SH13焼土及び炭化材出土状況（東から）



SH14南区（北から）



SH14北区（北から）

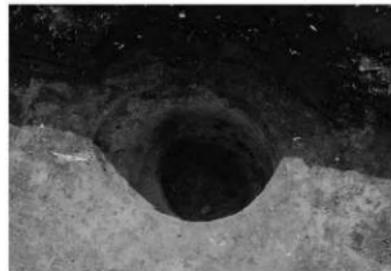
図版24 古墳時代前期の遺構（18）



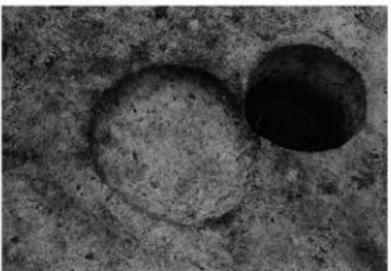
SP252土層断面（北から）



SP253検出状況（東から）



SP337（北から）



SP253（北から）



SH14北区遺物出土状況（北東から）



SH14南西区遺物出土状況（北から）



SH14焼土及び炭化材出土状況（東から）



SH14南東区遺物出土状況（北から）



SH18<SH18B>（東から）

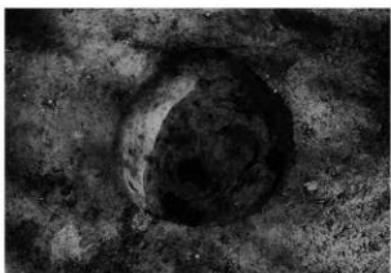


SH18貼床除去後<SH18A>（東から）

図版26 古墳時代前期の遺構（20）



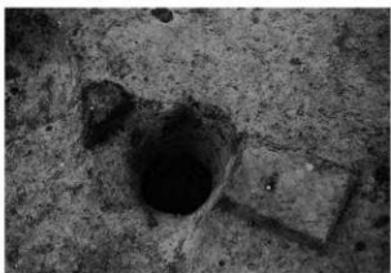
SP284土層断面（西から）



SP284（南から）



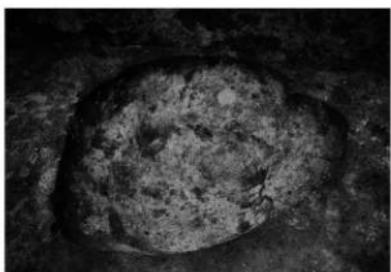
SP292土層断面（南から）



SP292（南東から）



SP287（東から）



SP288（西から）



SH18南東区勾玉出土状況（北から）



SH18北西区高坏出土状況（西から）



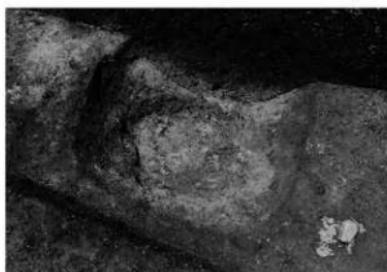
SH21 (北東から)



SP342及びSM 2・3検出状況 (東から)



SM 2 土層断面 (東から)



SP342 (北東から)

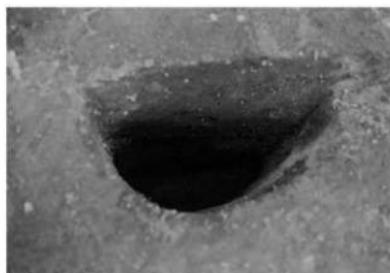


SH21北区遺物出土状況 (東から)

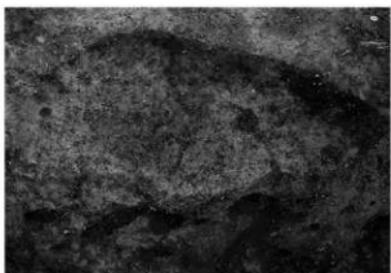
図版28 古墳時代前期の遺構（22）



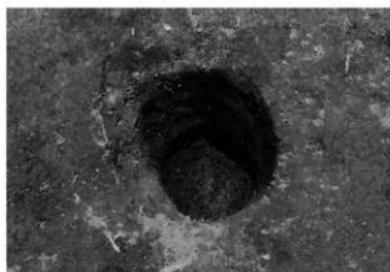
SH21（北から）



SP347土層断面（西から）



SF13（北東から）



SP347（北から）



SF13燃焼部土層断面（北東から）

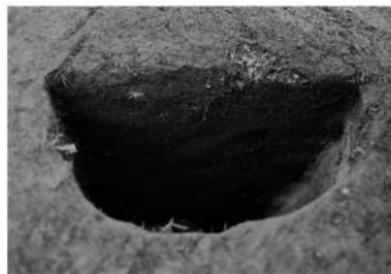


SB 2 南部（北から）



SB 2 北部（北から）

図版30 古墳時代前期の遺構（24）



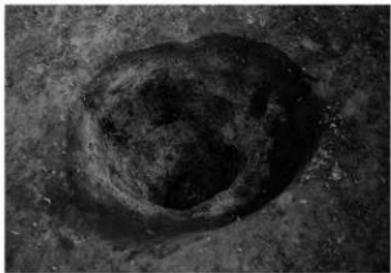
SP46土層断面（北から）



SP314土層断面（南から）



SP46（北から）



SP316（北から）



SB 3（北から）



SB 4 (西から)



SB 6 及び SA 7 (北から)

図版32 古墳時代前期の遺構（26）



SB9（西から）



SB10（南から）



SB11 (北から)



SB13・14 (北から)

図版34 古墳時代前期の遺構（28）



SA 1 (南から)



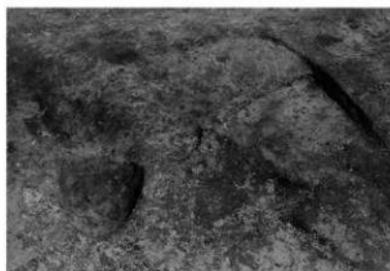
SA 3 (西から)



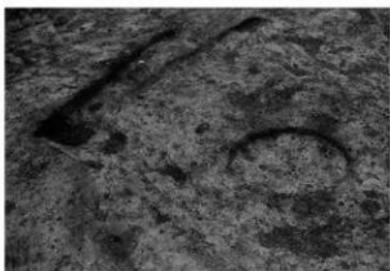
SK174 (南から)



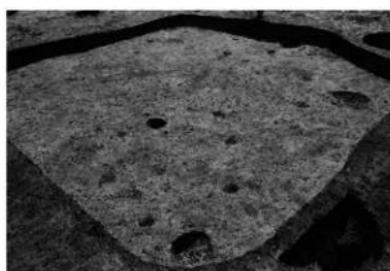
SK199 (南西から)



SK461 (南から)



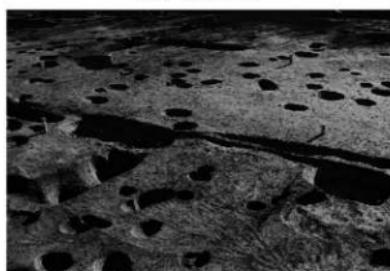
SK530 (南東から)



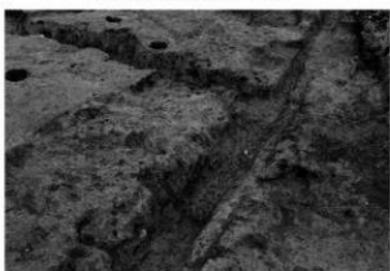
SK557 (南西から)



SK557とその周辺 (北から)



SK1405 (北から)



SK2175 (南から)

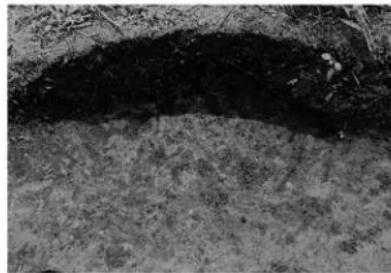
図版36 古墳時代前期の遺構（30）



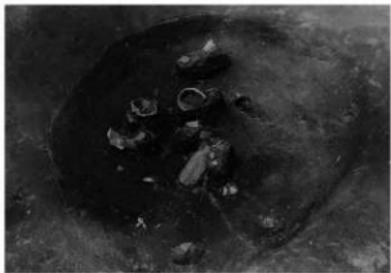
SI 1 遺物出土状況①（西から）



SI 1 遺物出土状況②（西から）



SI 1（南西から）



SK51遺物出土状況（南東から）



SK356遺物出土状況（南から）



SK440遺物出土状況（南から）



SK448（南から）



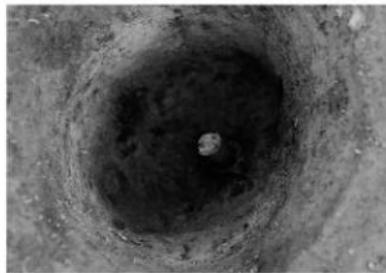
SK556（西から）



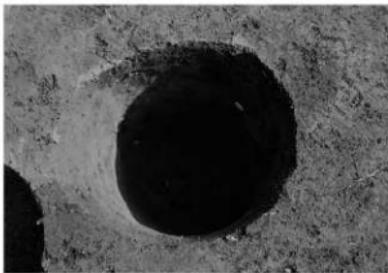
SK692遺物出土状況① (東から)



SK692遺物出土状況④ (東から)



SK692遺物出土状況③ (東から)



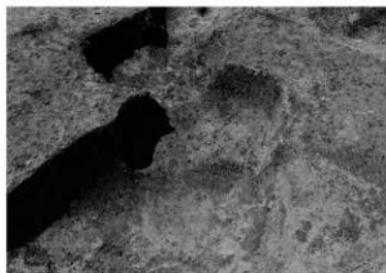
SK692 (南から)



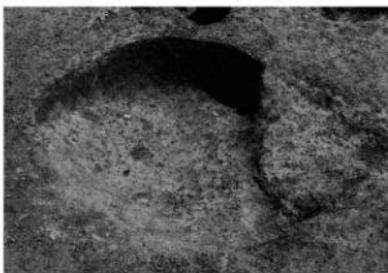
SK2059・2060・2061 (西から)



SK2059 (北から)



SK2060 (北から)

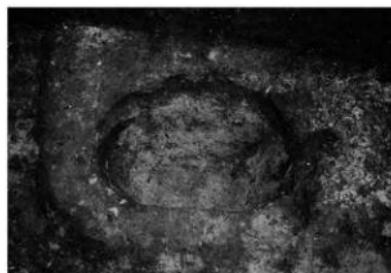


SK2061 (北から)

図版38 古墳時代後期の遺構（1）



SH15（北東から）



SP221（北から）



SF 8（東から）



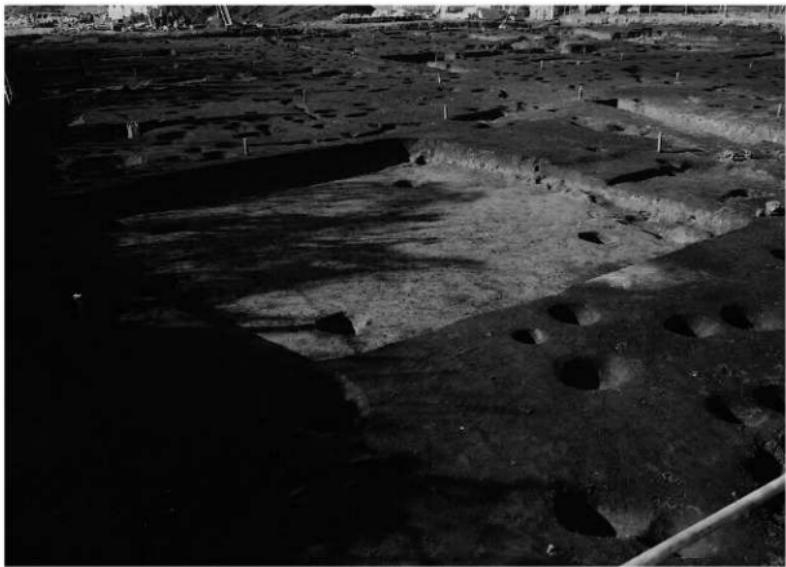
SF 8 燃焼部遺物出土状況（北から）



SF 8 下土坑群（北から）



SH16（南東から）



SH16貼床除去後（南東から）

図版40 古墳時代後期の遺構（3）



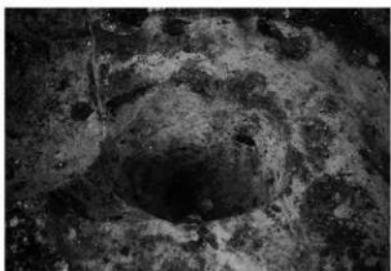
SF10（南東から）



SF10燃焼部遺物出土状況（南東から）



SP258検出状況（南東から）



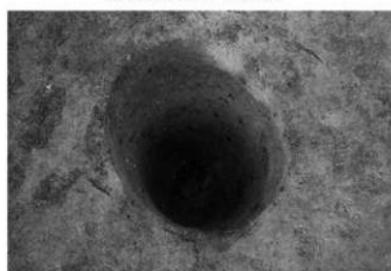
SP262（南から）



SP258土層断面（南から）



SH16床下整地層断面（西から）



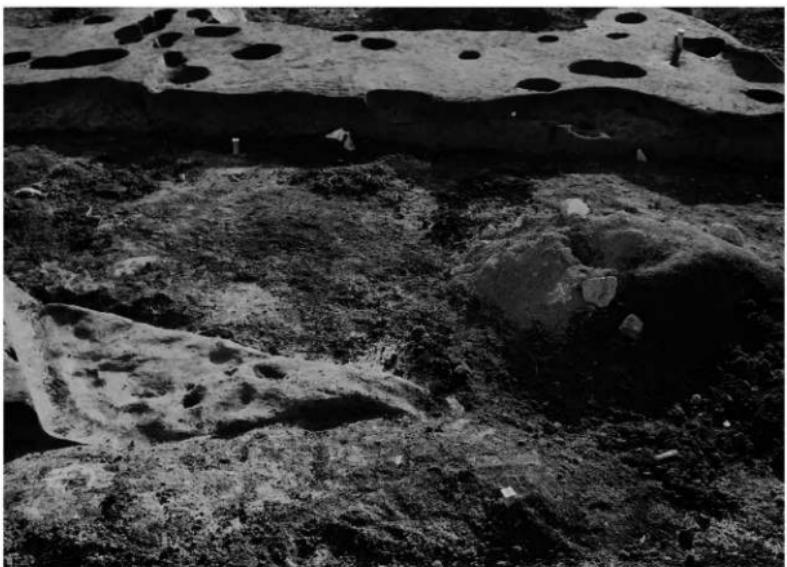
SP258（南から）



SH16高壇出土状況（西から）



SH17（南西から）



SH17貼床除去後（北から）

図版42 古墳時代後期の遺構（5）



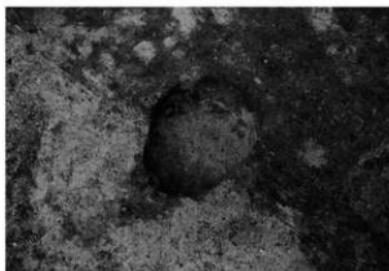
SH19（北から）



SP298土層断面（南から）



SF11（南から）



SP297（南から）



SP302（南西から）



SH20（南東から）



SP308土層断面（南から）



SF12検出状況（南西から）



SP311及びSM 1（北から）



SF12燃焼部遺物出土状況（西から）

図版44 古墳時代後期の遺構（7）



SB8 (北東から)



SB12西部 (西から)



SK79（南西から）



SK79土層断面（北西から）



SK79遺物出土状況（北西から）



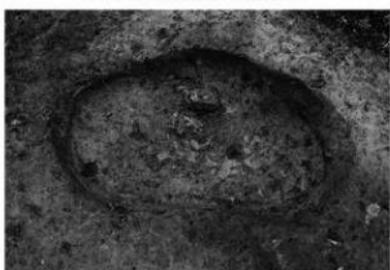
SZ2 土層断面（南西から）



SZ2 遺物出土状況①（南西から）



SZ2 遺物出土状況②（南西から）

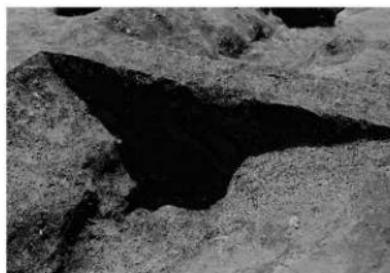


SZ2（南西から）

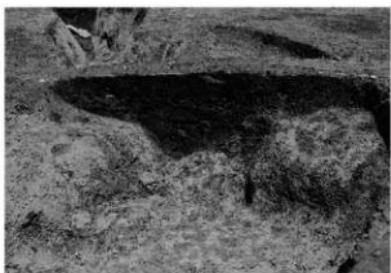
図版46 古代の遺構（1）



SD31（北東から）



SD31CD 土層断面（北から）



SD31GH 土層断面（南東から）



SD31MN 土層断面（南東から）



SD31遺物出土状況（北東から）



SB 5 (北から)



SB 7 (北西から)

図版48 時期不明の遺構（2）



SA5（西から）



SA8（南から）



SK849 土層断面 (北東から)



SK849 (南から)



SK1718・1737とその周辺 (北から)



SK1718土層 (南西から)



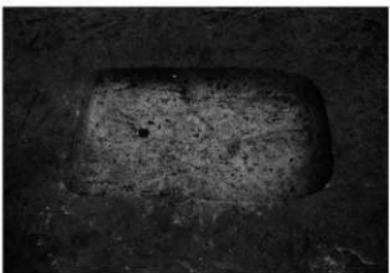
SK1737 (南西から)



SK1718 (西から)

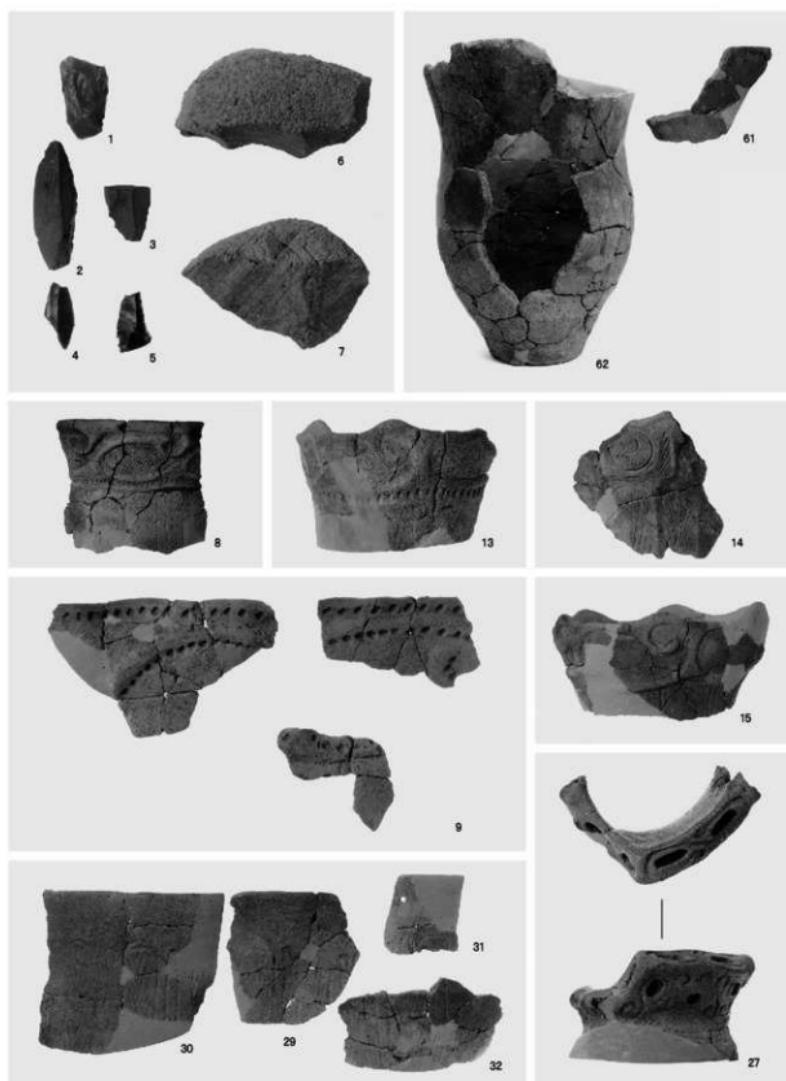


SK3315南西区土層断面 (西から)

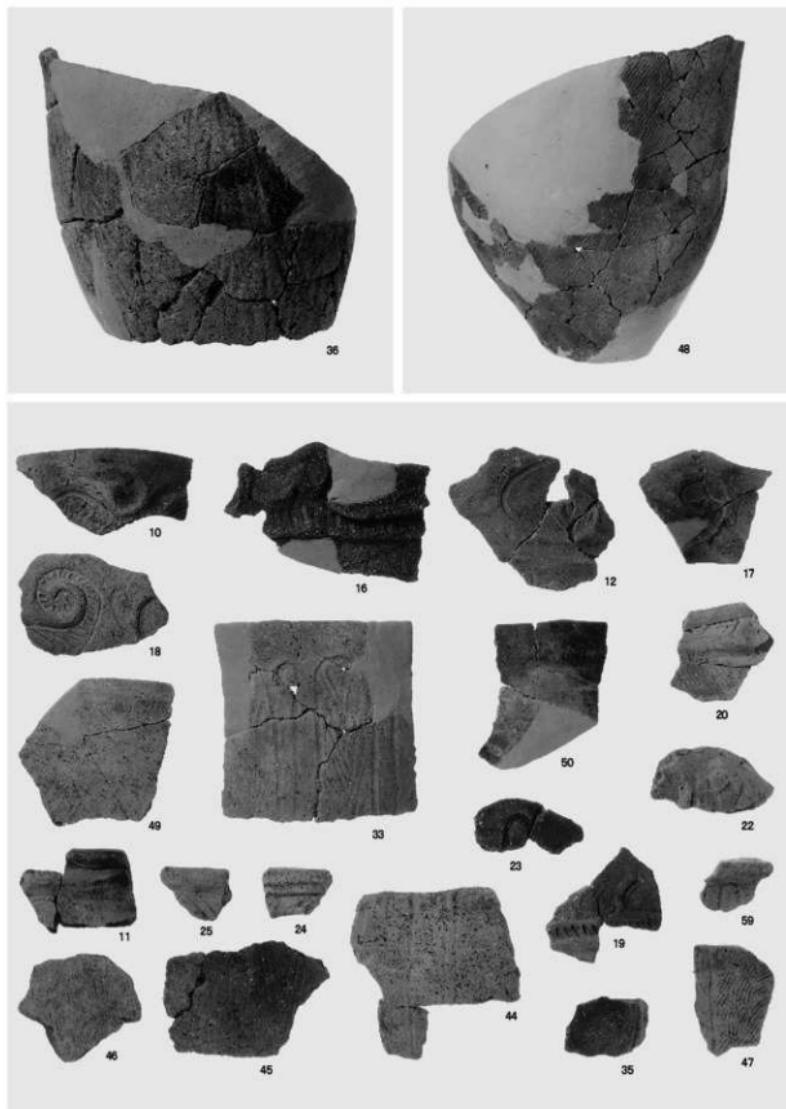


SK3315 (北から)

図版50 旧石器時代及び縄文時代の遺物

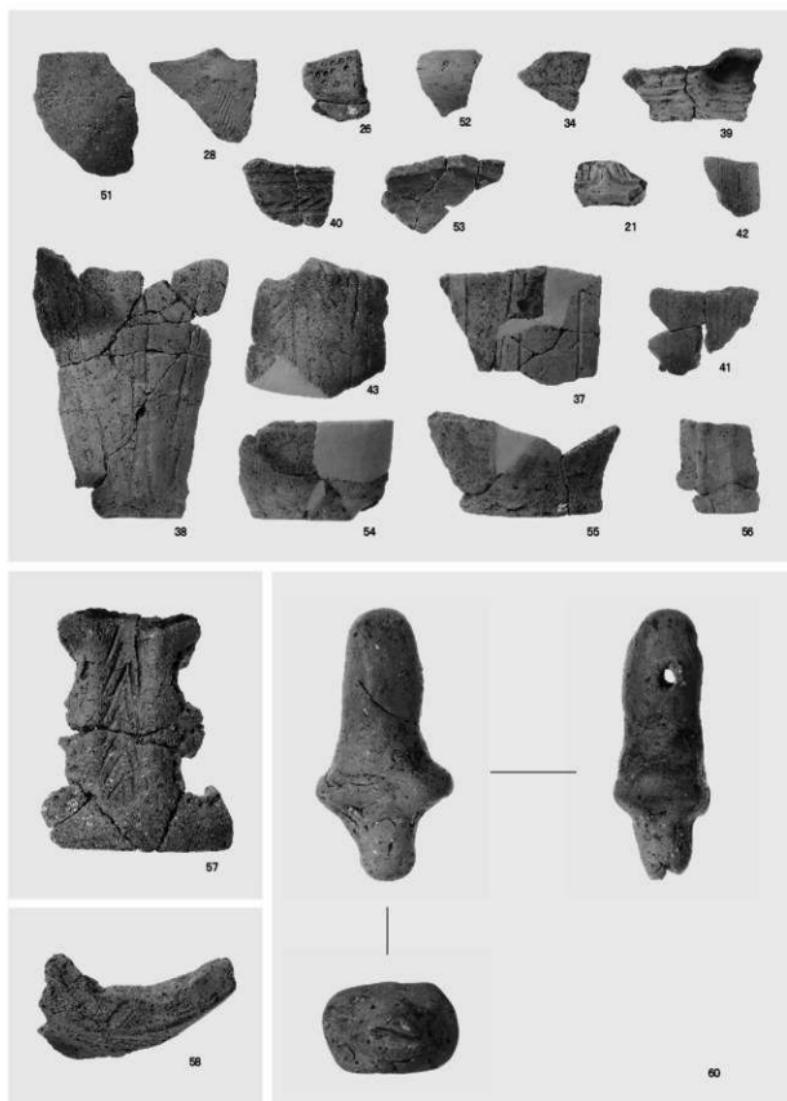


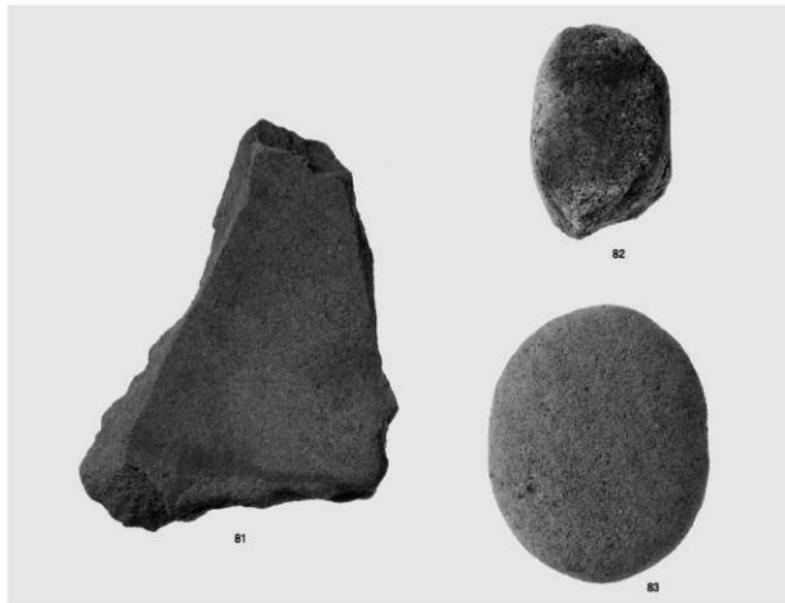
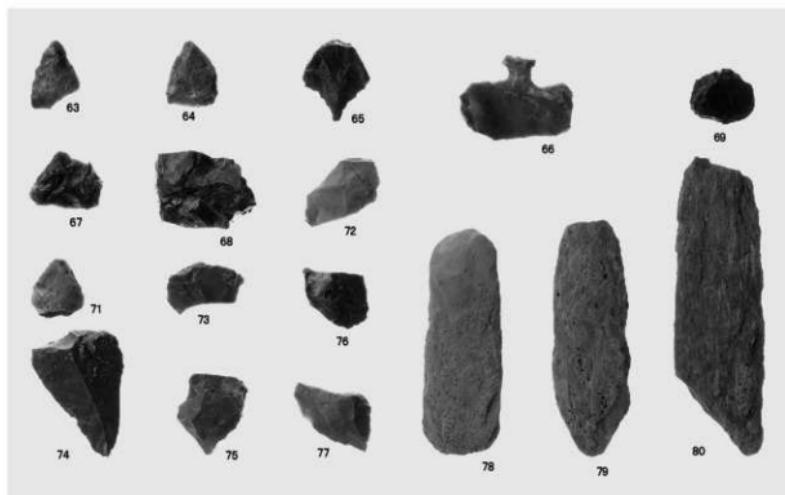
旧石器時代遺物・SH 1 出土遺物①



SH 1 出土遺物②

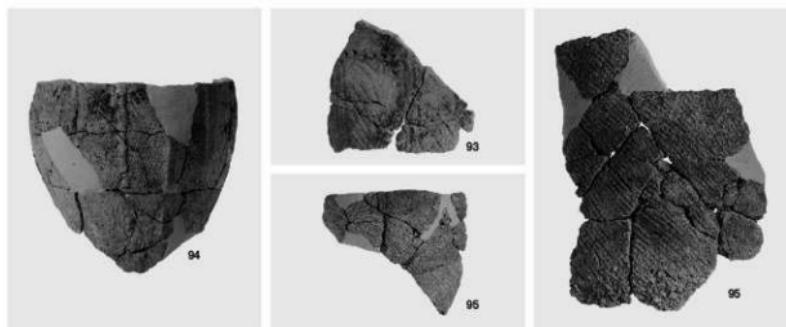
図版52 縄文時代の遺物（2）



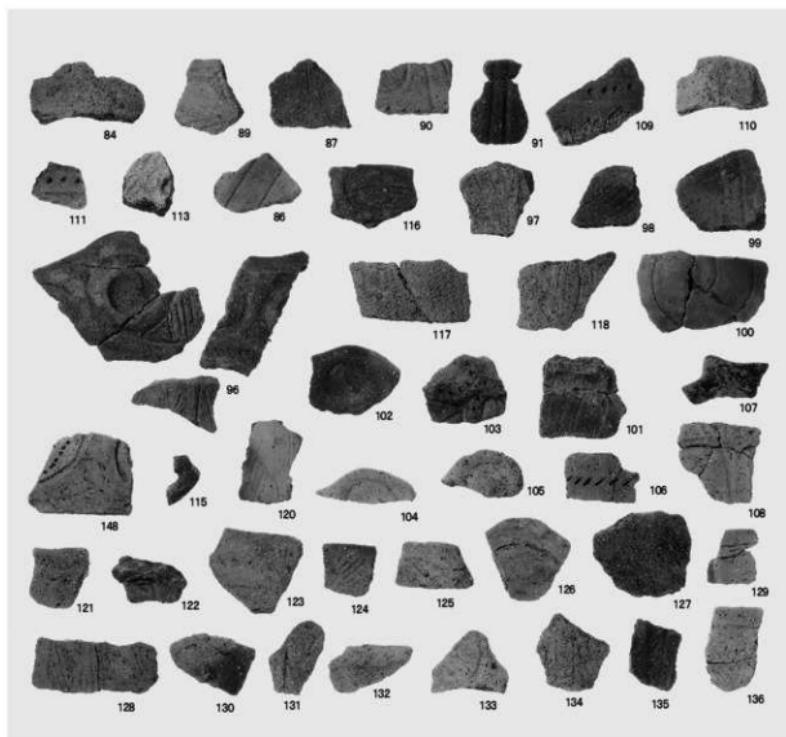


SH 1 出土遺物④

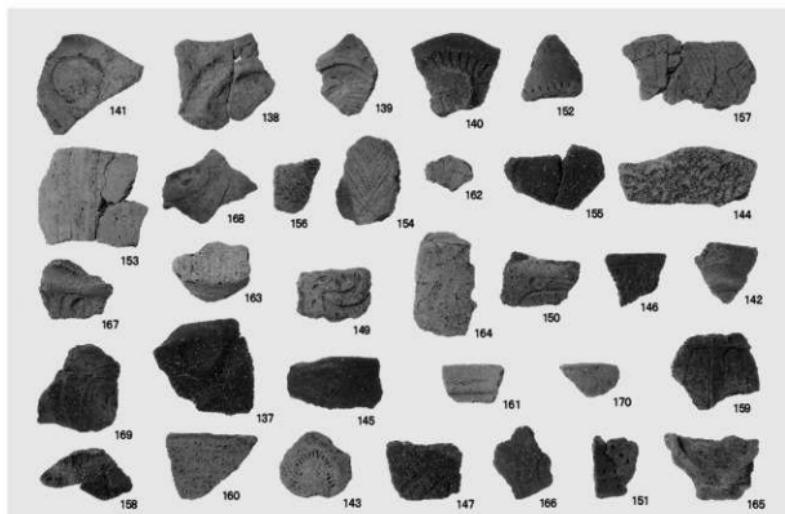
図版54 縄文時代の遺物（4）



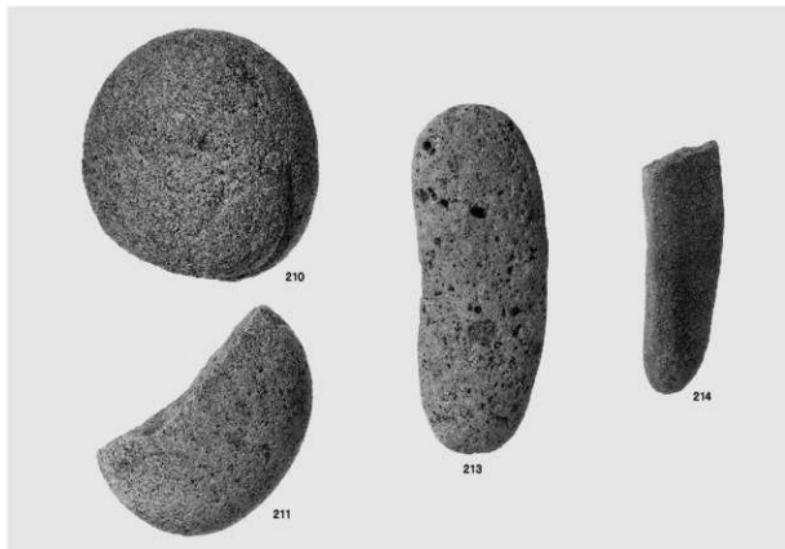
SK15・SK34出土遺物



SP・SK出土遺物

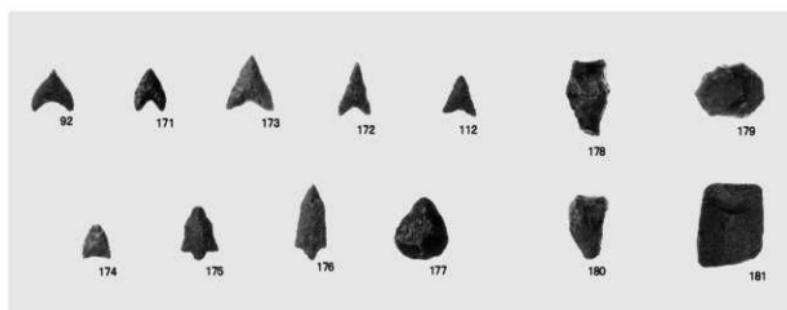


別時期遺構・搅乱・倒木痕・包含層出土遺物

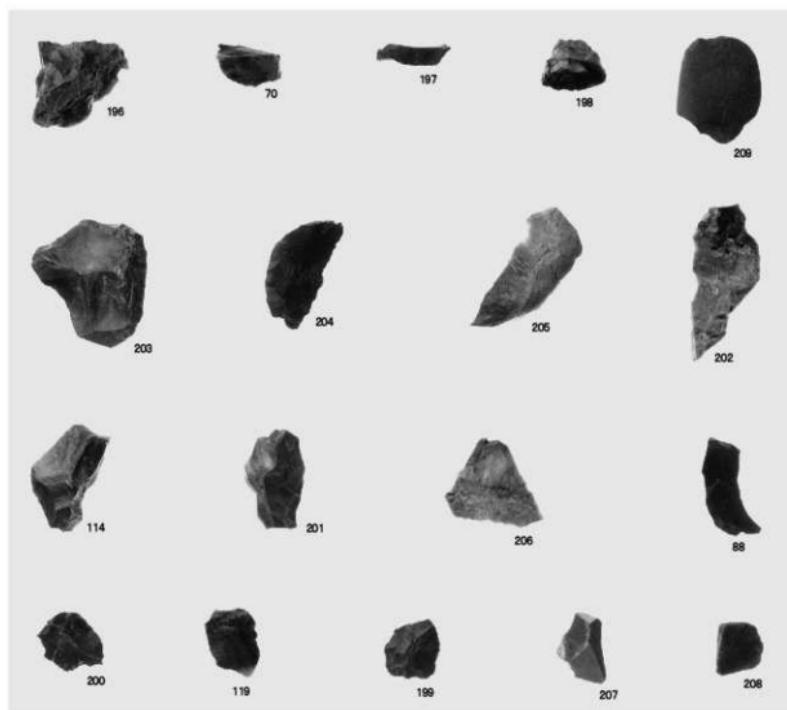


磨石・駁石類

図版56 縄文時代の遺物（6）



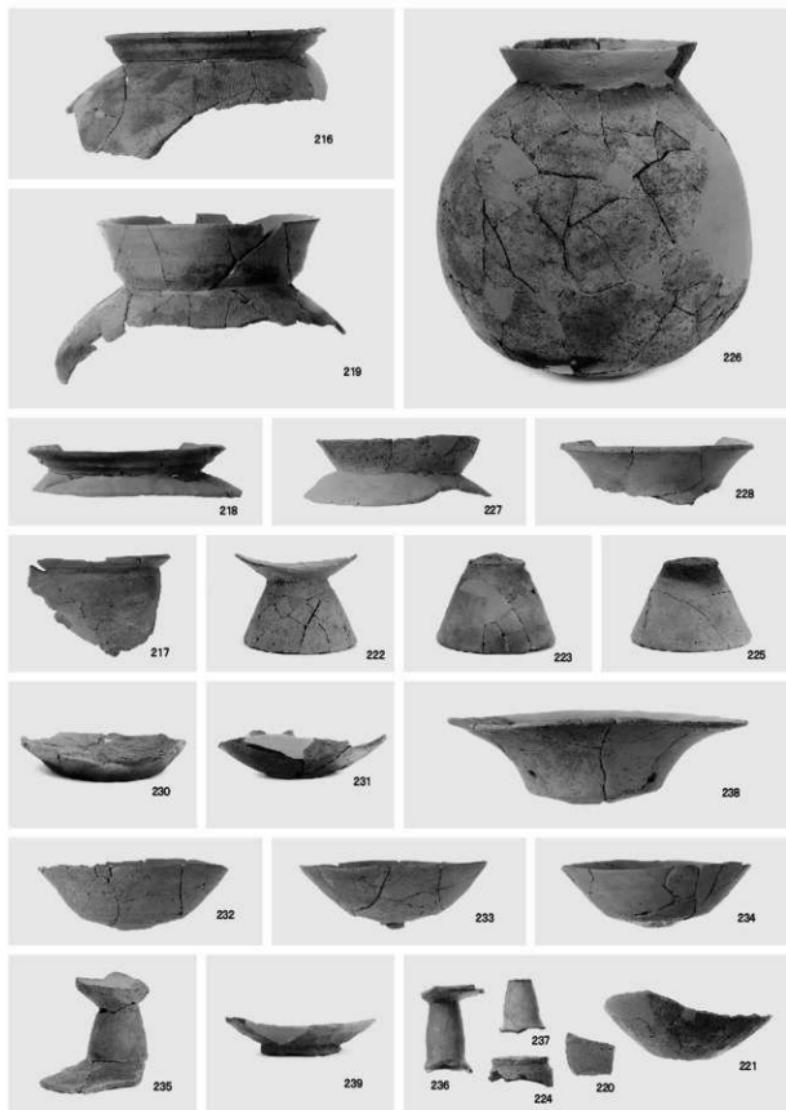
石鏃・石錐・スクレイパー・楔形石器



石核・RF・石錐・MF



図版58 古墳時代前期の遺物（1）



SH 2 出土遺物

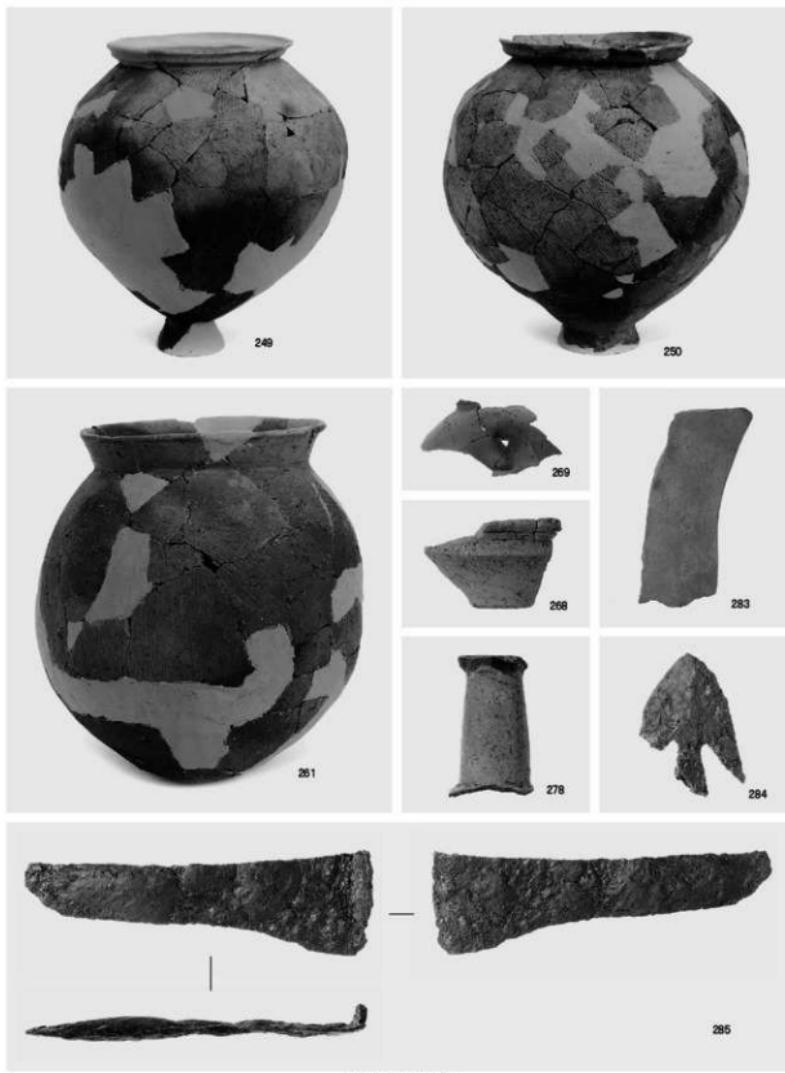


SH 2・3・4・6 出土遺物

図版60 古墳時代前期の遺物（3）



SH 6 出土遺物①



SH 6 出土遺物②

図版62 古墳時代前期の遺物（5）



SH 6・7 出土遺物



SH 8 出土遺物

図版64 古墳時代前期の遺物（7）

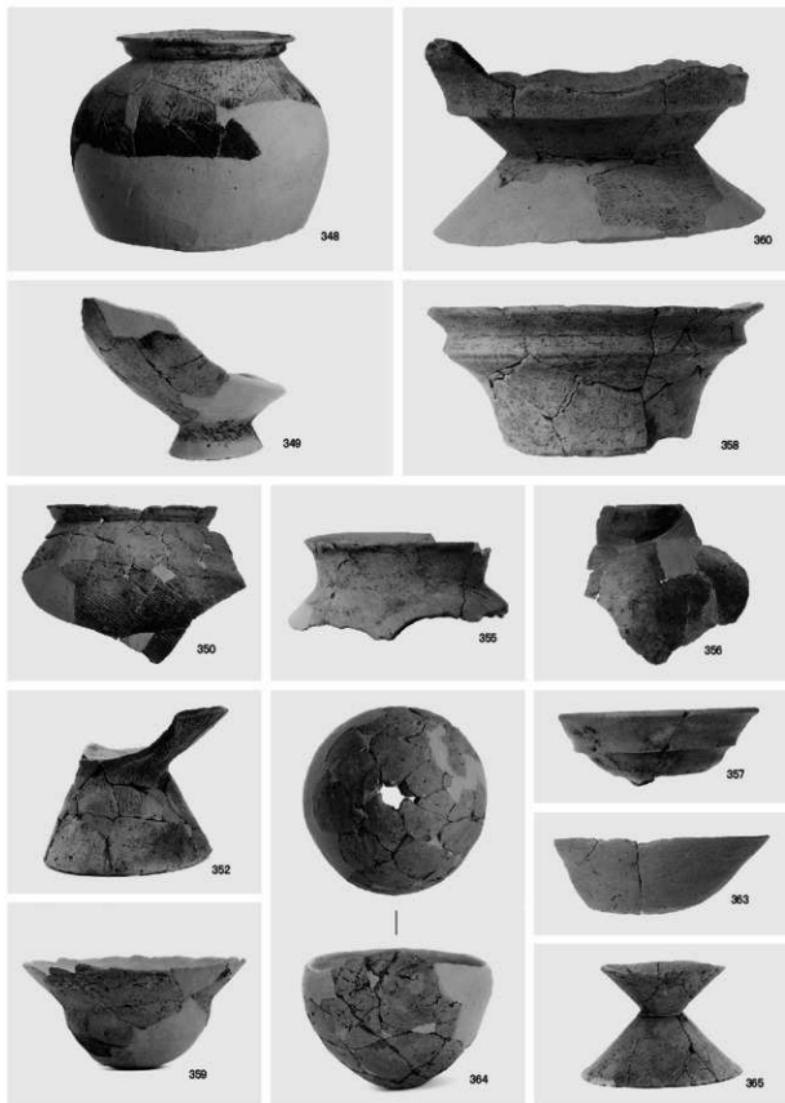


SH 7・8・9 出土遺物

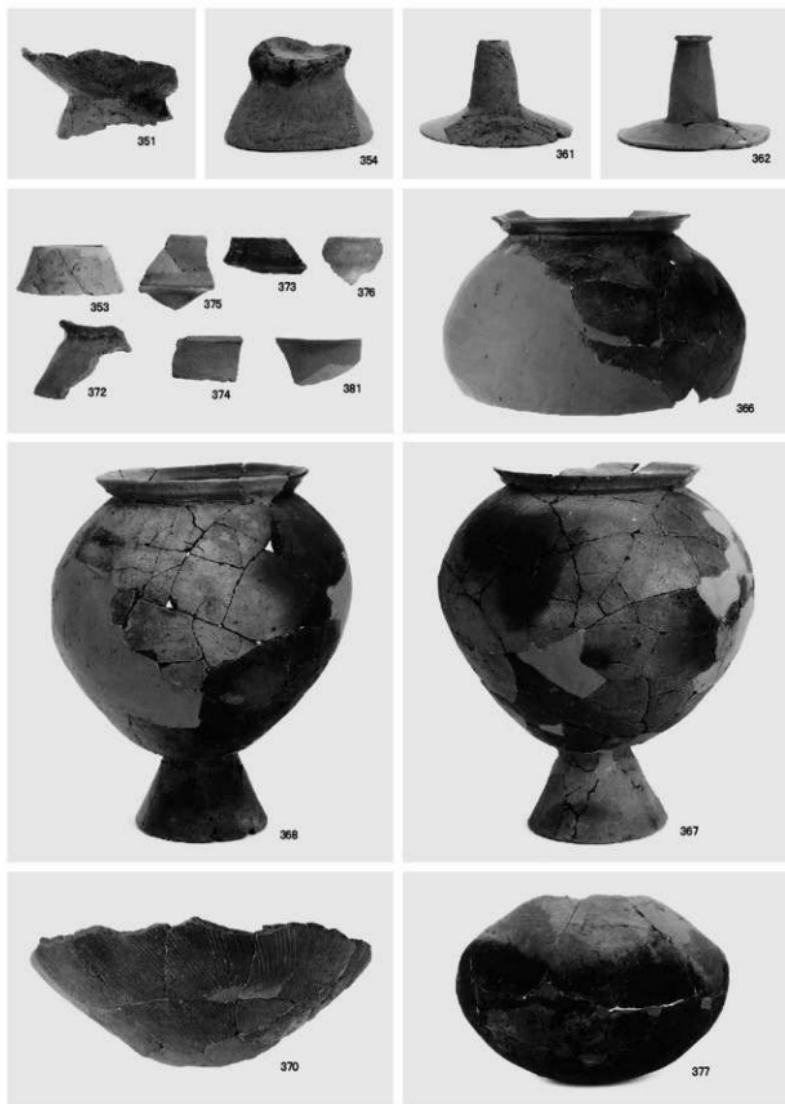


SH 9 出土遺物

図版66 古墳時代前期の遺物（9）

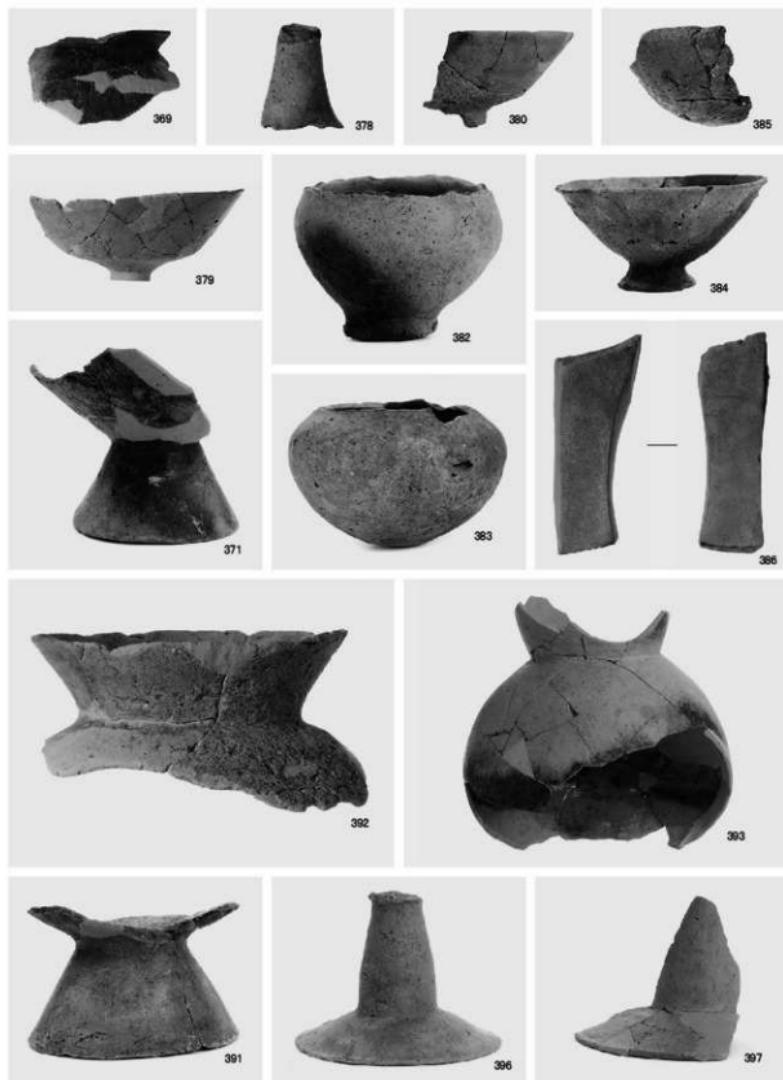


SH10出土遺物



SH10・11出土遺物

図版68 古墳時代前期の遺物（11）

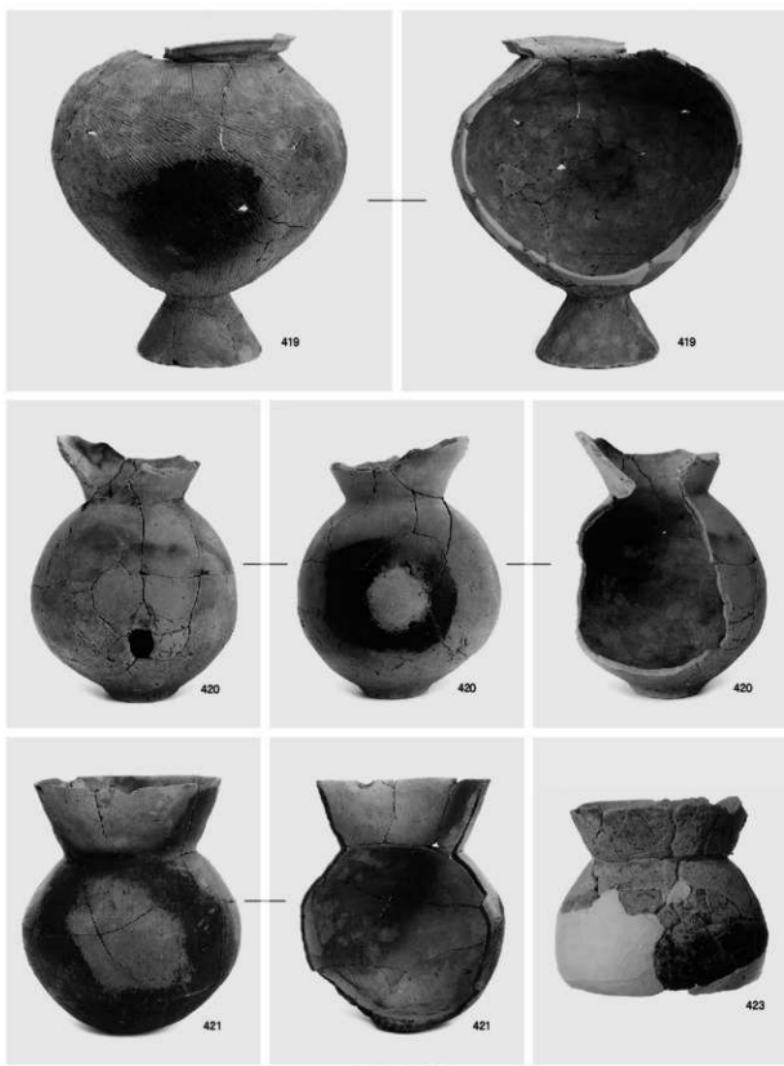


SH11・12出土遺物

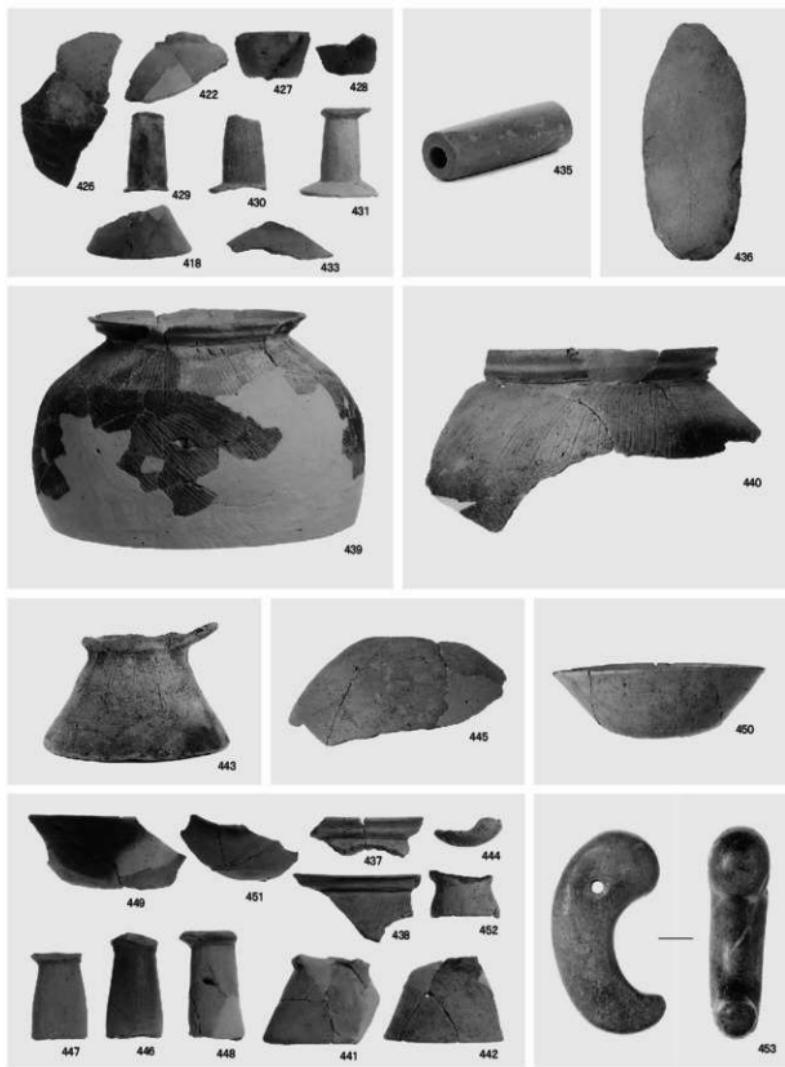


SH12・13・14出土遺物

図版70 古墳時代前期の遺物（13）

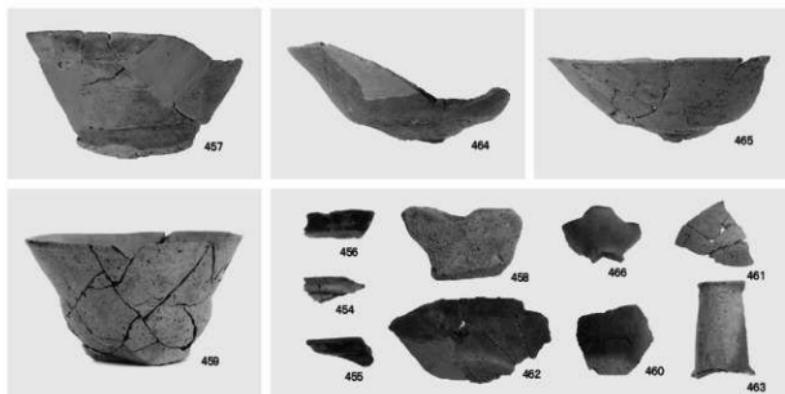


SH14出土遺物

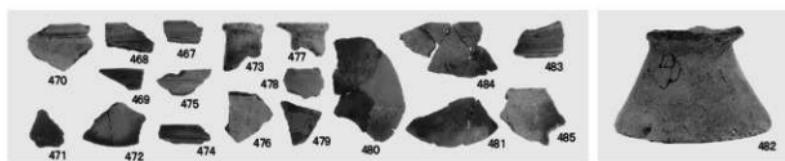


SH14・18出土遺物

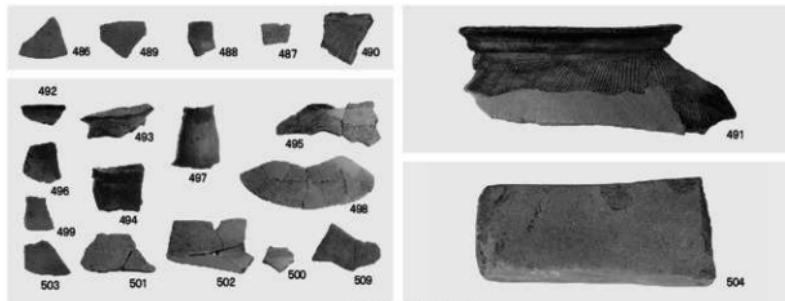
図版72 古墳時代前期の遺物（15）



SH21出土遺物



SB出土遺物



SA・竪穴状造構出土遺物

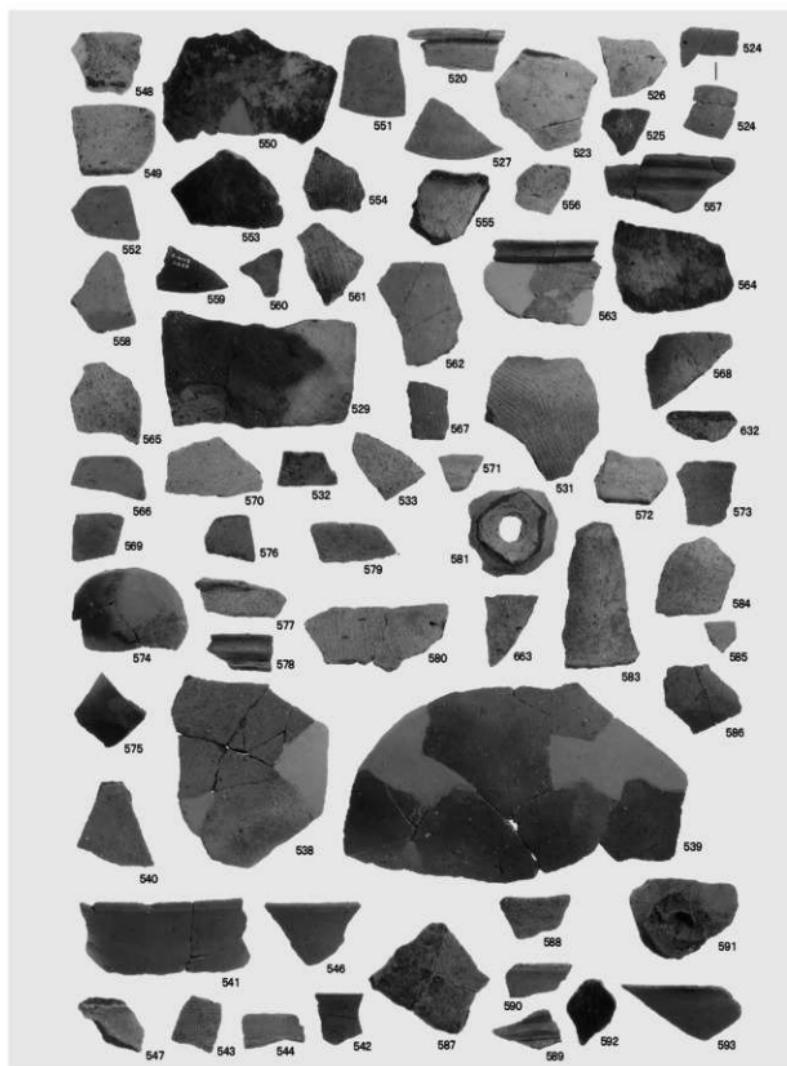


SD・SP出土遺物

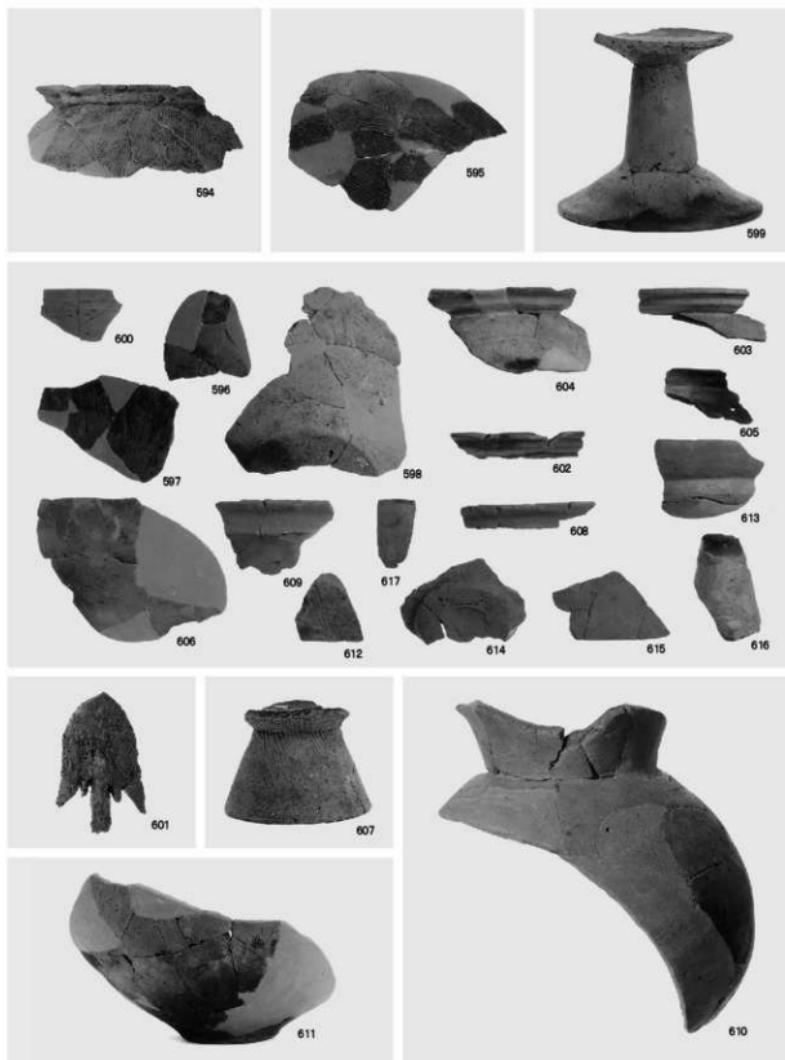


SI・SK 出土遺物

図版74 古墳時代前期の遺物（17）

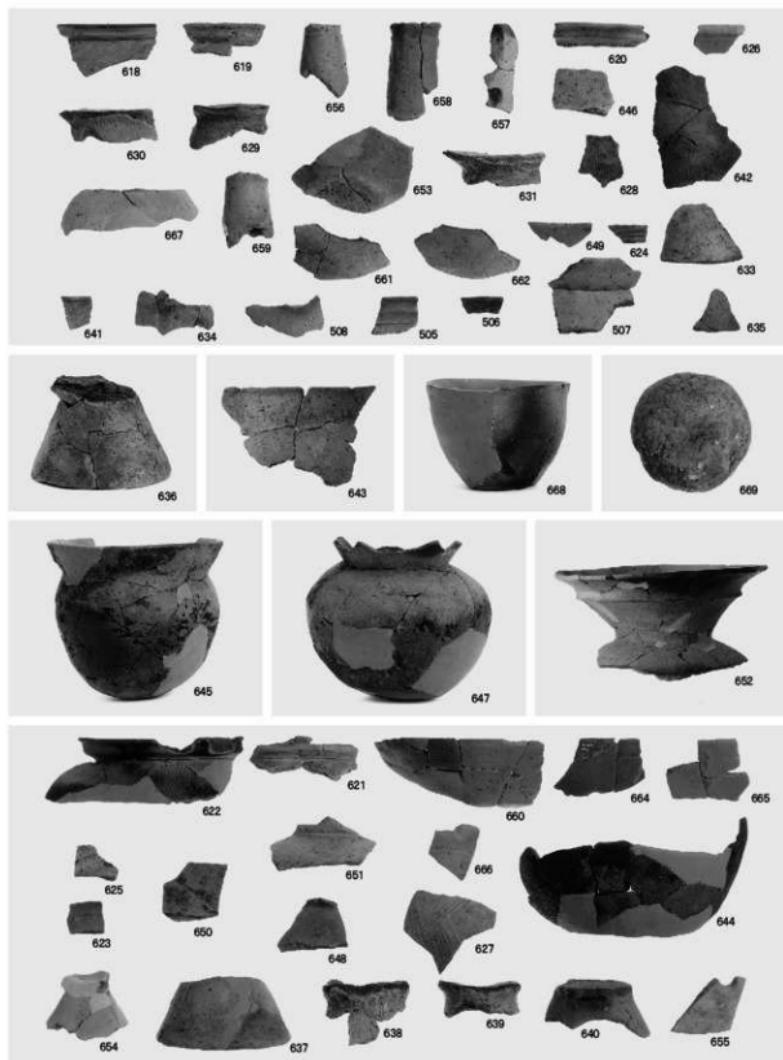


SK出土遺物

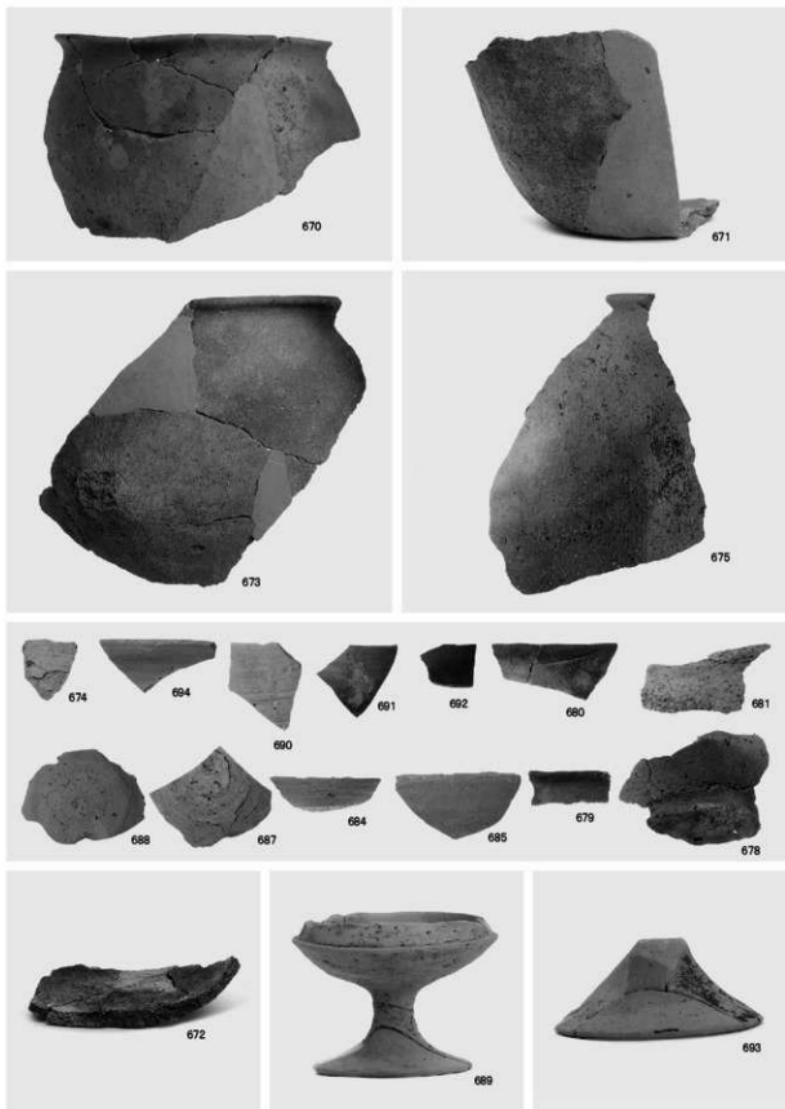


遺物集中区、N21出土遺物

図版76 古墳時代前期の遺物（19）

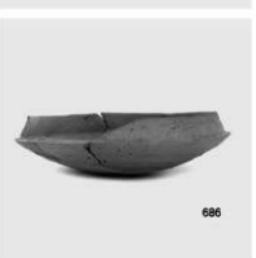
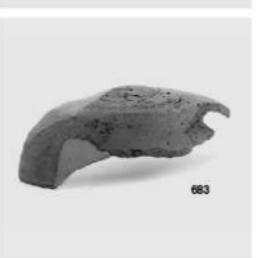
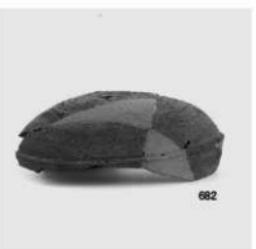


別時期遺構・搅乱・包含層出土遺物

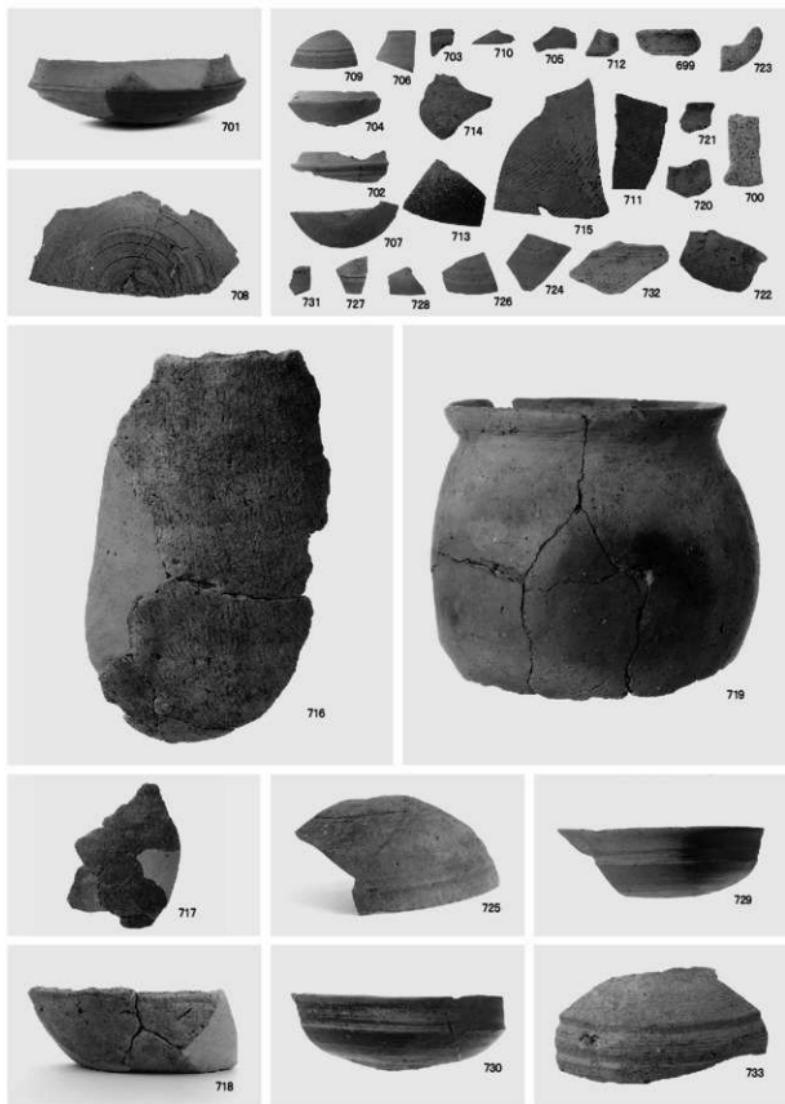


SH15・16出土遺物

図版78 古墳時代後期の遺物（2）

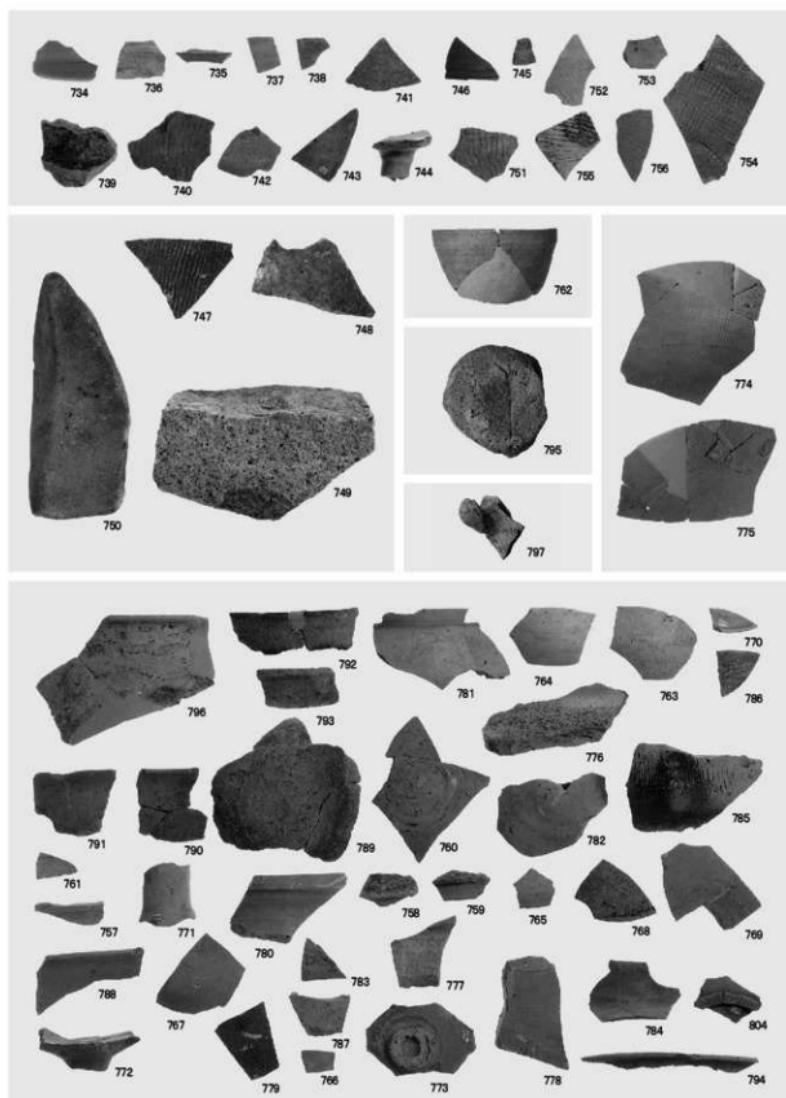


SH16・17出土遺物



SH19・20出土遺物

図版80 古墳時代後期及び古代の遺物



SB・SD・SP・SK・別時期遺構・搅乱・包含層出土遺物

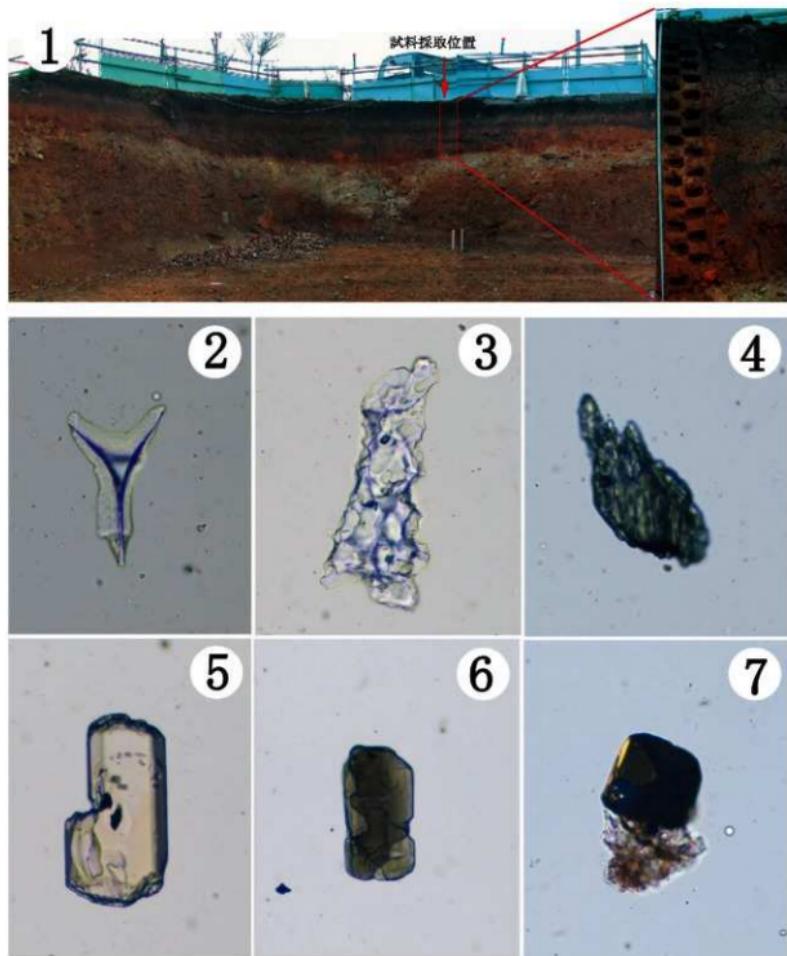


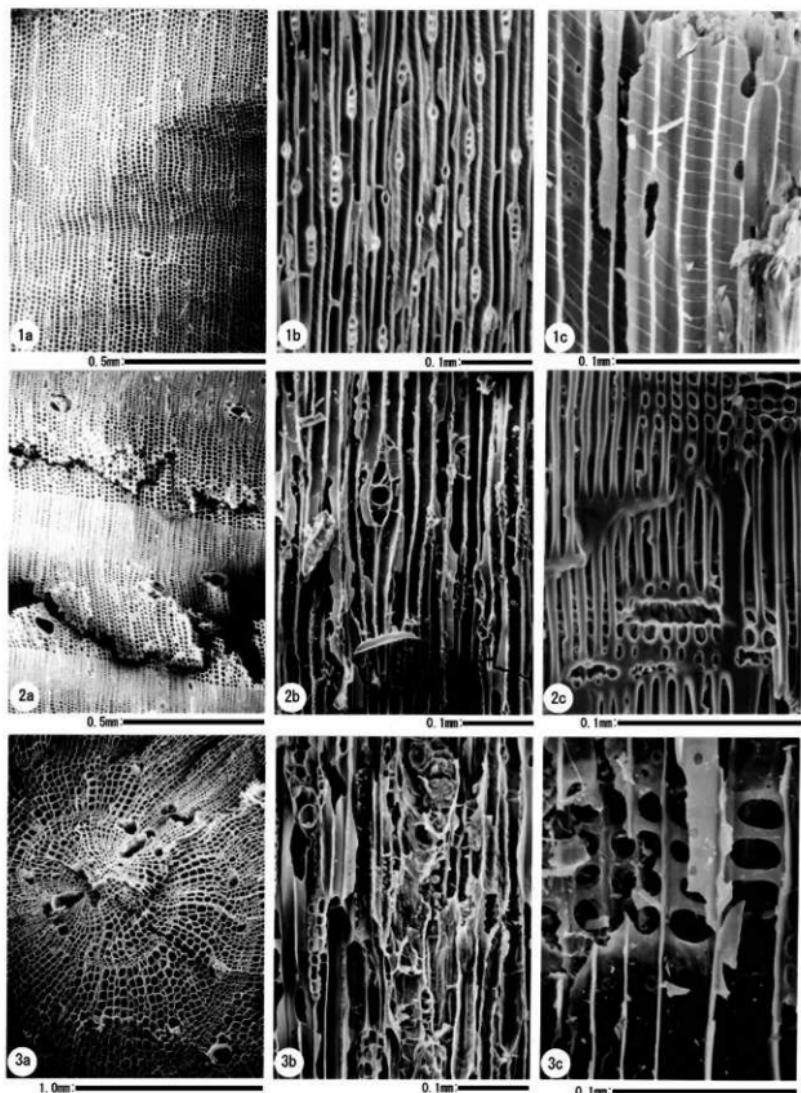
SZ 2・SD31出土遺物



中世の遺物

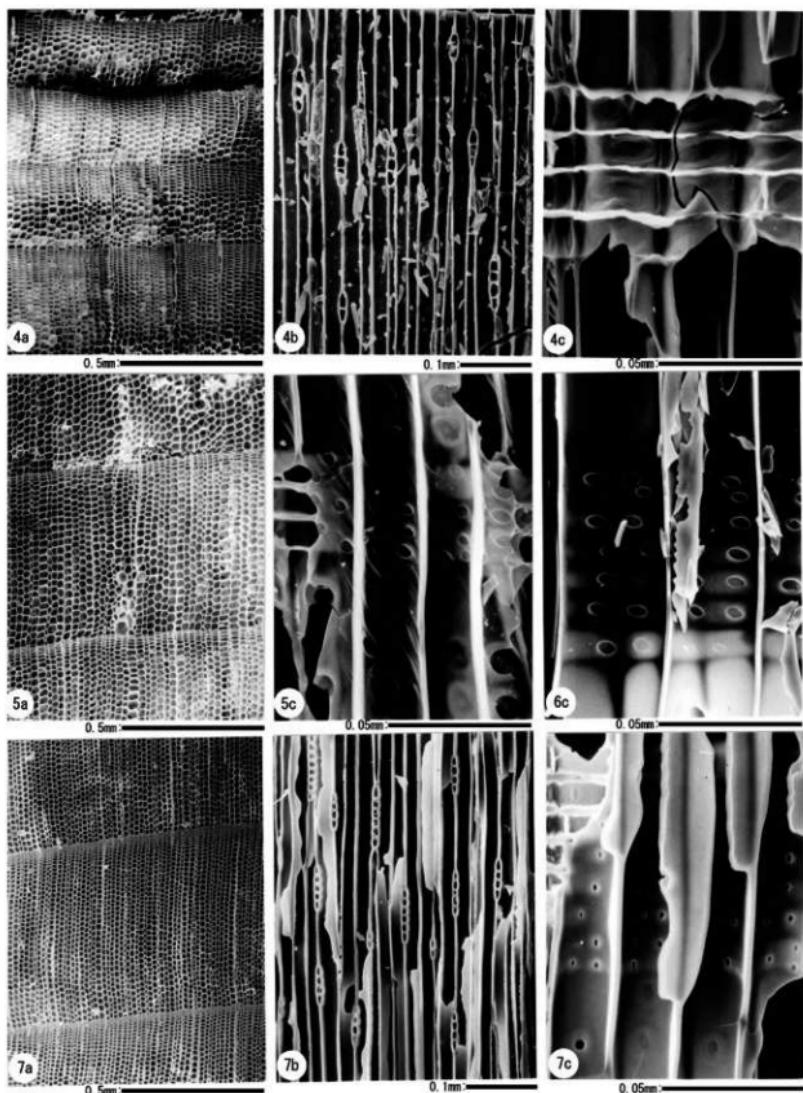
図版82 試料採取状況と堆積物中の鉱物顕微鏡写真



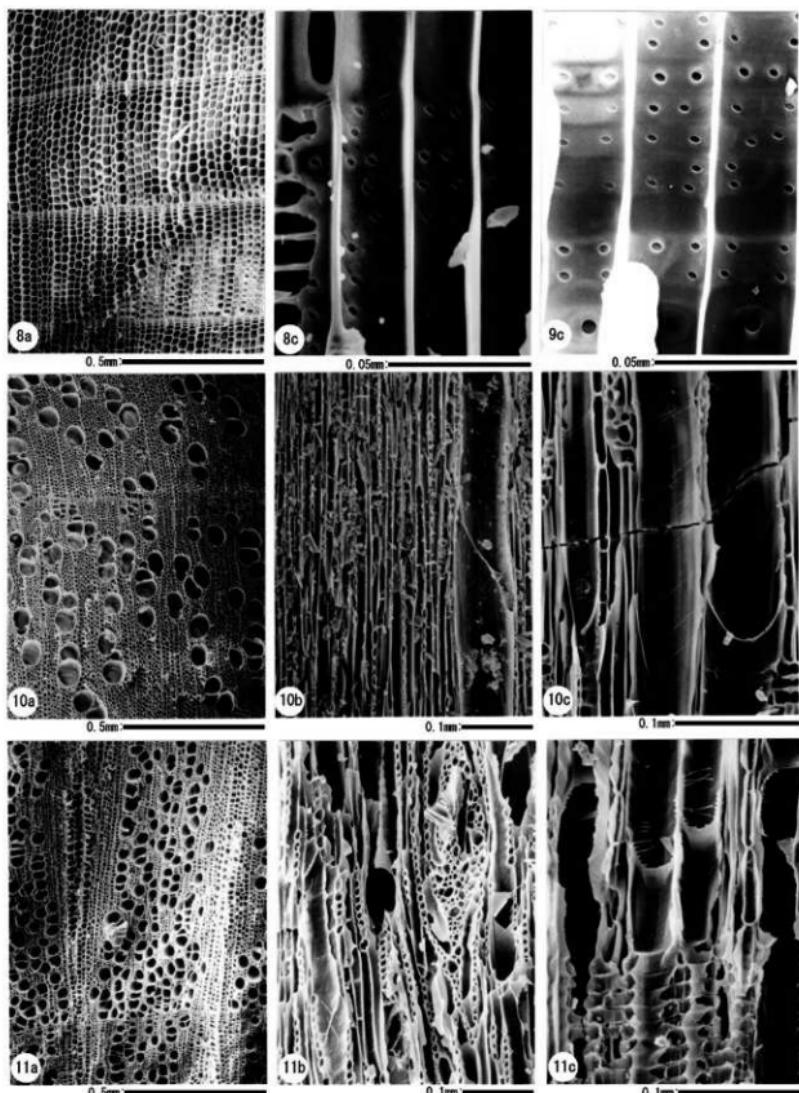


1a-1c : イヌガヤ (樹種No.603) 2a-2c : マツ属複維管束亞属 (樹種No.685)
3a-3c : マツ属 or コウヤマキ 根材 (樹種No.335) a : 横断面 b : 接線断面 c : 放射断面

図版84 岩化材材組織の走査電子顕微鏡写真（2）



4a-4c : コウヤマキ (樹種No.164) 5a-5c : キ (樹種No.73) 6c : キ (樹種No.453)
7a-7c : ヒノキ (樹種No.311) a : 横断面 b : 接線断面 c : 放射断面

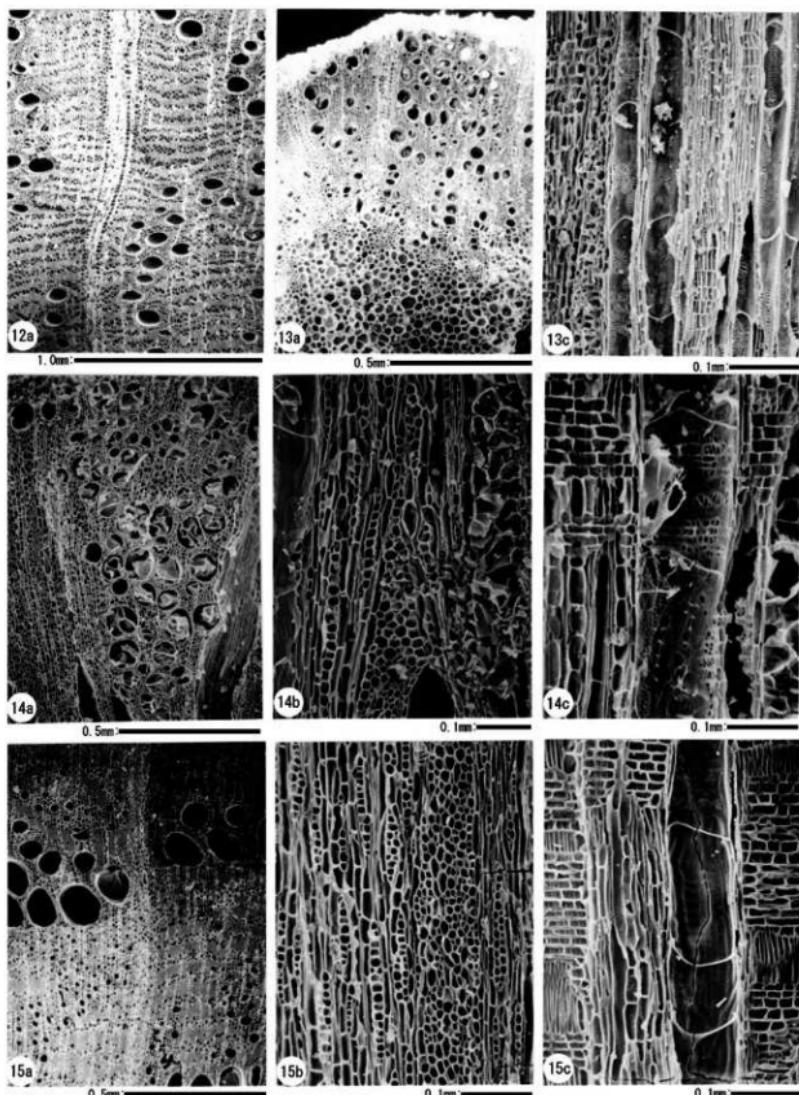


8a・8c : ヒノキ属 (樹種No.583) 9c : ヒノキ属 (樹種No.597 PLD-2440)

10a-10c : イヌシデ節 (樹種No.125-1) 11a-11c : ハンノキ亜属 (樹種No.168)

a : 横断面 b : 接線断面 c : 放射断面

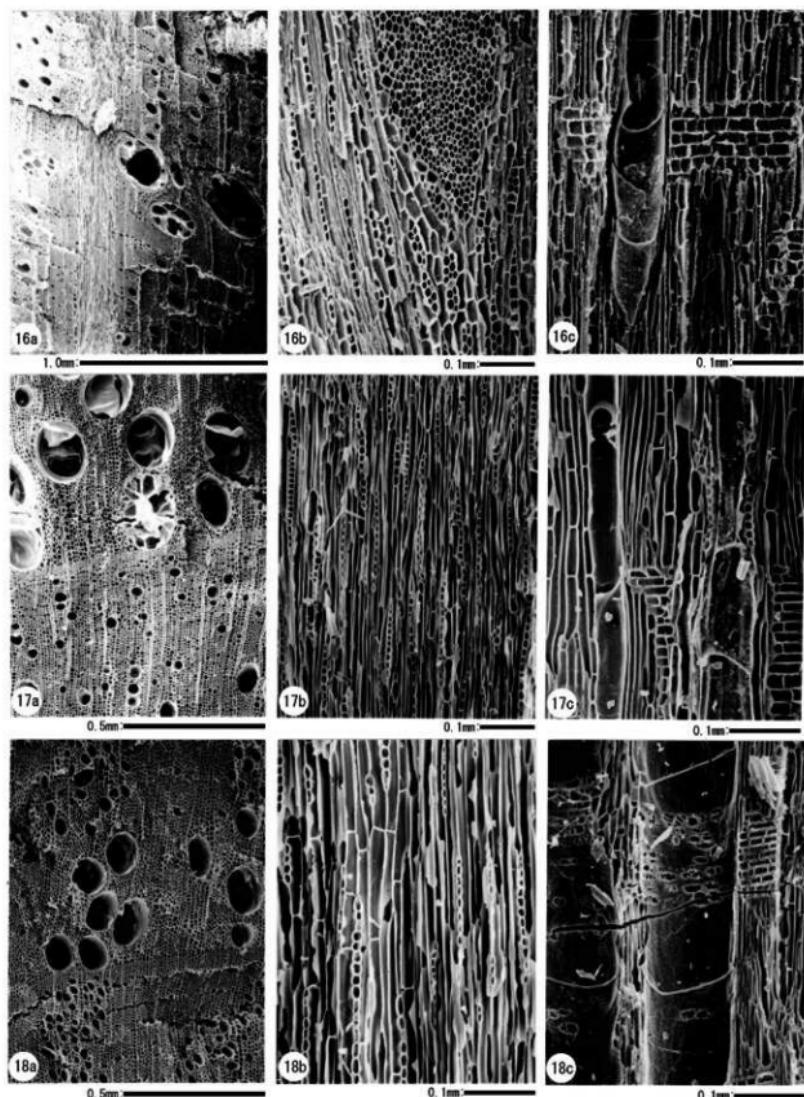
図版86 岩化材材組織の走査電子顕微鏡写真（4）



12a : アカガシ亞属 (樹種No.764-1 PLD-2441)

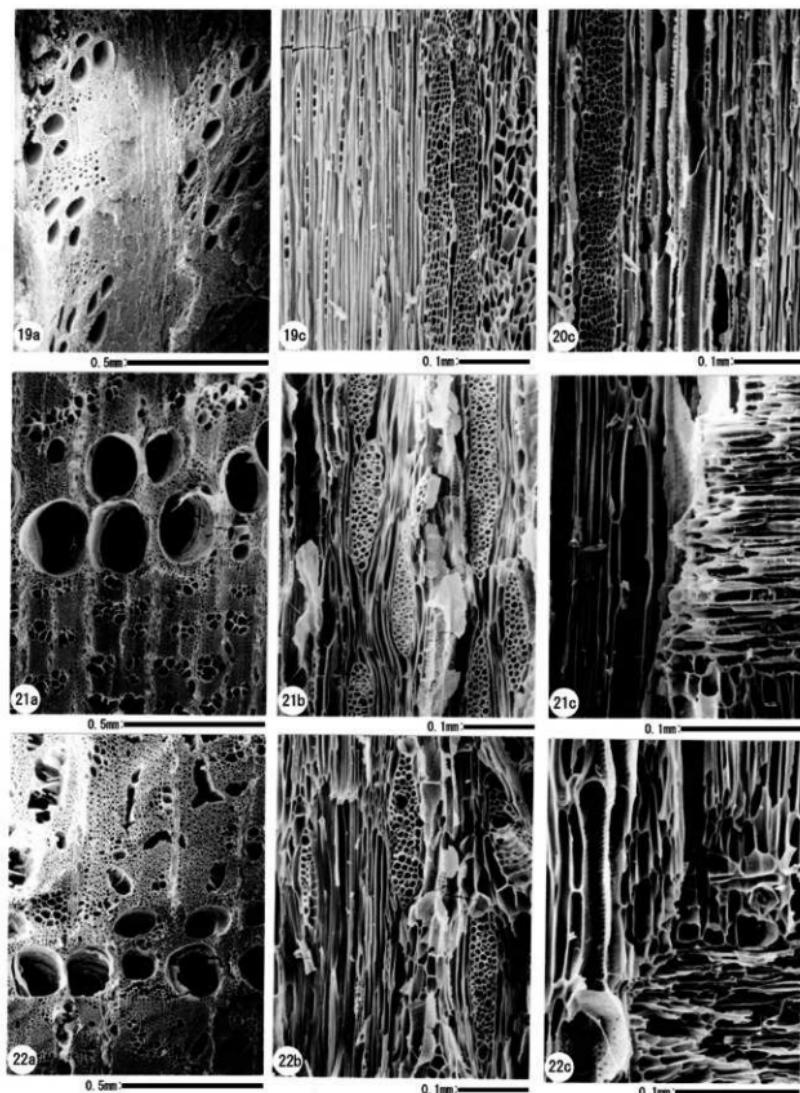
13a・13c : アカガシ亞属 (樹種No.622)

a : 横断面 b : 接線断面 c : 放射断面

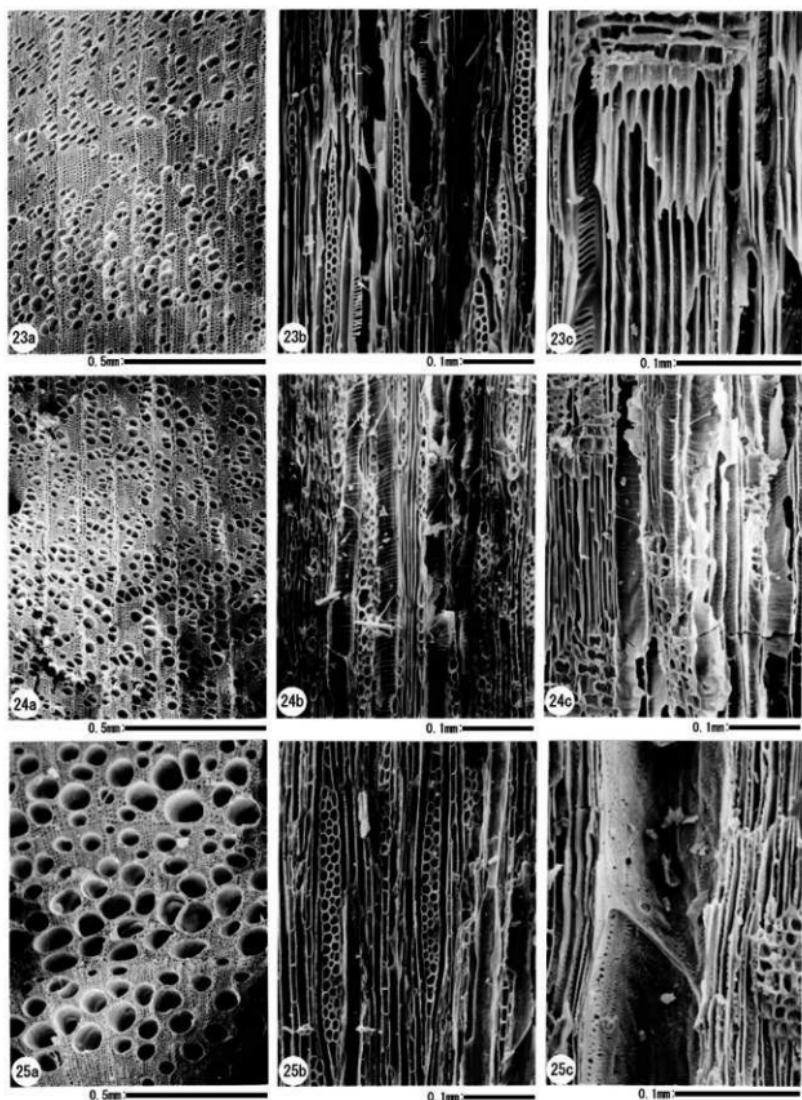


16a-16c : クヌギ節 (樹種No.210) 17a-17c : クリ (樹種No.229) 18a-18c : シイノキ属 (樹種No.810)
a : 横断面 b : 接線断面 c : 放射断面

図版88 岩化材材組織の走査電子顕微鏡写真（6）

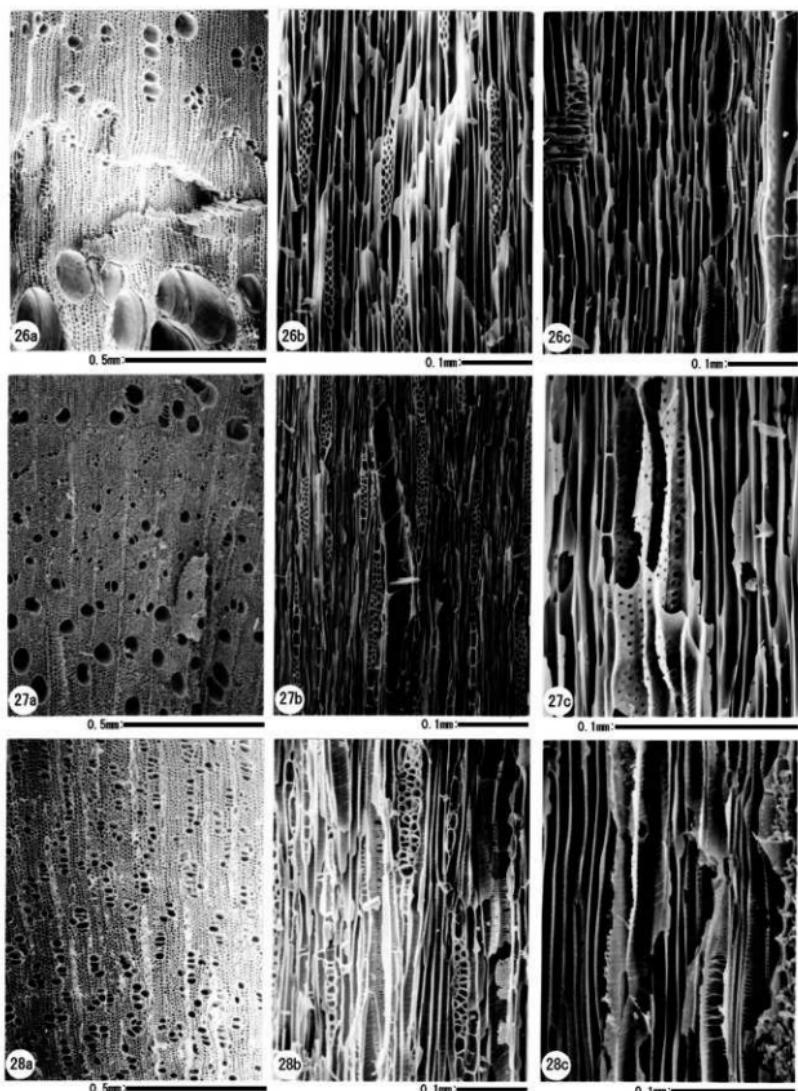


19a・19c : ツブラジイ (樹種No.691-1) 20c : ツブラジイ (樹種No.725-2) 21a-21c : ニレ属 (樹種No.840)
22a-22c : ケヤキ (樹種No.125-1) a : 横断面 b : 接線断面 c : 放射断面

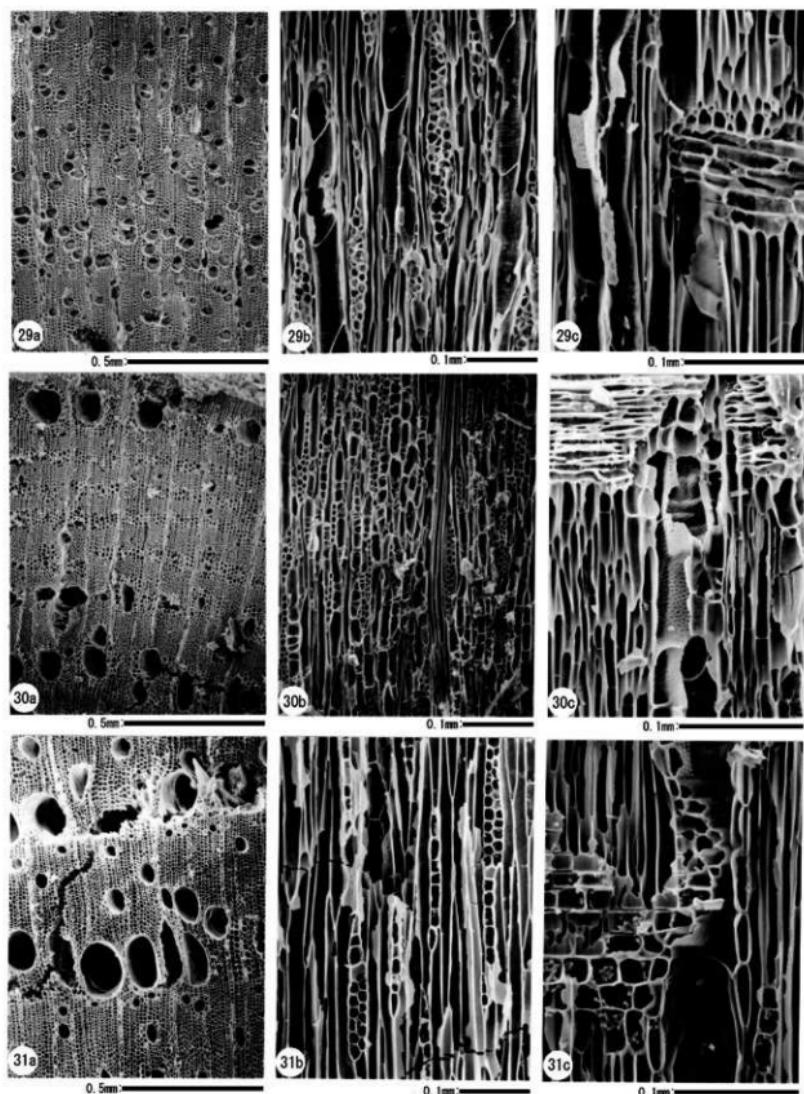


23a-23c : モクレン属 (樹種No.18) 24a-24c : サクラ属 (樹種No.192) 25a-25c : マタタビ属 (樹種No.606)
a : 横断面 b : 接線断面 c : 放射断面

図版90 炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真（8）

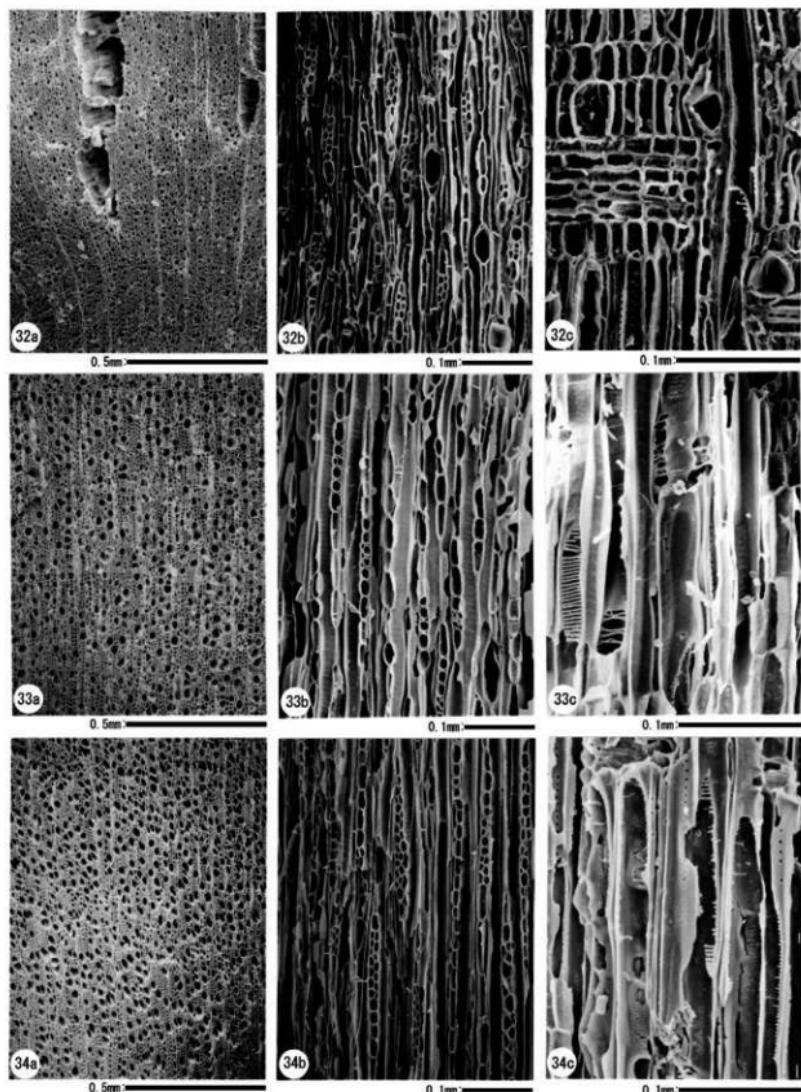


26a-26c : キハダ（樹種No.25） 27a-27c : ヌルデ（樹種No.185） 28a-28c : モチノキ属（樹種No.91）
a : 横断面 b : 接線断面 c : 放射断面

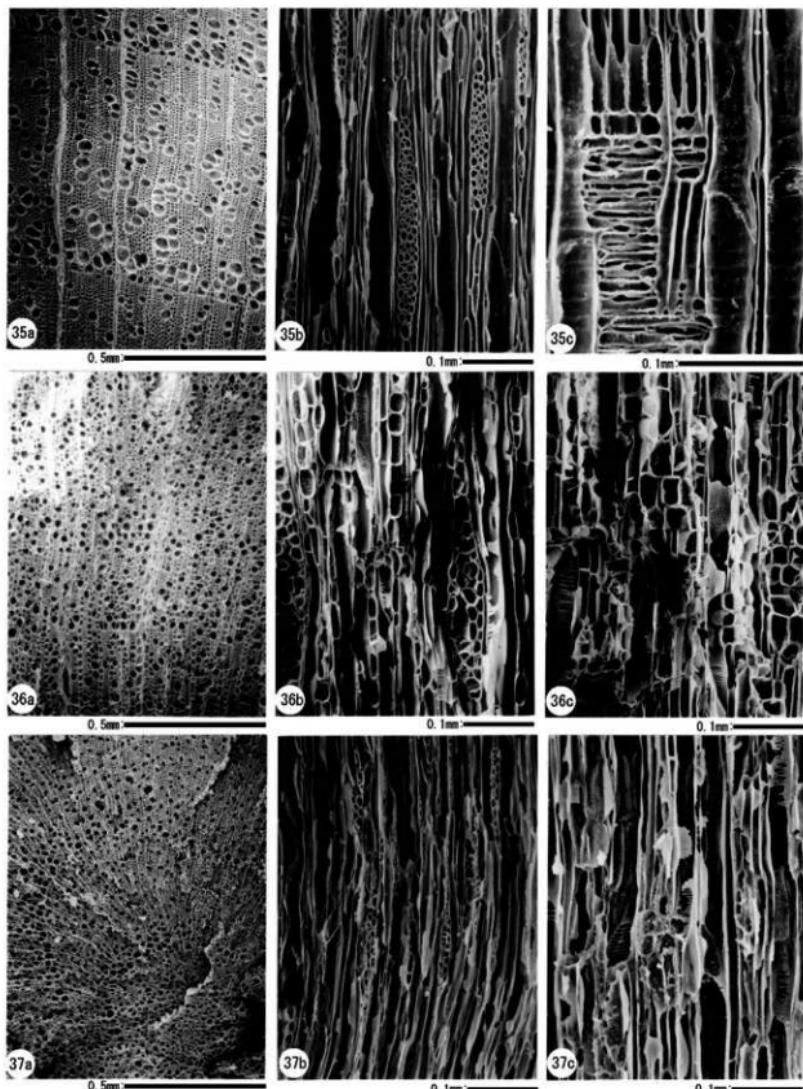


29a-29c : カエデ属 (樹種No.642) 30a-30c : ムクロジ (樹種No.503) 31a-31c : ケンボナシ属 (樹種No.781)
a : 横断面 b : 接線断面 c : 放射断面

図版92 岩化材材組織の走査電子顕微鏡写真 (10)

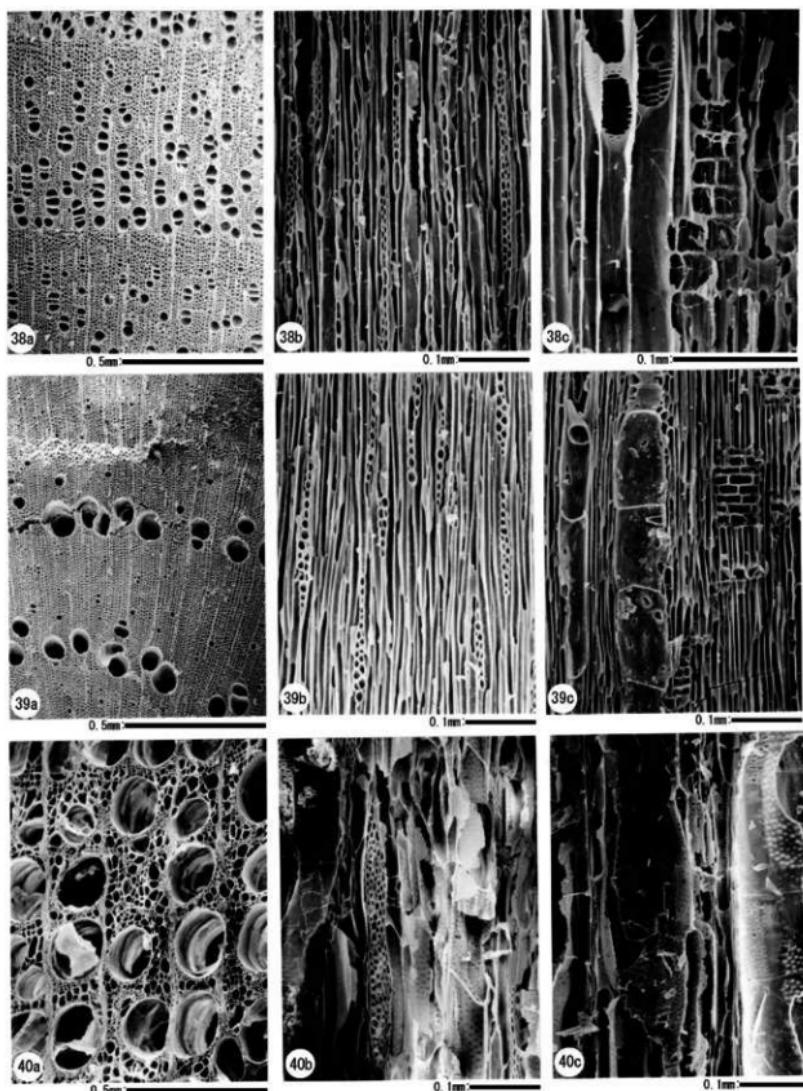


32a-32c : ツバキ属 (樹種No.177) 33a-33c : サカキ (樹種No.121) 34a-34c : ヒサカキ (樹種No.717)
a : 横断面 b : 接線断面 c : 放射断面

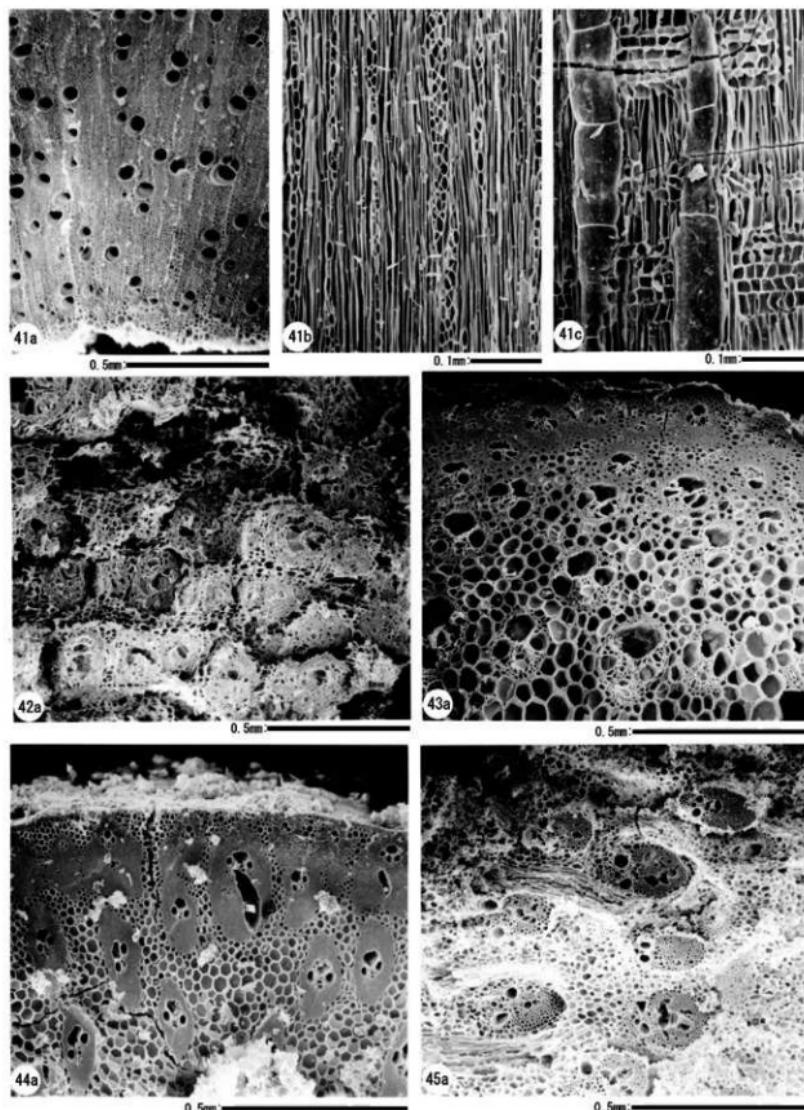


35a-35c : ミズキ属 (樹種No.39) 36a-36c : ツツジ科 (樹種No.326) 37a-37c : ツツジ科 (樹種No.452)
a : 横断面 b : 接線断面 c : 放射断面

図版94 炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真 (12)



38a-38c : エゴノキ属 (樹種No.4) 39a-39c : トネリコ属 (樹種No.175) 40a-40c : 環孔材 A (樹種No.851)
a : 横断面 b : 接線断面 c : 放射断面

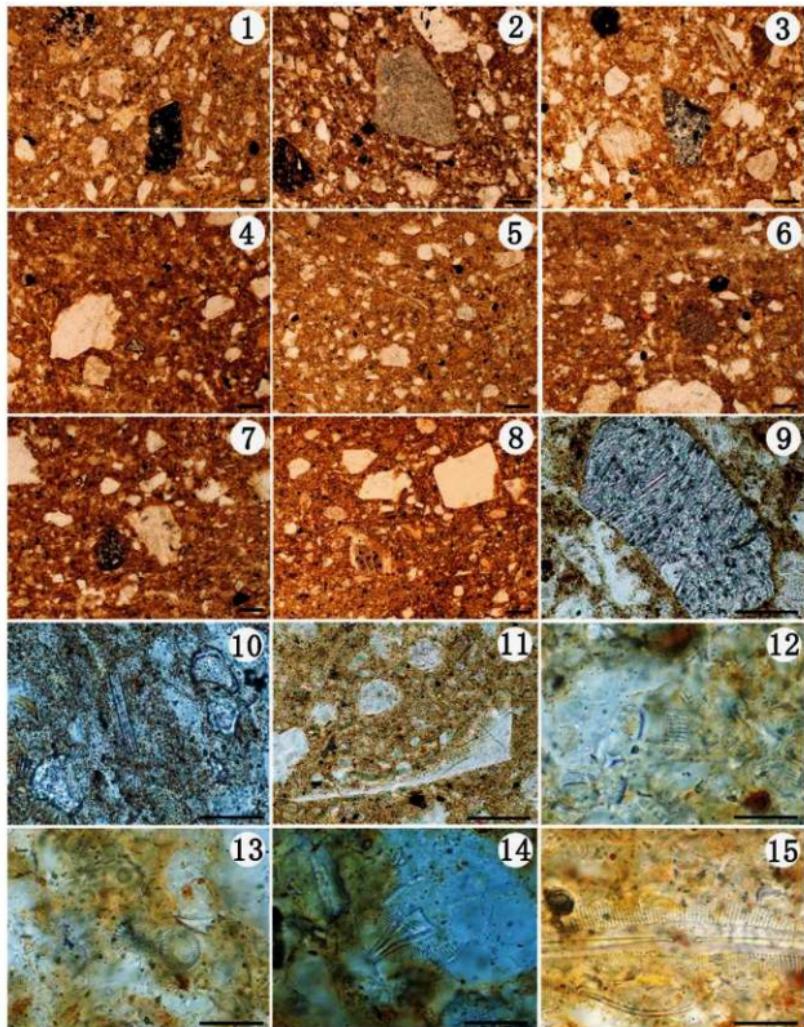


41a-41c : 広葉樹 A (樹種No.350) 42a : 樹皮 (樹種No.51) 43a : ススキ属 (樹種No.552)

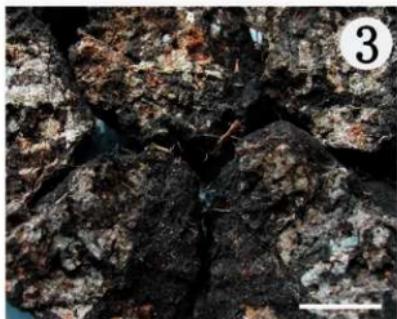
44a : タケ亜科 (樹種No.151-1) 45a : タケ亜科根茎 (樹種No.601-1)

a : 横断面 b : 接線断面 c : 放射断面

図版96 土器胎土と粒子顯微鏡写真



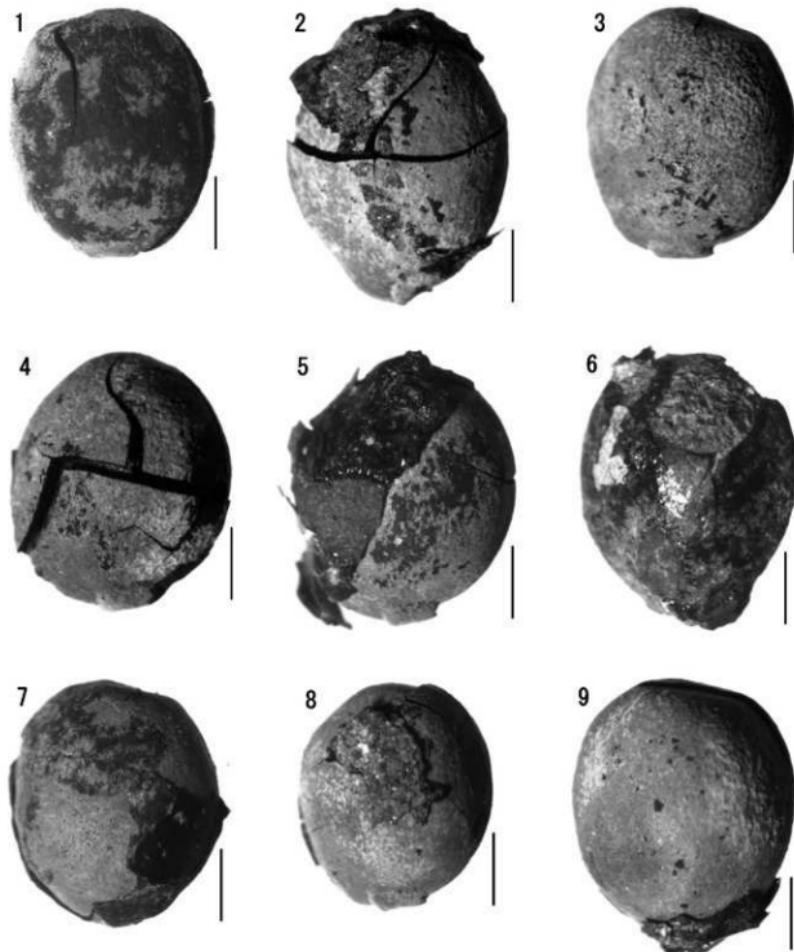
1. No.1 胎土 (スケール : 200 μ m)
2. No.2 胎土 (スケール : 200 μ m)
3. No.3 胎土 (スケール : 200 μ m)
4. No.4 胎土 (スケール : 200 μ m)
5. No.5 胎土 (スケール : 200 μ m)
6. No.6 胎土 (スケール : 200 μ m)
7. No.7 胎土 (スケール : 200 μ m)
8. No.8 胎土 (スケール : 200 μ m)
9. No.2 胎土中の斑晶質 (スケール : 100 μ m)
10. No.5 胎土中の骨針化石 (スケール : 100 μ m)
11. No.5 胎土中のガラス質 (スケール : 100 μ m)
12. No.8 胎土中の珪藻化石 *Melosira ambiguua* (スケール : 20 μ m)
13. No.8 胎土中の珪藻化石 *Cyclotella* 属と *Melosira* 属 (スケール : 20 μ m)
14. No.8 胎土中の珪藻化石 *Diploneis* 属 (スケール : 20 μ m)
15. No.8 胎土中の珪藻化石 *Cymbella* 属 (スケール : 20 μ m)



1. 7号豊穴式住居跡出土粘土塊 (No.9143) 2. 14号豊穴式住居跡出土粘土塊 (No.12848)

3. 14号豊穴式住居跡出土粘土塊 (No.12848) 4. 14号豊穴式住居跡出土粘土塊 (No.12848)

図版98 出土した大型植物化石



1~9. アサ、種子、6号竪穴住居跡/No.7551 (スケールは1mm)

報告書抄録

ふりがな	ひがしのいせき					
書名	東野遺跡					
シリーズ名	岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書					
シリーズ番号	第104集					
編著者名	河合洋尚、藤岡比呂志、長屋幸二					
編集機関	財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター					
所在地	〒502-0003 岐阜市三田洞東1-26-1 TEL058 (237) 8550					
発行年月日	西暦2007年3月1日					
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コ一ド	北緯	東経	調査期間	調査原因
ひがしのいせき 東野遺跡	ぎふけん かわもとぐん 岐阜県加茂郡 さかはまちょう 坂祝町 くろいわやまとじの 黒岩字東野・ おおはせあざごしのかわ 大針字西の川	21501	10002	35° 26° 36°	136° 59° 12°	20030512～ 20040315 20040426～ 20041012 6,470m ²
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
東野遺跡	集落跡	縄文中期 古墳前期 古墳後期 古代	堅穴住居跡 掘立柱建物跡 柱穴列 堅穴状遺構 周堤状遺構 炉跡・竈跡 集石遺構 溝状遺構 土器埋設遺構 柱穴 土坑	22軒 12棟 8条 7基 3基 13基 2基 35条 2基 437基 3297基	縄文土器、土製品、 石器、弥生土器、 土師器、石製品、 須恵器、灰釉陶器、 山茶碗 約2万3千点	古墳時代前期の堅 穴住居跡群、大型 掘立柱建物跡群か らなる、地域の中 心的集落を確認
要約	東野遺跡は、縄文時代中期後葉、古墳時代前期、古墳時代後期、古代の遺構を確認した遺跡である。特筆すべき点は、各時代の比較的短期間のまとめた土器群が出土したことから、それぞれの時代で、短期間に集中して集落を形成していたことである。特に古墳時代前期は、4世紀前半の堅穴住居跡と大型掘立柱建物跡が見つかり、美濃加茂盆地周辺の中でも規模の大きい集落が段丘の縁辺部に広がっていたことが判明した。また、集落跡からの出土例が稀な鉄鏃が堅穴住居跡から出土した。これらの成果から、当遺跡は古墳時代前期には美濃加茂盆地周辺の遺跡の中でも中心的な集落の一つであったと考えられる。					

岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書 第104集

東野遺跡

(第2分冊)

2007年3月1日

編集・発行 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター

岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 ニホン美術印刷株式会社